筑波大学博士 (言語学) 学位請求論文

シリア語における示差的目的語標示に関する実証的研究

原　将吾

2021 年度

筑波大学博士 (言語学) 学位請求論文

シリア語における示差的目的語標示に関する実証的研究

原　将吾

2021 年度

目次

凡例 iii
翻字について iii
グロスに用いる略号一覧 iv

第 1 章 序論 1
1.1. シリア語とは 1
1.2. 本論文で扱う現象 2
1.3. 本論文の目的 5
1.4. 方法 5
1.5. 本論文の射程 9
1.6. 本論文の構成 12

第 2 章 先行研究 13
2.1. Differential Object Marking 13
2.1.1. 概要 13
2.1.2. 諸言語における DOM 17
2.1.3. 有生性・定性の DOM への関与 24
2.2. セム系言語における Differential Object Marking 25
2.3. これまでのシリア語 DOM 研究 32
2.4. 有生性・定性 37
2.4.1. 有生性 37
2.4.2. 定性 39

第 3 章 仮説の提案 43
3.1. 本章の目的 43
3.2. 資料 43
3.3. データ 44
3.4. 議論 55
3.4.1. 4 通りの目的語標示と使用頻度 55
3.4.2. 標識の有無と有生性・定性 55
3.4.3. 2 つの標識の出現条件 72
3.5. 本章のまとめ 73

第 4 章 仮説の検証①：西方言の DOM 75
4.1. 本章の目的 75
4.2. 資料 75
4.3. データ 76
4.4. 議論 79
4.4.1. 目的語標識の使用頻度 79
4.4.2. 標識の有無と有生性・定性 79
4.4.3. 仮説は西方言に拡大できるか 91
4.5. 本章のまとめ 95

第 5 章 仮説の検証②：東方言の DOM 98
5.1. 本章の目的 98
5.2. 資料 98
5.3. データ 99
5.4. 議論 105
5.4.1. 目的語標識の使用頻度 105
5.4.2. 標識の有無と有生性・定性 105
5.4.3. 仮説は東方言に拡大できるか 116
5.5. 本章のまとめ 120

第 6 章 結論と今後の課題 121
6.1. 結論 121
6.2. 今後の課題 124
6.2.1. DOM の記述に関する課題 124
6.2.2. シリア語の Differential Object Agreement 126

参照文献 132

凡例

翻字について

本論文ではシリア語のテキストから例文を引用した箇所が多数存在する。このときの表記は以下の規則に基づいたローマ字表記を行う。

1) 子音字について

子音字は原則として下表の規則に従う。

文字	表記	文字	表記
ܐ	ʔ	ܠ	l
ܒ	b	ܡ	m
ܓ	g	ܢ	n
ܕ	d	ܣ	s
ܗ	h	ܥ	ʕ
ܘ	w	ܦ	p
ܙ	z	ܨ	ṣ
ܚ	ḥ	ܩ	q
ܛ	ṭ	ܪ	r
ܝ	y	ܫ	š
ܟ	k	ܬ	t

ただし母音記号の付されたテキストにおける、長母音の表記に転用された子音字 (読みの母 matres lectionis) と、黙字であることを示す記号が付された子音字についてはこの限りではなく、いずれも表記しない。

2) 母音について

母音は母音記号の付されたテキストからの例でのみ表記する。その際は下表の規則に従う。なお下表では母音記号の土台としてܒ (b) を用いる

母音記号	表記
ܒܰ	a
ܒܳ	ā
ܒܶ	e
ܒܹ	ē

母音記号	表記
ܝ	ī
ܘ	ū
ܐ	ō

その他の補助記号については煩雑となるため、本論文の翻字では省略する。

また先行研究からの引用については、すでにローマ字化されているものは原点の表記に従い、シリア文字で提示されたものについては上記の規則に従う。

グロスに用いる略号一覧

1/2/3 ……1st/2nd/3rd person (1/2/3 人称)
ACC ……Accusative (対格)
ActPtc ……Active participle (能動分詞)
APPL ……Applicative (適用態)
AUX ……Auxiliary (助動詞)
C ……Complementizer (補文標識)
CAUSE ……Causative (使役)
CONJ ……Conjunction (接続詞)
COORD ……Coordination (等位)
COP ……Copula (コピュラ)
CSTR ……Construct state (コンストラクト)
DF ……Definite (定)
DIM ……Diminutive (指小辞)
ERG ……Ergative (能格)
F ……Feminine (女性)
GEN ……Genitive (属格)
IMPF ……Imperfect (未完了)
IMPR ……Imperative (命令)
IND ……Indicative (直説法)
INDF ……Indefinite (不定)
INF ……Infinitive (不定詞)
ITER ……Iterative (反復)
M ……Masculine (男性)
NEG ……Negative (否定)
NOM ……Nominative (主格)

NPST ……Non-past (非過去)
OBJ ……Object (目的語)
OM ……Object marker (目的語標識)
PART ……Partitive (分格)
PassPtc ……Passive participle (受動分詞)
PF ……Perfect (完了)
PL ……Plural (複数)
PN ……Proper noun (固有名詞)
PROG ……Progressive (進行)
PST ……Past (過去)
Ptc ……Participle (分詞)
REL ……Relative (関係詞)
SBJ ……Subject (主語)
SG ……Singular (単数)
SM ……Subject marker (主語標識)

第 1 章 序論

1.1. シリア語とは

シリア語 (Syriac) とは、アフロ・アジア語族セム語派に属するアラム語 (Aramaic) という言語の変種のひとつである。アラム語は紀元前 10 世紀から現代までの約 3000 年の歴史を持ち、その時代や地域、使用された共同体の宗教などによって、様々な変種が確認される言語である。これらアラム語の諸変種をまとめるとおよそ以下のようになる (cf. Akopian 2017: 57-148)。

古アラム語 (Old Aramaic) は紀元前 10 世紀から 8 世紀の間に刻まれた数々の碑文によって知られる、最古の段階のアラム語である (Akopian 2017: 58-65)。これらの碑文はシリアを始めとした中東の各地で発見されている (cf. Akopian 2017: 58-65, Fales 2011)。

帝国アラム語 (Imperial Aramaic) は紀元前 7 世紀から 4 世紀にかけてのアラム語で、新アッシリア、新バビロニア、そしてアケメネス朝ペルシアといった “帝国” で公用語として用いられたことから「帝国アラム語」または「公用 (Official) アラム語」という呼称が与えられている (Akopian 2017: 66)。

中期アラム語 (Middle Aramaic) は紀元前 3 世紀から紀元後 2 世紀にかけてのアラム語を言う。この頃からアラム語は複数の変種に分化していくことになるが、これらの諸変種は大きく東アラム語と西アラム語という 2 つの変種群に分けられるようになる (Akopian 2017: 84-5)。

紀元後 3 世紀以降のアラム語は後期アラム語 (Late Aramaic) と呼ばれる。この時代には、例えばいわゆる未完了形と呼ばれる、接周辞 (circumfix) によって活用する動詞形式の 3 人称男性単数形の語頭に現れる子音は、西アラム語では y-となる (e.g. yqtl 「彼は殺すだろう」) が、東アラム語では n-で現れる (e.g. nqtl 訳は同じ) といった具合に、東西アラム語の区別がより明瞭に現れてくる (Akopian 2017: 119)。

現代アラム語 (Modern Aramaic) は文字通り現在話し言葉として用いられているアラム語である。後期アラム語の時代にあった東西の分化は現代語でも維持されており、シリア西部・ダマスカス郊外に位置するマアルーラ (Maalula)、バフア (Bakhʻa)、ジュブアディン (Jubaʻdin) の 3 つの町[1]で話される現代西アラム語と、トルコ東部やイラク北部、イラク南部、イラン南西部などに複数の変種が話される現代東アラム語に分けることができる (Akopian 2017: 427-435)。

---

[1] ローマ字による表記は資料によって異なる。例えば Arnold (2011) ではそれぞれ Maʻlūla、Baxʻa、Jubbʻadīn となっている (Arnold 2011: 685)。

本研究が扱うシリア語は特に古典シリア語 (Classical Syriac) と呼ばれ、後期東アラム語のひとつと位置づけられる。この言語は話し言葉としては 3〜4 世紀ごろから 7 世紀ごろの間に用いられたほか、書き言葉としてはその後も用いられ続け、特に 13〜14 世紀まではバルヘブラエウス (Barhebraeus, 13 世紀) などの、この言語による著作家がよく知られている (Healey 2011: 643-644, Brock 1997: 84-87)。それ以降になると有名な著作家は現れなくなる (Healey 2011: 644, Brock 1997: 84-87) が、典礼言語としてはシリア正教会、アッシリア東方教会、インド・シリア正教会などで現代まで使用されている (三代川 (編) 2017: 545-560)。古典シリア語はエデッサ (現在はトルコ領シャンルウルファ) 周辺で話されていたアラム語の変種をその起源とし、この言語が非ギリシア語系東方キリスト教会の主要な言語として用いられるようになったために、トルコ東部からシリア、イラク北部にかけた地域を初め、広くキリスト教東方諸教会が拡大した地域で用いられた (Butts 2019: 222, Pat-El 2019: 653)。また、古典シリア語に先立つ、キリスト教化以前のエデッサ周辺で用いられたアラム語を古シリア語 (Old Syriac) と呼び、これは紀元後 1 世紀から記録が確認される (Healey 2011: 641-642)。本論文では古シリア語と古典シリア語を区別し、後者を研究の対象とする。なお以降では簡便のため、「古典シリア語」を単に「シリア語」と呼称する。

このシリア語には、東西 2 つの方言があるとされる (Muraoka 2005: 1-2)。この東西の区分は、それが用いられた地域を支配する政治権力や当該地域で主流となるキリスト教の教派の違いに対応する。東方言は主にペルシア帝国によって支配され、東シリア教会[2]が主流となっていた地域で用いられた。他方西方言は東ローマ帝国によって支配され、カルケドン公会議での決定に反対した人々のうち、アンティオキア総大司教の管轄下にあったシリア正教会の信徒が多く住んでいた地域で使用された。両方言は主に母音体系と使用される文字の書体、母音の表記法に差異がある一方、形態・統語論に関する違いについて言及されることは非常に少ない (cf. Muraoka 2005, Pat-El 2019: 654)。

1.2. 本論文で扱う現象

シリア語には他動詞の直接目的語となる名詞句を標示する方法が (1-1) に示すように 4 通り存在する。それぞれの例文は (1-2) に示すとおりである。ここに示すように、シリア語では直接目的語を示す標識に、名詞句に付加される従属部

[2] 現在は「アッシリア東方教会」と称するが、この名称は 19 世紀以降「アッシリア」の存在が広く知られてから、彼らがそれを自らのルーツと見做すようになって用いられはじめたものである。また「ネストリウス派」として言及されることもあるが、これは彼らを異端に位置づける蔑称であり避けられるべきである (高橋 2017: 322)。詳細は高橋 (2017) を参照。

標示型の標識 l- (形式不変化)[3] と、動詞に付加され、対応する目的語名詞句の性・数に応じて形を変える、3 人称の人称代名詞接尾形と同形をとる主要部標示型の標識という 2 種類の標識が存在しており、それがそれぞれ出現したりしなかったりする。

(1-1) a. 一切の標識を伴わない
b. 名詞に標識 l-を付加する
c. 動詞に目的語の性・数に一致した標識を付加する
d. 名詞に標識 l-、動詞に目的語の性・数と一致した標識を付加する
(cf. Muraoka 2005: 77-78, Nöldeke 1898: 218)

(1-2) 「彼は男を殺した」 (cf. Muraoka 2005: 77-78, Nöldeke 1898: 218)

a. 標識なし

qṭal	gabrā
殺す.PF.3SGM	男

b. 名詞側に標識

qṭal	**l-**gabrā
殺す.PF.3SGM	**OM-**男

c. 動詞側に標識

qaṭl-**eh**	gabrā
殺す.PF.3SGM-**3SGM.OBJ**	男

d. 両方に標識

qaṭl-**eh**	**l-**gabrā
殺す.PF.3SGM-**3SGM.OBJ**	**OM-**男

しかしこれら 4 通りの方法の使い分けについては十分な記述がなされているとは言えない。例えば Nöldeke (1898: 218) は標識の出現は目的語名詞が指示対象を同定できる = 定の場合に限られるとしているが、Muraoka (2013: 67) はこれに対して反例を示している。Khan (1984: 469) は標識の使用に関して、同じような現象が見られるセム系言語に一般化した記述ではあるが、Nöldeke (1898) と同様に目的語名詞が定であることをその条件と述べる。またシリア語に個別的

[3] この l-は間接目的語や「～へ」などの方向を表す前置詞と同形である。従って l-名詞という形には (1-2b) の l-gabrā のような他動詞の直接目的語となる例の他に、間接目的語となるものや「〇〇に/へ」などの動作や移動の方向を表す前置詞句となるものも存在する。そのため、確認された l-名詞の用例がこのいずれであるか判断できない例文は、本研究のデータに含めていない。

な点としては、動詞に付加される主要部標示型の標識は人間を指す名詞、無生物でテキスト的に強調された (textually prominent) 名詞に対して現れる、とする (Khan 1984: 473)。しかしながら Khan の後者の記述は目的語標示に限定された話ではなく、指示対象となる名詞句と共起する人称代名詞すべてを対象とした議論になっている。

ところで、このように目的語標識が現れたり現れなかったりするという現象はシリア語のみならず、スペイン語 (1-3) やペルシア語 (1-4) をはじめ、広く世界の言語に確認される (cf. Aissen 2003)。このような、目的語名詞が場合によって異なる方法で標示されるという現象は示差的目的語標示 (Differential Object Marking、以下 DOM) と呼ばれる (cf. Bossong 1985, Aissen 2003, Sinnemäki 2014, etc.)。

(1-3) スペイン語の例 (Ormazabal and Romero 2013: 222, glossing modified)

a.	He	encontrado	***(a)**	**la**	**niña**
	AUX.1SG	見つけた	**OM**	**DF**	**少女**
	「私はその少女を見つけた」				
b.	He	encontrado	**(*a)**	**el**	**libro**
	AUX.1SG	見つけた	**OM**	**DF**	**本**
	「私はその本を見つけた」				

(1-4) ペルシア語の例 (Comrie 1989: 133, glossing modified)

a.	Hasan	**ketāb-rā**	dīd
	PN	**本-OM**	見た
	「ハサンは（その）本を見た」		
b.	Hasan	**ketāb**	dīd
	PN	**本**	見た
	「ハサンは本を見た」		

この DOM が見られる言語では多くの場合、目的語となる名詞句の有生性または定性、あるいはその双方が関与している。上に例を挙げたスペイン語 (1-3) では、目的語名詞句が人間「少女」の場合には目的語を示す前置詞 a が現れ (1-3a)、無生物「本」を表す場合にはこの前置詞が現れない (1-3b)[4]。またペルシア語 (1-4) では目的語名詞句が定 (definite) の場合にのみ目的語を表す後置詞 rā が出現

[4] ただし目的語が人間の場合であってもそれが特定の人物を表さない場合にはこの a は現れない。詳しくは第 2 章で改めて述べる。

しうる (Comrie 1989: 133)。シリア語についても、目的語標識が定性に出現を左右されていることが Nöldeke (1898) や Khan (1984) によって指摘されている。しかしながら Muraoka (2005) は (1-1, 1-2) に示す 4 通りの方法を挙げながら、その使い分けには触れず、すべてに同じ訳を与えている (Muraoka 2005: 78)。

1.3. 本論文の目的

前節に触れたように、シリア語の DOM については Nöldeke (1898) など、定性の関与を指摘している先行研究が存在する。しかしながら Muraoka (2013) が反例を示すように定性のみによる説明はシリア語 DOM の記述として十分であるとは言えず、また「通言語的に見られる DOM という現象の研究」という視点を欠いている。他方 Khan (1984) の指摘はセム系言語の DOM という視点で一般化されており、シリア語を個別的に扱った記述としてはこれも十分ではない。そこで本論文ではそれらの研究を発展させ、テキストから収集した実際の目的語名詞句の用例を使用して、通言語的な DOM 研究の一例としてシリア語におけるこの現象を実証的に記述することを第一の目的とする。すなわち、多くの言語で DOM のトリガーとなっている有生性・定性 (cf. Aissen 2003, Sinnemäki 2014) という 2 つの意味特性が、シリア語の DOM においても同様に要因となっているかどうかを明らかにするとともに、どのような場合に標識が現れるのか、または現れやすいのか、などを実例に基づいて記述することを目指す。

またシリア語の DOM の特徴として、名詞句に付加される従属部標示型の標識と動詞に付加される主要部標示型の標識の、2 種類の標識がそれぞれ出現したりしなかったりして、合計 4 通りの標識出現パターンを示すということが挙げられる。セム系言語で DOM を発達させた言語には、ティグリニャ語 (cf. Kievit and Kievit 2009)、マスカン語 (cf. Hara 2018) のように、直接目的語を従属部標示型の標識と主要部標示型の標識の 2 種類を用いて示しうるものが散見される。本研究では、そのような 2 種類の標識が関与して目的語を二重に標示しうる言語の DOM について、2 種類の標識がそれぞれ示差的 (differential) であることをどう解釈するべきか提案する。すなわち、これは 2 種類の標識が関わる DOM という 1 つの現象として見るべきか、それとも従属部標示型の標識が関わる狭義の DOM と主要部標示型の標識が関わる Differential Object Agreement/Indexation の 2 つの現象として見るべきか、という問題に対して一定の示唆を与えることを第二の目的とする。

1.4. 方法

本研究が対象とするシリア語は既に死語と呼べる古典語であり、実際の用例を集めるためには保存されている文献を利用するのが唯一の方法となる。従っ

て本研究ではシリア語による文献資料から他動詞の直接目的語となる名詞句の実際に用いられた例を収集し、そのデータに基づいてシリア語の DOM を実証的に分析し、記述する。他動詞の認定については、主語以外の名詞句が無標で現れうるものを他動詞と認める。また Payne Smith (1999) や Sokoloff (2009) のような辞書の記述も参考にする。集めた目的語名詞句の用例は、それが (1-1, 2) に示した方法のいずれによって標示されているかによって 4 群に分類する。また同時にその名詞句の有生性・定性による分類も行う。そして、名詞句の有生性または定性、及びその双方による分類群ごとに、(1-1, 2) のいずれの方法によって標示されているか、特に名詞に付加される従属部標示型の標識が出現しているか、していないかに分けて集計し、標示方法に差があるかどうかを検証する。検証に際しては χ^2 検定を利用し、数値の差が統計的に有意な差として実証できるかどうかを示す。検定は信頼度 95%で行う。

またシリア語では本来定動詞ではない能動分詞が、コピュラ的に用いられる人称代名詞独立形と組み合わさることによって現在時制を表す本動詞として用いられるという特徴がある[5]。また、その際の語形は性・数によって活用するほか、主語が 1 人称あるいは 2 人称の場合は、人称代名詞独立形が現れてこれを標示する (1-5)。他動詞がそのように用いられた場合の目的語名詞は、定動詞である完了形が用いられる場合と同様に無標で現れることもあれば、従属部標示型の標識 l-を伴うこともある (1-6)。ところが主要部標示型の標識については、定動詞とは異なる振る舞いをする。すなわち人称代名詞接尾形およびそれと同形である主要部標示型標識は、定動詞の場合には直接動詞に付加されうるが、定動詞ではない能動分詞に対しては付加することができない。そのため従属部標示型標識と同形の l-によって導かれる必要がある (cf. Muraoka 2013: 68)。本研究ではこの時の l-人称代名詞接尾形についても、それが 3 人称で、かつそれと一致する名詞句が別に現れている場合 (1-7a) には、(1-7b) のような定動詞に対する主要部標示型標識と同等のものとして扱う。

(1-5)　現在時制を表す能動分詞の例 (Thackston 1999, glossing added)

a.	hu	**sāleq**	l-ṭurā
	3SGM	**登る.ActPtc.SGM**	に-山

「彼は山に登る/登っている」

[5] また過去のコピュラ動詞 (h)wā と組み合わせて過去進行形や過去の習慣を表すこともある。

b. **ʕāmar-nā** ba-qritā hay
住む.ActPtc.SGM-1SG に-村 あの
「私はあの村に住んでいる」

(1-6)

a. wʕbdn **lḥmʔ** lšwqʔ
w-ʕbdn **lḥmʔ** l-šwqʔ
CONJ-作る.AtcPtc.PLF **パン** ために-市
「...彼女たちはパンを市 (に出す) ために焼いていた」
(『偽ヨシュアの年代記』 Chabot 1927: 266, l. 23)[6]

b. w**lmdyntʔ** zhyrʔyt nṭryn hww
w-**l-mdyntʔ** zhyrʔyt nṭryn hww
CONJ-**OM-町** 念入りに 守る.AtcPtc.PLM AUX
blly ʔ wbʔymm ʔ
b-lly ʔ w-b-ʔymm ʔ
に-夜 CONJ-に-昼
「...彼らは昼も夜も町を念入りに守っていた」
(『偽ヨシュアの年代記』 Chabot 1927: 285, l. 24)

(1-7)

a. wmknšyn **lhyn**
w-mknšyn **lhyn**
CONJ-集める.ActPtc.PLM **3PLF.OBJ**
lšldʔ **hlyn**
l-šldʔ **hlyn**
OM-死体.PL **これらの**
「そして彼らはこれらの死体を集めた」
(『偽ヨシュアの年代記』 Chabot 1927: 268, l. 17)

---

[6] 本研究で利用した 7 資料からの例文については、使用した出版物におけるその例文の掲載されたページ・行番号を、出典となる資料名と共に示す。また注 31 でも述べるが、ここで示した『偽ヨシュアの年代記』の Chabot (1927) 版には母音記号が示されていないため、本稿でも子音字のみを翻字して提示する。

b. wḥrbw**h** **lmdyntʔ**
w-ḥrbw-**h** **l-mdyntʔ**
CONJ-破壊する.PF.3PLM-**3SGF.OBJ** **OM-町**
「彼らは町を破壊した」
(『偽ヨシュアの年代記』 Chabot 1927: 280, l. 9)

使用するテキストは東西いずれの方言が用いられた地域のものかが分かり、かつシリア語が話し言葉としても用いられていた 4 世紀から 7 世紀の間に成立したものであると考えられる、翻訳ではない散文資料を使用する。地域を特定する理由は両方言の間で標示方法の用いられ方に差異が観察される可能性を考慮するためである。また話し言葉としても用いられた時代の資料に限定するのは、シリア語が話し言葉として用いられなくなった時代の資料ではその著者が常にシリア語以外の言語を母語とする人物であるのに対して、話し言葉としても用いられていた時代のものであれば、当該資料の著者が話し言葉としてもシリア語を用いていたことが考えられ、その点でシリア語の資料としてより信頼性が置けるものと言えるためである。翻訳資料を避ける理由は、翻訳資料の場合、原文の表現を忠実に翻訳するために、シリア語としては多少不自然な表現を使用している可能性が考えられるからである。これはすなわち目的語標識が出現したとして、これが単に原文にある要素を反映するために用いられたに過ぎない可能性を示している。本研究ではそのような翻訳元の言語からの影響を排除するために、シリア語をオリジナルとする資料を使用する。散文資料を使用する理由は、韻文の場合韻律が言語形式の選択に影響を与える可能性があり、これを回避するためである。

第 3 章では『偽ヨシュアの年代記』という西方言による資料を用いる。詳細は第 3 章で言及するが、この資料は 6 世紀の初め頃にエデッサ (現シャンルウルファ) 周辺で記された散文による年代記資料である。エデッサは東ローマ帝国の支配する地域に属しており、西方言が使用されていた地域である。従ってこの資料は西方言によるものと考えられる。第 3 章ではこの資料の全体 (Chabot 1927: 235-317) を利用し、単一資料から用例を網羅的に収集し、この資料における DOM の様相を示し、続く第 4 章、第 5 章で検討する仮説とする。

第 4 章では同じく西方言による 2 資料『東方諸聖人伝』『柱頭行者シメオン伝』を使用する。この章で扱う 2 資料はいずれも教会において聖人として敬われていた人物に関する伝記であり、散文資料である。第 4 章ではこの 2 つの資料から合計して約 350 例用例を集め、このデータを元に第 3 章で提案した仮説が西方言一般に拡大できるかどうかを検討する。第 4 章ではデータに現れた特徴が単一資料に限定されるものではないことを示すため、複数の資料をそれぞれ部

分的に用いて用例を収集する。

第 5 章では東方言による 4 資料『カルカー・ド・ベート・スロークとその地の殉教者達の歴史』『祭司アイタイラーハーと助祭ハプサイの殉教』『司祭ヤアコーブと助祭アーザードの殉教』『匿名筆者によるササン朝末の年代記』をそれぞれ用いる。これらの資料については第 5 章で詳細を述べるが、いずれもシリア語が話し言葉として用いられていたと考えられる時代の、散文による歴史資料である。ただし前者 3 点は単純な年代記資料ではなく、当地のキリスト教徒による殉教者伝の性格を持つ。これらの資料から約 450 例を収集し、上述の要領で分析を行う。第 4 章と同様に単一資料の特徴を東方言一般のものと誤認する可能性を減ずるため、複数資料を用いて用例を収集した。ただし『カルカー.....』は比較的短い資料のため、『祭司アイタイラーハー.....』『司祭ヤアコーブ.....』の 2 資料は極端に短い資料のため、一部を取り出すのではなく全量を用例収集の対象とする。

1.5. 本論文の射程

本論文では他動詞の目的語を示す標識がどのような場合に現れるか、という問題を取り扱う。(1-1, 2) に示すように、シリア語で他動詞の目的語を標示する標識には、目的語となる名詞に付加される従属部標示型の標識と、目的語を支配する他動詞に付加される主要部標示型の標識の 2 種類が存在する。第 3 章で詳しく述べるが、これらの標識は異なる条件によって出現を左右されていると考えられる。このうち通言語的な DOM の傾向と一致する傾向を示すのは従属部標示型のそれで、他方主要部標示型の標識はそれとは異なる視点から分析する必要がある。この異なる視点が何であるかについて本研究では未解決である。この理由から、本論文では従属部標示型の標識が出現したりしなかったりする現象 (狭義の DOM) と主要部標示型の標識が出現したりしなかったりする現象 (DOA または DOI) を別々の現象として捉え、このうち前者に焦点を当てて議論を行う。

上述のとおり、このような現象は Differential Object Marking (DOM) と呼ばれる。しかし、次章でも述べるが、DOM と呼ばれる言語現象には、本論文で問題とする「目的語標識が現れたり現れなかったりする」タイプ (asymmetric DOM と呼ばれることがある) の他に (1-8) に示すような、目的語が異なる標識によって表記されうるという、symmetric DOM と呼ばれるタイプも存在する (Iemmolo and Klumpp 2014: 272)。シリア語と系統的に近い聖書ヘブライ語にも asymmetric と symmetric の両方の DOM が観察される[7]が (1-9, 10)、本論文では asymmetric

[7] この問題については Muraoka (1979) が参考になる。Muraoka (1979) は DOM という用

DOM のみを対象とし、symmetric DOM の方は射程外とする。

(1-8) symmetric DOM の例 (フィンランド語、Iemmolo and Klumpp 2014: 272, citing Kittilä 2002: 114, glossing simplified)

a. hän joi **maidon**
3SG.NOM 飲む.PST.3SG **牛乳.ACC**
「彼/彼女は牛乳を (全部) 飲んだ」

b. hän joi **maitoa**
3SG.NOM 飲む.PST.3SG **牛乳.PART**
「彼/彼女は牛乳を (いくぶんか) 飲んだ」

(1-9) 聖書ヘブライ語の asymmetric DOM (Bekins 2014: 43, glossing modified)

a. wayyiṭṭʿ yhwh ʾĕlōhîm **gan**
CONJ+植える.3SGM.PST YHWH 神 **園**
「神である主は園を設けた」(『創世記』2:8)

b. wayyāśem šam **ʾet-hā-ʾādām**
CONJ+置く.3SGM.PST そこに **OM-DF-人**
「(神である主は) 人をそこに置いた」(『創世記』2:8)

語こそ用いていないものの、同じ動詞の目的語 (object) が無標で現れたり前置詞ʾēt- (表記は Muraoka 1979 に従う) で標示されたりする他、それ以外の前置詞によっても標示されうることを指摘し、目的語を無標ないしʾēt-で標示される bare object (あるいはʾēt object) とʾēt 以外の前置詞によって標示される prepositional object (ないし non-ʾēt object) に分類することを提案している。このうち bare object 内部においてʾēt が現れたり現れなかったりする現象は asymmetric DOM で、bare object と prepositional object の選択にかかる問題が symmetric DOM に該当する。またこの問題に関連して Muraoka (1979: 431) は自動詞/他動詞という二分法による動詞の分類が聖書ヘブライ語ではうまくいかないことを指摘している。このような問題は聖書ヘブライ語と系統を同じくするシリア語でも見られる可能性が考えられる。特にシリア語では聖書ヘブライ語とは異なり、asymmetric DOM に関与する形式が間接目的語や副詞的な前置詞句を導く l-と同じ形式となるため、聖書ヘブライ語よりもなお一層自動詞/他動詞の区別には困難が伴う。このような問題のため、本研究では目的語名詞を無標で取りうる動詞や人称代名詞接尾形を付加しうる動詞を「他動詞」と判断し、これの bare object と判断できるものを対象としてデータを採取し、その判断に迷うものや疑わしいものについてはデータより除外した。ただし同じセム系言語であるエチオピア・セム語で他動詞に付加された人称代名詞接尾形がその直接目的語ではなく間接目的語に一致する例が観察されること (e.g. チャハ語, Banksira 2000: 263) を鑑みるに、「人称代名詞接尾形を付加しうる」という基準にも疑いがないわけではないことを付言しておく。

(1-10) 聖書ヘブライ語の symmetric DOM (Bekins 2014: 78, glossing modified)

a. wayyak ʾ**et-pəlištîm**
CONJ+討つ.3SGM.PST **OM-ペリシテ人たち**
「彼はペリシテ人たちを (みな) 討った」(『サムエル記下』23:12)

b. wayyak **bappəlištîm**
CONJ+討つ.3SGM.PST **at+DF+ペリシテ人たち**[8]
「彼はペリシテ人たちを (いくぶんか) 討った」(『サムエル記下』23:10)

また、動詞に付加される主要部標示タイプの標識は上に述べたように、3 人称の人称代名詞接尾形と同形を取る。つまり (1-2cd) のようなパターンでは、動詞は目的語が 3 人称の人称代名詞である場合と同じ形となる。本研究では、あくまでも目的語名詞句を標示する標識を研究対象とするため、目的語名詞句が明示されない (1-11) のような例は扱わない[9]。動詞に 3 人称以外の人称代名詞接尾形が付加された (1-12) のような形についても同様に考察の射程外とする。

(1-11) qaṭl-āh
殺す.PF.3SGM-3SGF.OBJ
「彼は彼女を殺した」

(1-12) īl īl lmānā **šbaqt-ān**
神+1SG.GEN 神+1SG.GEN なぜ **見捨てる.PF.2SGM-1SG.OBJ**
「我が神、我が神、なぜ**私を見捨てた**のか」(『マタイによる福音書』27:46)

本論文で使用するテキストは 4 世紀から 7 世紀の間のものに限定する。この期間はシリア語が話し言葉としても用いられていたと考えられている期間である。しかし既に述べているように、シリア語は話されなくなった後も書き言葉として用いられ続けている。本論文で扱うデータからは、7 世紀以降の、書き言葉としてのシリア語に関しては議論しえない。従って、7 世紀以降のシリア語は本研究の射程外とする。

また、上で述べたようにシリア語には東西の方言があるとされ、本研究ではこの区分に従う。また使用するテキストがこのいずれの方言に属するかは、その資料が成立した地域によって判断する。この方言区分の妥当性や、より詳細な方言

[8] 前置詞 bə-+定冠詞 haC-+pəlištîm と分析することが可能。
[9] Muraoka (2013: 68) は目的語となる人称代名詞が l-によって導かれる場合があるとして、その条件をいくつか挙げているが、本研究では同様の理由でこれを扱わない。

区分の可能性については本論文で扱う問題の範囲を大きく逸脱することになるため、本研究の対象外とする。

1.6. 本論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。第 1 章では本論文が扱うシリア語についてその概要を述べたあと、本論文の目的、方法、射程等を説明した。第 2 章では本論文が扱うシリア語の現象そのものに関する先行研究の他、Differential Object Marking (DOM) という現象に関する先行研究を整理し、本論文を通言語的な DOM 研究の一事例研究として位置づける。第 3 章では単一の資料中に見られた目的語名詞句の用例を網羅的に収集し、ここからシリア語 DOM の様相に関する仮説を設定する。続く第 4 章と第 5 章では第 3 章で提案した仮説がシリア語の東西両方言に当てはめうるものであるかを検証する。第 4 章では第 3 章で扱う資料『偽ヨシュアの年代記』が書かれた西方言の資料から、第 5 章ではこれと異なる東方言の資料からそれぞれデータを集めて議論を行う。以上の議論を踏まえて第 6 章では本論文の結論を提示する。

第 2 章 先行研究

本章では本研究の背景となる先行研究を整理する。2.1.では本研究が扱う示差的目的語標示 (Differential Object Marking) という現象についての研究を取り上げる。続く 2.2.ではシリア語が属するアフロ・アジア語族セム語派の言語における Differential Object Marking について先行研究を確認する。2.3.ではシリア語の Differential Object Marking について、文法書の記述等を参照して、既知のことを整理する。最後に 2.4.で本研究の分析の肝である有生性と定性について、本研究における定義を示すとともに、本研究ではどのように名詞句の有生性・定性を判定するかを述べる。

2.1. Differential Object Marking

2.1.1. 概要

示差的目的語標示 (Differential Object Marking、以下 DOM とする) は「異なるタイプの直接目的語が違った方法で実現される現象 (Schwenter and Silva 2002: 578)」のように定義される、(2-1) のような現象を言う用語である。この例 (2-1)[10] では、人間を表す la niña「その少女」が直接目的語となる場合には、これが標識 a によって表される (2-1a)。 他方、無生物を表す el libro「その本」が直接目的語である場合はこの標識 a は現れることができない (2-1b)。このような、目的語となる名詞によって標識が出現したりしなかったりするものが DOM の典型である。

(2-1) スペイン語の例 (Ormazabal and Romero 2013: 222)

a.	He	encontrado	***(a)**	**la**	**niña**
	AUX.1SG	見つけた	**OM**	**DF**	**少女**
	「私はその少女を見つけた」				
b.	He	encontrado	**(*a)**	**el**	**libro**
	AUX.1SG	見つけた	**OM**	**DF**	**本**
	「私はその本を見つけた」				

ところで、動詞と項の関係を示す標識は言語によって従属部に現れる場合と主要部に現れる場合があり、それぞれ従属部標示、主要部標示と呼称される。こ

[10] 例文中の *(X) は「X がないと非文」、(*X) は「X があると非文」をそれぞれ表す。

のことと同様に、DOM にも (2-1) に示したような従属部に現れる標識が関与するものと、(2-2) に示すような主要部に現れる標識が関与するものとが存在する。この主要部標示タイプのものが関わる場合は Differential Object Agreement (DOA)、あるいは Differential Object Indexation (DOI) と別の用語を用いて呼ばれる (Iemmolo and Klumpp 2014: 272)。(2-2) に示すスワヒリ語では、目的語名詞がクラス[11]1 または 2 に属するもののとき (2-2a) や、それ以外のクラスに属するものであっても有生物のとき (2-2b) には、目的語名詞のクラスに対応する接辞[12]が動詞に付加される。他方で無生物のときにはそれが現れないか (2-2c)、強調的な文脈で (in emphatic contexts) 任意に現れる (2-2d) (Vitale 1981: 17)。

(2-2) スワヒリ語の例 (Vitale 1981: 17 (bd), 23-24 (ac), glossing modified)

a. Ahmed a-li-m-pig-a Badru
PN SM-PST-OM-叩く-IND PN
「アハメドはバドルを叩いた」

b. Juma a-li-mw-u-a fisi
PN SM-PST-OM-殺す-IND ハイエナ
「ジュマはハイエナを殺した」

c. Juma a-li-fungu-a mlango
PN SM-PST-開ける-IND ドア
「ジュマはドアを開けた」

d. tu-li-(vi-)pot-ez-a vitabu vyote
SM-PST-(OM-)なくす-CAUSE-IND 本.PL すべて
「我々は本をすべてなくした」

先に挙げた定義では、DOM とは「異なるタイプの直接目的語が違った方法で実現される現象 (Schwenter and Silva 2002: 578)」のこととなっている。この「違った方法で」という部分から、DOM は更に非対称的 (asymmetric) なものと対称的 (symmetric) なものとに分けることができる。

非対称的な DOM は (2-1) にあるような、標識が現れたり現れなかったりするタイプのものである。この場合には、方法間の差が有標 vs. 無標となり、この点

[11] スワヒリ語の名詞は 18 あるクラスのいずれかに属する。なおこの 18 という数字は単数形と複数形を別々のクラスと数える数え方によるもので、現代のスワヒリ語には対応する形の無い 12、13 クラスを含めた数である (Vitale 1981: 13)。

[12] この接辞は主語を標示する接辞と同形をとり、主語接辞とは出現位置を異にするのみである。ただし 3 人称単数のときは例外で、-m- (-mw-/ _V) という形となる (Vitale 1981: 17)。

で非対称的というのである。他方対称的な DOM は (2-3) のような、有標の方法 A と有標の方法 B との間で差を示すようなものを言う。この例では、「飲む」という動作が目的語「牛乳」に対して与える影響の度合いによって、目的語を示す方法が異なっている。対格形が現れる (2-3a) では牛乳をすべて飲み干したことが、分格形が現れる (2-3b) では牛乳が飲み干されずに残っていることがそれぞれ含意される。この例に示されるように、対称的な DOM とは、いずれの場合にも標識が出現する、という点で対称的ということである。

(2-3) symmetric DOM の例 (1-8 再掲、フィンランド語、Iemmolo and Klumpp 2014: 272, citing Kittilä 2002: 114, glossing simplified)

a.	hän	joi	**maidon**
	3SG.NOM	飲む.PST.3SG	**牛乳.ACC**
	「彼/彼女は牛乳を (全部) 飲んだ」		
b.	hän	joi	**maitoa**
	3SG.NOM	飲む.PST.3SG	**牛乳.PART**
	「彼/彼女は牛乳を (いくぶんか) 飲んだ」		

ところで、上に示した DOM と呼ばれうる現象のうち非対称的な DOM に関しては、これを持つ多くの言語で有生性 (animacy)、定性 (definiteness) あるいはその双方が関与することが知られている (Aissen 2003 etc.)。Aissen (2003) によると、非対称的な DOM において標識の出現/非出現は、(2-4, 2-5) に示す有生性/定性の階層 (Aissen 2003: 437)、あるいはこれらの 2 特性による二次元的な階層 (図 2-1) によって説明できる。すなわち、目的語標識が現れるのは目的語名詞がこの階層で上位にあるときで、現れないのは下位にあるときである[13]。次項で紹介するが、言語によっていずれの階層が関与するか、階層のどこを境として標識の出現可能/不可能が分かれるか、などの条件は異なるが、多くの言語では有生性・定性の高低によって標識の出現/非出現をある程度記述することが可能である。例えばスペイン語の場合には人間を表す名詞は標識を伴うことができ、人間以外の動物や無生物の場合にはこれが現れない (2-6, Haspelmath 2008: 2)。

[13] 標識が現れる理由について Aissen (2003) は、有生性・定性の高い名詞句は主語と解釈されるのが無標であり、従って有生性・定性の高い名詞句が目的語となる場合、それは有生性・定性の低いものよりも目的語として卓立し 、そのために標識を要求する、と説明している。他方、有生性・定性の低い名詞句は目的語と解釈されるのが無標であり、そのため標識を用いずともそれが目的語であることが分かる。

(2-4) 有生性の階層：

人間 (Human) > 有生 (Animate) > 無生 (Inanimate)

(2-5) 定性の階層：

人称代名詞 (Personal Pronoun) > 固有名詞 (Proper Name) > 定の名詞句 (Definite) > 不定特定の名詞句 (Indefinite Specific) > 不定不特定の名詞句 (Non-specific)

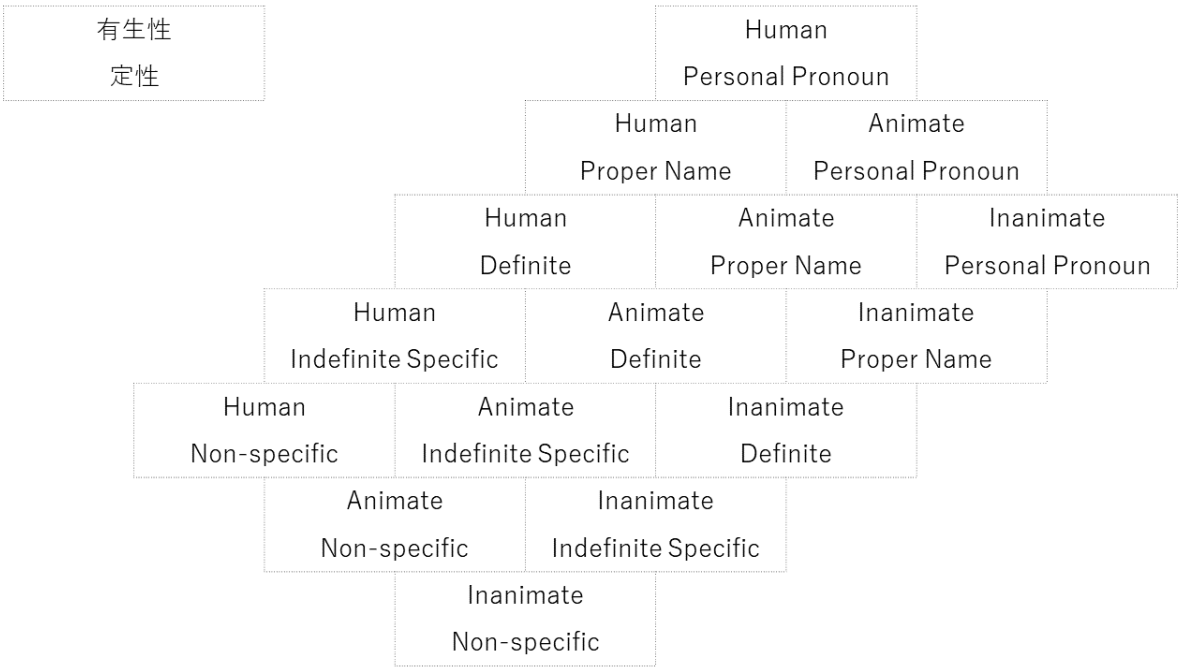

図 2-1 有生性・定性の二次元階層 (Aissen 2003: 459 をもとに筆者作図)

(2-6) スペイン語の DOM

人間 (Human) // 有生 (Animate) 無生 (Inanimate)

標識あり // 標識なし

以上本項では、DOM と呼ばれる現象がどのようなものを含むかを見てきた。本研究で扱うシリア語には、関与する標識の出現する位置という観点からは、従属部標示型の標識が関与する狭義の DOM と、主要部標示型の標識が関与する DOA または DOI と呼ばれるものの双方が見られる。本研究では、第 3 章でこの 2 つがシリア語では異なる機序によるものであることを示し、うち前者に焦点を当てて検討する。他方、目的語標示がどのような差を示すか、という観点からは、2 種類の標識それぞれについて、現れない場合と現れる場合との対立を扱うため、

非対称的な DOM のみを扱う、ということになる。

2.1.2. 諸言語における DOM

本項では語族や地域を超えた様々な言語における DOM の事例を挙げながら、この現象が特定の地域や系統に限定されるものではないことを示す。

はじめに DOM を持つ言語の例として頻繁に挙げられるスペイン語を取り上げる。スペイン語では、他動詞の目的語が人間を表すときに、前置詞 a が現れることが知られている (2-7)。この a は (2-8) に見えるように、無生物の目的語に対しては用いることが出来ない。他方人間の目的語の場合にも、必ず現れなければならないということはない (2-9)。(2-9) では、a が現れる場合には目的語 una secretaria は特定の秘書を指し (2-9a)、現れない場合には秘書であれば誰でもいい、ということを含意する (2-9b)。このように、スペイン語の DOM には目的語の有生性のほか、特定性の関与が指摘されている。

(2-7) スペイン語の例 (Haspelmath 2008: 2, glossing modified)

a.	El	director	busca	**a**	**su**	**hijo**
	DF	監督	探す	**OM**	**彼の**	**息子**

「監督は彼の息子を探している」

b.	El	director	busca	**el**	**perro**
	DF	監督	探す	**DF**	**犬**

「監督は (その) 犬を探している」

c.	El	director	busca	**el**	**carro**
	DF	監督	探す	**DF**	**車**

「監督は (その) 車を探している」

(2-8) スペイン語の例 (García 2005: 17, glossing modified)

a.	busco	**un**	**bolígrafo**
	探す.1SG	**INDF**	**えんぴつ**

「私はえんぴつを探している」

b.	*busco	**a**	**un**	**bolígrafo**
	探す.1SG	**OM**	**INDF**	**えんぴつ**

(2-9) スペイン語の例 (García 2005: 17, glossing modified)

a.	busco	**a**	**una**	**secretaria**
	探す.1SG	**OM**	**INDF**	**秘書**

「私はとある (特定の) 秘書を探している」

b. busco **una** **secretaria**
探す.1SG **INDF** **秘書**
「私は秘書を探している」

またスペイン語と同じくインド・ヨーロッパ語族ロマンス語派に属するルーマニア語でも DOM が観察される。この言語では名詞に付加される標識 pe と同時に、目的語に一致する人称代名詞対格弱形 (accusative weak pronoun) が、目的語が人称代名詞のときと有生で固有名詞のときには義務的に (2-10)、定/不定を問わず有生の名詞句のときには任意に現れ (2-11)、無生物のときには現れない (2-12)。

(2-10) ルーマニア語・目的語標識が義務的になる例 (Klein 2007: 1, glossing modified)

a. Televiziunea **m**=a ales ***(pe)** **mine**,
テレビ **1SG.ACC**=AUX選んだ **OM** **私を**
nu eu ***(pe)** **ea**
NEG 私が **OM** **それを.F**
「テレビが私を選んだ、私がそれをではなく」

b. **L**=am lovit ***(pe)** **Mihai**
M.ACC=AUX.1 ぶった **OM** **PN**
「私/われわれはミハイをぶった」

(2-11) ルーマニア語・目的語標識が任意になる例 (Klein 2007: 1-2, glossing modified)

a. **L**=am lovit **pe** **copil-ul** **vecin-ului**
M.ACC=AUX ぶった **OM** **子供-DF.M** **近所-DF.M.GEN**

b. Am lovit **copil-ul** **vecin-ului**
AUX ぶった **子供-DF.M** **近所-DF.M.GEN**
「私/われわれは近所の子供をぶった」(ab ともに)

c. **L**=am lovit **pe** **un** **copil**
M.ACC=AUX ぶった **OM** **INDF** **子供**

d. Am lovit **un** **copil**
AUX ぶった **INDF** **子供**
「私/われわれは子供をぶった」(cd ともに)

(2-12) ルーマニア語・目的語標識が出現できない例 (Klein 2007: 2, glossing modified)

a. Am reparat **(*pe)** **dulap-ul**
AUX 直した **OM** **衣装箪笥-DF.M**
「私はその衣装箪笥を直した」

b. Am reparat **(*pe)** **un** **dulap**
AUX 直した **OM** **INDF** **衣装箪笥**
「私は衣装箪笥を直した」

ロマンス語派以外のインド・ヨーロッパ語族の言語では、ペルシア語やヒンディー語が DOM を持つ。ペルシア語では、直接目的語を示す後置詞の-rā が、目的語の定性によって現れたり現れなかったりする。ペルシア語には英語のような定/不定の冠詞は存在しないが、(2-13a) に示すように-rā が現れる場合には目的語は定として、(2-13b) のように現れない場合には不定としてそれぞれ解釈されることになる。

(2-13) ペルシア語の例 (Comrie 1989: 133, glossing modified)

a. Hasan **ketāb-rā** dīd
PN **本-OM** 見た
「ハサンは (その) 本を見た」

b. Hasan **(yek)** **ketāb** dīd
PN **INDF** **本** 見た
「ハサンは本を見た」

ヒンディー語では、多少事情が複雑になる。ヒンディー語では、人間を表す名詞が目的語となる場合、目的語の定性を問わず目的語標示-ko が現れる (2-14)。ただし (2-14b) のように人間が目的語でありながらこの標識が現れない例も無いわけではない[14]。Aissen (2003: 465-466) によるとこの標識は不定特定の名詞句 (specific indefinites) までは義務的で、不定不特定のときには任意と考えられている。他方無生物の場合には標識の出現は任意となり、かつ目的語が定の場合に限定される (2-15)。

[14] ただしこの (2-14b) においても標識を伴う方が好まれている (Comrie 1989: 133, Aissen 2003: 465)。

(2-14) ヒンディー語・人間が目的語となる例 (Comrie 1989: 133, glossing modified)

a. Aurat **bacce-ko** bulā rahī hai
女性 **子供-OM** 呼ぶ PROG AUX
「女性が子供を呼んでいる」(子供は定/不定どちらの読みも可能)

b. ?Aurat **baccā** bulā rahī hai
女性 **子供** 呼ぶ PROG AUX
「女性が子供を呼んでいる」(子供は不定 cf. Aissen 2003: 466)

(2-15) ヒンディー語・無生物が目的語となる例 (Aissen 2003: 466 citing Mohanan 1994: 87-88, glossing modified)

a. Ravii-ne **kaccaa kelaa** kaa<u>t</u>aa
PN-ERG **未熟な バナナ** 切った
「Ravi が未熟なバナナを切った」(バナナは定/不定どちらの読みも可能)

b. Ravii-ne **kacce kele-ko** kaa<u>t</u>aa
PN-ERG **未熟な バナナ-OM** 切った
「Ravi が未熟なそのバナナを切った」(バナナは定)

インド・ヨーロッパ語族に属しない言語の例としては、トルコ語をはじめに取り上げる。トルコ語では目的語が定の場合や不定でも特定の場合には名詞に対格語尾が現れる一方、不特定の目的語に対してはそれが現れない (2-16)。

(2-16) トルコ語の例 (Enç 1991: 9, 4-5, glossing modified)

a. Zeynep **Ali-yi/on-u/adam-ı/o masa-yı** gördü
PN **PN-ACC/3SGM-ACC/男.DF-ACC/あの机-ACC** 見た
「ゼイネプはアリーを/彼を/その男を/あの机を見た」

b. Ali **bir piyano-yu** kiralamak istiyor
PN **INDF ピアノ-ACC** 借りること 欲する
「アリーはとあるピアノを借りたがっている」(特定のピアノ)

c. Ali **bir piyano** kiralamak istiyor
PN **INDF ピアノ** 借りること 欲する
「アリーはピアノを借りたがっている」(不特定のピアノ)

地理的に隔たった地域からは、南米のパラナ川・パラグアイ川沿いの盆地で話されるグアラニー語 (トゥピ Tupi 語族) を取り上げることができる。グアラニー語では有生性と主題性が DOM に関与しており、人間で主題となる名詞句が最も目的語標識-pe を伴いやすく、人間ではなく、主題とならない名詞句は標識-pe

を伴わないことが多い (Shain 2009: 102, 117)。

この主題性について Shain (2009) は目的語名詞句と同一の指示物に言及された箇所との間に挿入された節の数 (Referential Distance, RD)、目的語名詞句と同一の指示物に言及した節の数 (Topic Persistence, TP) という 2 つの観点によって高低を計測している (Shain 2009: 74-77)。Shain (2009) は前者をさらに目的語名詞句以前の直近に言及した箇所との間のそれ (無標の RD)、目的語名詞句以後の直近に言及した箇所とのそれ (forward RD) に分け、これらを合計したもの (Total Topicality in terms of RD) と合わせた計 3 指標に、後者を目的語名詞句以前のそれ (backward TP)、目的語名詞句以降のそれ (無標の TP) に分け、これを合計したもの (Total Topicality in terms of TP) の計 3 指標に整理している (Shain 2009: 75)。また無標の TP については数える範囲を連続した節に限定した contiguous TP と、節の連続性を問題にせず後続する 20 節を対象にカウントした non-contiguous TP とに区別している (Shain 2009: 74)。そしてこれら 7 つの指標から主題性を段階的な特性 (graded property) として捉えている (Shain 2009: 74)。

表 2-1 は Shain (2009) が対象とした目的語名詞句の用例と目的語標識の出現/非出現をまとめたものである。また、これに対応するものではないが、標識の現れた/現れなかった例文を (2-17) に示す。

表 2-1 グアラニー語における目的語標識の出現と有生性・主題性
(Shain 2009: 102, translated)[15]

		主題		非主題		合計	
		+pe	-pe	+pe	-pe	+pe	-pe
人間	用例数	16	4	8	15	24	19
	標識出現率	80%		35%		56%	
非人間	用例数	0	23	3	164	3	187
	標識出現率	0%		2%		2%	
合計	用例数	16	27	11	179	27	206
	標識出現率	37%		6%		12%	

(2-17) グアラニー語の例 (Shain 2009: 104)

a.	Ha	upéi	o-hecha	sapy'a	Juan-chi
	CONJ	そのあと	3.SBJ-見る	とつぜん	PN-DIM

[15] 元の論文では非主題・合計の数字と非人間・合計の数字が逆になっているが、これは誤りと思われるため、本稿ではこれを修正している。

ha　　Pirulo　**ju'í-pe**
CONJ　PN　　**カエル-OM**
「そしてそのあと Juah と Pirulo は突然カエルを見た」

b.　O-heka　　**tukumbo**
3.SBJ-探す　　**縄**
「彼女は縄を探した」

日本語の方言でも DOM を観察することができる。その例としてここでは茨城県常総市 (旧水海道市) に話される水海道方言を取り上げる。水海道方言では他動詞の直接目的語を示す標識に-godo というものがある。これは共通語で他動詞の直接目的語を示すヲとは異なり、目的語名詞句が有生物である場合にしか現れず、無生物を表す目的語には付加することができない (2-18)。また (2-19) に示すように、指示対象が有生物であっても必ず-godo が現れる、というわけではなく、この出現には揺れがある。

(2-18) 日本語水海道方言の例 (佐々木 1999: 41-42, glossing added)

a.　**kodomo-godo**　mida
子供-OM　　見た
「子供を見た」

b.　**nego-godo**　mida
猫-OM　　見た
「猫を見た」

c.　**onimusji-godo**　mida
カブト虫-OM　見た
「カブト虫を見た」

d.　***saboteN-no**　**hana-godo**　mida
サボテン-GEN　**花-OM**　　見た
「サボテンの花を見た」

e.　***fuzjisaN-godo**　mida
富士山-OM　　見た
「富士山を見た」

(2-19) 日本語水海道方言の例 (佐々木 1999: 44, glossing added)

a.　ora　　**ome-godo**　　butta
俺　　**お前-OM**　　ぶった

b. ora **ome** butta
俺 **お前** ぶった
「俺はお前をぶった」(ab いずれも)

アフリカ大陸南部の広い範囲に用いられるバントゥ諸語にも DOM を持つ言語が見られる。例えば上で既に述べているが、スワヒリ語では目的語のクラスに一致する動詞接辞が、目的語がクラス 1、2、あるいは有生物のときにのみ現れる (2-20)。また、ヤカ語 (KiYaka) では、目的語が固有名詞のときには目的語を示す接辞が必ず動詞に現れる (2-21)。定の名詞句が目的語となる場合にはこの接辞の使用は任意となり、他方不定の名詞句が目的語である場合はこの標識は出現しない (2-22)。

(2-20) スワヒリ語の例 (Vitale 1981: 17 (bd), 23-24 (ac), glossing modified, 2-3 再掲)

a. Ahmed a-li-**m**-pig-a **Badru**
PN SM-PST-**OM**-叩く-IND **PN**
「アハメドはバドルを叩いた」

b. Juma a-li-**mw**-u-a **fisi**
PN SM-PST-**OM**-殺す-IND **ハイエナ**
「ジュマはハイエナを殺した」

c. Juma a-li-fungu-a **mlango**
PN SM-PST-開ける-IND **ドア**
「ジュマはドアを開けた」

d. tu-li-(**vi**-)pot-ez-a **vitabu** vyote
SM-PST-(**OM**-)なくす-CAUSE-IND **本.PL** すべて
「我々は本をすべてなくした」

(2-21) ヤカ語の例 (Kidima 1987: 180, glossing modified)

a. tu-**n'**-telelé **Maafú**
SM-**OM**-呼ぶ.PST **PN**
「我々は Maafú を呼んだ」

b. *tu-telelé **Maafú**

(2-22) ヤカ語の例(Kidima 1987: 180, glossing modified)

a. baaná ba-**n'**-súumbidi **khoombó**
子供 SM-**OM**-買う.PST **ヤギ**
「子どもたちはそのヤギを買った」(ヤギは定)

b. baaná ba-suúmbidi **khoombó**
子供 SM-買う.PST ヤギ
「子どもたちはヤギを買った」(ヤギは定/不定いずれの読みも可)

2.1.3. 有生性・定性の DOM への関与

ここまで、有生性・定性という目的語名詞句の意味特性が DOM に関与する例を観察してきた。最後に DOM という現象一般について扱った Sinnemäki (2014) を取り上げて、これらの意味特性がどの程度広く DOM に関与しているか、ということを確認する。

Sinnemäki (2014) では地理的にも系統的にも多様な 774 の言語を対象に、目的語標示のあり方を「目的語の格標示を持つもの (with object case marking)」と「目的語の格標示を持たないもの (without object case marking)」に分け、さらに前者を「(格標示に) 制限のないもの (non-restricted)」と「制限のあるもの (restricted)」に整理した。また restricted のものは更に「有生性に影響されるもの」「定性に影響されるもの」「有生性と定性の両方に影響されるもの」「それ以外の特性に影響されるもの」に分類している (Sinnemäki 2014: 292-293)。その結果、774 言語の 30%にあたる 223 の言語は目的語の格標示を持つ言語であり、その中の 80% (178 言語) は何らかの条件によって格標示に制限のあるもの (restricted) であった。この 178 の言語で、どのような意味特性によって格標示が制限されているか整理すると、表 2-2 のようになる。ここからは、格標示に差異を示す ＝DOM を持つ言語では、有生性または定性がこの現象に関与していることが多い、ということが分かる。しかし Sinnemäki (2014) によれば、どの特性がこの現象に関与するかは地域によって偏りがあり、こと定性が関与する言語はほとんどが旧世界のものである (Sinnemäki 2014: 295-296)。ここから Sinnemäki (2014) は、これらの意味特性が格標示の制限に関与する言語は多いが、そのような現象を持つすべての言語でこれらが普遍的に関与することを意味するのではない、と結論付けている (Sinnemäki 2014: 304)。

表 2-2 格標示を制限する名詞句の意味特性と言語数
(Sinnemäki 2014: 292-293 より筆者作成)

影響する特性	言語数	割合
有生性	52	29%
定性	49	28%
有生性+定性	22	12%
その他	55	31%
合計	178	100%

このように Sinnemäki (2014) は、DOM に対する有生性・定性の普遍的な影響力については否定しているが、他方で有生性・定性のいずれか、または双方が関与する事例が多い、ということについては否定しない。有生性・定性のいずれか、またはその双方が関与する DOM の例が多いことは Aissen (2003) も指摘していることである。特に定性のシリア語 DOM への関与は、後ほど 2.3. で詳しく述べるが、Nöldeke (1898) も Brockelmann (1962) も言及しており、これを検討しない理由は無い。従って本研究では、これら 2 つの意味特性を分析の主軸に置く。

2.2. セム系言語における Differential Object Marking

本節ではシリア語が属するアフロ・アジア語族セム語派の諸言語で DOM が見られるかどうか、及び DOM が見られる場合その機序がどのようになっているか整理する。

セム祖語の段階では名詞の格変化によって主語/目的語が標示されていたと考えられている (Hasselbach 2013: 326, Huehnergard 2019: 60, etc.)。この祖語の仕組みはアッカド語や古典アラビア語で保存されている (2-23, 2-24)。

(2-23) アッカド語の例 (Hasselbach-Andee 2019: 104, 107, glossing modified)

a. šarr-um/šarr-im/šarr-am
王-NOM/王-GEN /王-ACC
「王が/王の/王を」

b. šarrāq-um ḫurāṣ-am ša šarr-im
泥棒-NOM.SG 金-ACC.SG REL 王-GEN.SG
išriq
盗む.PST.3SGM
「泥棒が王の金を盗んだ」

(2-24) 古典アラビア語の例 (Birnstiel 2019: 379, 394, glossing modified)

a. muslim-u-n/muslim-i-n/muslim-a-n
ムスリム-NOM-INDF/ムスリム-GEN-INDF/ムスリム-ACC-INDF
「あるムスリムが/あるムスリムの/あるムスリムを」

b. daḫal-a l-madīnat-a
入る.PF-3SGM DF-町-ACC

ja-rkab-u　　ǧamal-a-hū
3SGM-乗る.IMPF-IND　ラクダ-ACC-3SGM.GEN
「彼はラクダに乗りながらその町に入った」

それに対して北西セム語やエチオピア・セム語では、この格変化の仕組みが失われている。これらのグループには DOM が発達しているものがしばしば見られる。例えば現代ヘブライ語では、目的語を標示する前置詞’et-があり、これが定性によって出現を左右される。Aissen (2003: 453) によれば、この目的語標識は目的語が定のときには義務的に現れ、不定のときには現れない (2-25)[16]。他方聖書ヘブライ語では、目的語を標示するʔet-は目的語名詞句の定性が高いときには出現しやすく、不定の名詞句に対しては現れないことが多い (Bekins 2014: 93) とされるものの、すべての定の目的語が必ずこの標識を伴うわけでもない (2-26)。

(2-25) 現代ヘブライ語の例 (Aissen 2003: 453, glossing modified)

a. Ha-seret　her’a　**’et-ha-milxama**
DF-映画　見せた　**OM-DF-戦争**
「その映画はその戦争を見せた」

b. Ha-seret　her’a　**(*’et-)milxama**
DF-映画　見せた　**(OM-)戦争**
「その映画は戦争を見せた」

(2-26) 聖書ヘブライ語の例 (Bekins 2014: 105, 123, glossing modified)

a. wayyar’　**’îš**　**miṣrî**　makkeh
CONJ+見た.3SGM　男　エジプト人　打つ.Ptc.3SGM
’îš-‘ibrî ...　...wayyak　**’et-hammiṣrî**
男-ヘブライ人…　…CONJ+打った.3SGM　**OM-DF+エジプト人**
「彼 (モーセ) はヘブライ人を打つ一人のエジプト人を見た……彼はそのエジプト人を打った」(『出エジプト記』2:11-12)

b. wayyben　**’et-habbayit**
CONJ+建てた.3SGM　**OM-DF+神殿**[17]
「彼は神殿を建てた」(『列王記上』6: 9)

---

[16] Aissen (2003: 453) では単に Hebrew とされているが、同ページにある注釈 17 の記述 “Thanks to Edit Doron for these examples.” から、ここで扱われているのは現代ヘブライ語であると考えられる。

[17] 「家」も表しうる語だが、この文脈では「神殿」の意。

c. wayyben **habbayit** layhwh
CONJ+建てた.3SGM **DF+神殿** 神のため
「彼は神のための神殿を建てた」(『列王記上』6: 1)

ヘブライ語と同じ北西セム語に属するアラム語にもこの現象が観察されるものがある。本研究が対象とするシリア語もこのひとつである。シリア語以外の変種でも、例えば北東現代アラム語 (North-east Neo-Aramaic) のテルケペ方言に DOM が観察される (2-27)。この言語では、(2-27a) のように目的語は標識を伴わずに現れることが可能であり、この場合には目的語 barānɒ「羊」は定とも不定とも解釈できる。他方 (2-27c) のように、目的語と性数で一致する標識が動詞に現れて、これによって目的語であることが示される場合がある。この場合には、目的語は定と解釈される。この標識は (2-27b) に見えるように、人称代名詞接尾形と同形を取る。さらに、(2-27d) のように、動詞に付加される標識に加えて、名詞に前置詞 ta が付くことも可能である。なおこれらの標識の出現には目的語の定性ではなく主題性 (topicality) が関与する。すなわち、目的語が primary topic であったりする場合に標識の出現が許される、というのである (Coghill 2014: 361)。

(2-27) 北東現代アラム語テルケペ方言の例 (Coghill 2014: 341, glossing modified)

a. šqəl-lə **barānɒ**
取った-3SGM 羊
「彼は羊を取った」(羊は定/不定どちらの読みも可能)

b. kəm-šāqəl-**lə**
PST-取る.3SGM-**3SGM.OBJ**
「彼はそれを取った」

c. kəm-šāqəl-**lə** **barānɒ**
PST-取る.3SGM-**3SGM.OBJ** 羊
「彼は羊を取った」(羊は定の読み、lit. 「彼はそれを、羊を取った」)

d. kəm-šāqəl-**lə** **ta** **barānɒ**
PST-取る.3SGM-**3SGM.OBJ** **OM** 羊
「彼は羊を取った」(羊は定の読み)

エチオピア・セム語もその多くは DOM を持つ。最も古い段階のエチオピア・セム語であるゲエズ語の段階では、セム祖語の格変化は部分的に保存されてお

り、主格と対格が区別されていた。従って語形によって主語と目的語は区別することができる (2-28)。

(2-28) ゲエズ語の主格・対格 (Gragg 1997: 255, glossing modified)

wä-räkäbä　　Yosef　　mogäs-ä
CONJ-見つけた.3SGM　PN.NOM　　慈悲-ACC
bäqädmä　　əgzi’-u
前で　　主-3SGM.GEN
「ヨセフは彼の主人の前で慈悲を見出した」

これに対し現代で用いられるエチオピア・セム語には、DOM を発達させたものが多い。例えば北エチオピア・セム語に属するティグリニャ語では、シリア語と同様に従属部標示タイプの標識と主要部標示タイプの標識の 2 つが関与する (2-29) が、これらはいずれも有生性と定性に出現を左右されており、人間/定の目的語に対してより現れやすく、無生物/不定の目的語では現れにくい (Kievit and Kievit 2009)。特に、不定不特定の目的語に対しては標識は現れない (Kievit and Kievit 2009: 70)。表 2-3 は彼らの調査結果を示したものである。また同じく北エチオピア・セム語に属するティグレ語 (Tigré) でも、ʔəgəl-またはʔəl-という語形の標識が目的語が定である場合にのみ現れる (Tosco 1994: 226)。

(2-29) ティグリニャ語の例 (Kievit and Kievit 2009: 46, glossing modified)

a. **niʔis-u**　　ʔinda-näq’~näq’ä=n
頭-3SGM.GEN　CONJ-頷かせる.PF~ITER.3SGM.SBJ=COORD
「彼は何度も頭を頷かせながら」

b. **ni=näbs-a**　　ʔab　　ʕarat
OM=体-3SGF.GEN　　上に　　ベッド
därbɨ-yät-**a**
投げる.PF-3SGF.SBJ-**3SGF.OBJ**
「彼女はベッドの上に身を投げた」

c. **ni=t͡s’iyon**　　t’ämät-∅-**a**
OM=PN　　見る.PF-3SGM.SBJ-**3SGF.OBJ**
「彼はツィヨンを見た」

表 2-3 ティグリニャ語における目的語標識の出現と有生性・定性
(Kievit and Kievit 2009: 59, translated)

	合計	人間		有生物		無生物	
		標識+	標識-	標識+	標識-	標識+	標識-
代名詞	5	5	0	0	0	0	0
固有名詞	23	21	1	0	0	1	0
定	242	20	7	0	0	80	135
不定特定	5	0	2	1	0	0	2
不特定	93	0	7	0	8	0	78
合計	368	46	17	1	8	81	215

南エチオピア・セム語でも、DOM を持つ言語が観察される。例えばアムハラ語では、他動詞の直接目的語が定の場合には目的語を示す標識-n が現れることができる一方、不定の目的語は標識を伴わない (2-30)。またアムハラ語に近縁のアルゴッバ語 (Argobba) でも同様の現象が見られる (2-31)。アルゴッバでは動詞に付加されて目的語名詞に性数を一致させる主要部標示タイプの標識が現れることも可能である (Wetter 2010: 352)。

(2-30) アムハラ語の例 (Meyer 2011 :1192, glossing modified)

a. **ambässa** gäddälä
ライオン 殺した.3SGM
「彼はライオンを殺した」(ライオンは不定)

b. **ambässa-w-n** gäddälä
ライオン-DF-OM 殺した.3SGM
「彼はライオンを殺した」(ライオンは定)

(2-31) アルゴッバ語の例 (Wetter 2010: 352 (a, c), 230 (b), glossing modified)

a. lɜgan **ašɜbo** asmɜt’ɨllɜw
lɜgan **ašɜbo** ∅-asmɜt’-ll-ɜw
明日 **塩** 1SG-運ばせる.IMPF-AUX-1SG
「明日私は塩を運ばせる」

b. **liǰɨččin** lɜʔaxɜyye
liǰ-čči-n lɜʔax-ɜyy-e
子供-DF-OM 送る.IMPR.2SGM-APPL-1SG.OBJ
「私に子供を遣わせよ」

c. ʕali **ɨhmɜdɨn** mɜttɜʕa**y**
ʕali **ɨhmɜd-n** mɜttɜʕ-ɜ-**y**
PN **PN-OM** 叩く.PF-3SGM.SBJ-**3SGM.OBJ**
「アリーはアハマドを叩いた」

またグラゲ諸語と呼ばれるグループの西グラゲ諸語に属するチャハ語 (Chaha あるいは Cheha) では、シリア語同様に従属部標示タイプの目的語標識と主要部標示タイプのそれの 2 種類がともに出現したりしなかったりする (2-32)。そのうち従属部標示型の出現は目的語名詞句の有生性と定性がコントロールしている可能性が考えられる (原 2019b: 91)。主要部標示型のものは目的語が定のときにほぼ限られる (原 2019b: 92)。同じグラゲ諸語である[18]マスカン語でも同様の現象が見られ (2-33)、かつ同じような指摘ができる (Hara 2018: 82-83)。北グラゲ諸語に属するキスタネ語 (Kistane、あるいはソッド Soddo 語) でも、目的語が定である場合に現れる目的語標識 yä-が存在する (Tsehay 2008: 51-55)。「グラゲ」の名を共有しながらこれらとは系統的に隔たると考えられている東グラゲ諸語のひとつ、ウォラネ語 (Wolane) では、目的語が人称代名詞や固有名詞のときにだけ現れる目的語標示-nɛ が存在する (Meyer 2006: 157-158)。この標識-nɛ は固有名詞の場合出現が任意となり、現れる場合と現れない場合とで解釈に差が生じる (2-34)。またこれとは別に、目的語が定の名詞である場合には動詞にこれと一致する目的語標示 (人称代名詞接尾形と同形) が現れる (2-35, Meyer 2006: 288-289)。

(2-32) チャハ語の例 (原 2019b: 67-69)
a. **mäkina** aːšäm
mäkina aːš-ä-m
車 見る.PF-3SGM.SBJ-PST
「彼は車を見た」
b. **yämäkinaxuta** aːšäm
yä-mäkina-xuta aːš-ä-m
OM-車-DF 見る.PF-3SGM.SBJ-PST
「彼はその車を見た」

[18] グループ内部の系統的位置づけについては不明。

c. **missxuta** a:šä**n**im
miss-xuta a:š-ä-^{w}**n**[19]-m
男-DF 見る.PF-3SGM.SBJ-**3SGM.OBJ**-PST
「彼はその男を見た」

d. **yämissxuta** a:šä**n**im
yä-miss-xuta a:š-ä-^{w}**n**-m
OM-男-DF 見る.PF-3SGM.SBJ-**3SGM.OBJ**-PST
「彼はその男を見た」

(2-33) マスカン語の例（Hara 2018: 72, glossing modified）

a. huti **mäkina** säddäd-ä
3SGM **車** 追う.PF-3SGM.SBJ
「彼は車を追った」(車は不定)

b. huti **yä-miss** säddäd-ä
3SGM **OM-男** 追う.PF-3SGM.SBJ
「彼は男を追った」(男は不定)

c. huti **mäkina-i** säddäd-ä-**n**[20]
3SGM **車-DF** 追う.PF-3SGM.SBJ-**3SGM.OBJ**
「彼はその車を追った」

d. huti **yä-miss-i** säddäd-ä-**n**
3SGM **OM-男-DF** 追う.PF-3SGM.SBJ-**3SGM.OBJ**
「彼はその男を追った」

(2-34) ウォラネ語の例 (Meyer 2006: 158, glossing modified)

a. **milāt** yēnzutān
milāt yēnz-u-**ytɛ**-ān
PN 捕まえる.PF-3PL-**3SGF.OBJ**-AUX.NPST
「ミラートが捕まった/彼らはミラートを捕まえた」

---

[19] この形態素-^{w}n のうち-^{w}は、動詞語幹部分に円唇化しうる子音が含まれるときにだけ、その子音を円唇化させるという形で現れ、そのような子音が無い場合には顕在化しない。
[20] この論文 (Hara 2018) では動詞に現れる 3SGM.OBJ の形態素を-n としているが、この形態素には動詞語幹部分に円唇化しうる子音が含まれる場合にその子音を円唇化させるという特徴があり、従って原 (2019a) のように-^{w}n と分析すべきものである。

b. **milātnɛ** yēnzu**t**ān
milāt-nɛ yēnz-u-**ytɛ**-ān
PN-OM 捕まえる.PF-3PL-**3SGF.OBJ**-AUX.NPST
「彼らはミラートを捕まえた」

(2-35) ウォラネ語の例 (Meyer 2006: 288-289, glossing modified)
a. ʔawǧē šāmil **lām** ʔahāβɛ
ʔawǧē šāmil **lām** ʔahāb-ɛ
今日 PN **牛** 売る.PF-3SGM
「今日シャーミルは牛を売った」
b. wurbāy **ṭāyiy** qɛtɛle**y**
wurbɛ-y **ṭāy-y** qɛtɛl-ɛ-**y**
ライオン-DF **羊-DF** 殺す.PF-3SGM-**3SGM.OBJ**
「そのライオンがその羊を殺した」

また、アッカド語の変種でメソポタミア地域の北側、アッシリアで使われていた新アッシリア語でも、DOM と考えられる現象が観察される。この方言ではすでに古い段階に存在した格の区別が失われており (Streck 2011: 378-379)、主語と目的語の区別が不明瞭になる場合に、方向を表す前置詞である ana が目的語を標示するものとして用いられることがあった (Hämeen-Anttila 2000: 77、2-36)。この標識は義務的ではなく、従って現れたり現れなかったりする。

表 2-4 新アッシリア語における主格・対格の合流 (Streck 2011: 379, translated)

	単数 主格	単数 属格	単数 対格	複数 主格	複数 斜格
中アッシリア語	šarru	šarre	šarra	šarrū	šarrē
新アッシリア語	šarru	šarre	šarru	šarrē	šarrē

(2-36) 新アッシリア語の例 (Hämeen-Anttila 2000: 77, glossing added)
a-na **PN** a-di LÚ.TUR.[MEŠ]-˹šú˺ id-du-ku
OM **PN** ともに 従者.PL-3SGM.GEN 殺す.PST.3PLM
「彼等は PN を彼の従者と共に殺した」

2.3. これまでのシリア語 DOM 研究

本節ではシリア語の DOM について、既存の文法書がどのように記述しているか、及びどのような研究がなされているかを確認する。

初めに Nöldeke (1898) の記述を取り上げる。Nöldeke (1898: 218) によれば、従属部標示タイプの標識 l-は定の目的語名詞を標示する。また動詞に付加される、名詞の性および数に一致する主要部標示タイプの標識が現れると限定 (Determination) がより強調される。この主要部標示タイプの標識が現れるときには従属部標示タイプの l-が省略されることもある。従って目的語の表し方は (2-37) のように整理できる。

(2-37) シリア語の目的語標示 (Nöldeke 1898: 218, glossing added)[21]

[不定の目的語]「彼は家を建てた」

a. bnā　　baytā
　建てる.PF.3SGM　　家

[定の目的語]「彼はその家を建てた」

b. bnā　　baytā
　建てる.PF.3SGM　　家

c. bnā　　**l**-baytā
　建てる.PF.3SGM　　**OM-**家

d. bnā-**y**　　**l**-baytā
　建てる.PF.3SGM-**3SGM.OBJ**　　**OM**-家

e. bnā-**y**　　baytā
　建てる.PF.3SGM-**3SGM.OBJ**　　家

またこの (2-37b～e) の 4 通りがどのように使い分けられているか、という点については上述のように「名詞に一致する目的語語尾が動詞に付加される場合には、限定がより強い (“Die Determination ist stärker, wenn das dem Subst. entsprechende Objectsuffix am Verbum hinzukommt”, Nöldeke 1898: 218)」と述べるほか、目的語標識 (Objectzeichens) の出現についていくつかの傾向を挙げている。その傾向とは、人名には標識が付けられるのが普通であること、人称代名詞接尾形が付加されて所有者が動作主と同一となるような場合には標識が現れにくいこと、指示詞や疑問詞は標識 l-を伴ったり伴わなかったりと揺れがあること、などである (Nöldeke 1898: 220-222)。しかしながら同時に、「ほとんどの場合で限定された語につく目的語標識の選択/省略に関しては全くの揺れ

[21] Nöldeke (1898) の表記は西方言で用いられるセルト一体で行われている。母音の翻字は、本研究で利用した資料の一部で用いられるネストリウス体の母音記号 (pp. iii-iv 参照) の翻字規則と統一的に扱うため、母音記号「ܰ」を a、「ܳ」および「ܲ」 (これらの違いは文字の上に置くか下に置くかというものでしかない) を ā で示した。また Nöldeke (1898) は語順の交替が可能としているが、表記が煩雑となるためここでは省略した。

が勝る (“In den meisten Fällen herrscht hinsichtlich der Wahl oder der Weglassung eines Objectzeichens bei Determinierten vollständiges Schwanken”, Nöldeke 1898: 220)」とも述べている。また後述のように、標識の使用を限定された目的語に限定した点については Muraoka (2013) や Coghill (2014) によって反例が示されている。

また Brockelmann (1962: 115) は、直接目的語は標識を伴わずに現れるものがほとんどで、目的語が定であるときには従属部標示型の標識 l-が現れることもある、としている。また主要部標示型の標識については、これが出現する例が存在することについてのみ触れている。

次に Muraoka (2013) を見る。ここでは必ず補語を取らなければいけない動詞を他動詞と呼び、この補語 (= 直接目的語) が形式を伴わずに示されることもあれば、前置詞 l-によって標示されることもある、とされている (Muraoka 2013: 67)。さらに Nöldeke (1898) が標識の出現を目的語名詞句が定の場合に限定した点については、不定の目的語に対しても標識が現れうることを (2-38) の用例を示しながら指摘している。また、動詞側に現れる標識についてはごく一般的なものである、と述べている (“The proleptic[22] use of object pronouns is quite common,” Muraoka 2013: 68)。

(2-38) 不定の目的語が標識を伴う例① (Muraoka 2013: 67, glossing added)[23]

ḥzā	**lgabrā**	**meṣrāyā**
ḥzā	**l-gabrā**	**meṣrāyā**
見る.PF.3SGM	**OM-男**	エジプト人
kad	māḥē	**lgabrā ʕebrāyā**
kad	māḥē	**l-gabrā ʕebrāyā**
CONJ	打つ.ActPtc.SGM	**OM-男 ヘブライ人**

「彼 (モーセ) はヘブライ人を打つ一人のエジプト人を見た」(『出エジプト記』2: 11)[24]

Muraoka (2005) でも同様に、直接目的語は形式的な標識を伴うことなく動詞

---

[22] 原文では poleptic となっているが、これは誤植と思われるため修正して提示。同書初版本(Muraoka 1987: 55) や同一著者による書籍 (Muraoka 2005: 88) など参照。

[23] Muraoka (2013) は表記にセルト一体を用いている。母音記号は Nöldeke (1898) と同じ規則で示し (注 21 参照)、注 21 に無いāはその後に matres lectionis のʔがある場合は ē で、それ以外では e で示す。

[24] シリア語には定/不定の標示が無いため分かりづらいが、この箇所の聖書ヘブライ語原文を見るといずれの「男」も定冠詞は付されておらず、従って不定ということになる。この点については他言語による同一箇所の例 (2-43～46) も参照されたい。

の隣に現れることができる目的語、として定義され、この直接目的語が標識 l- を伴うこともある、と説明されている (Muraoka 2005: 77)。また、動詞に付加する標識については、文脈的に定 (contextually definite) であると考えられる名詞句が、これに対応する人称代名詞に先行されて現れる prolepsis と呼ばれる現象が、直接目的語となる名詞句に対して起こった例として扱われている (Muraoka 2005: 88)。また他動詞の直接目的語において prolepsis が現れる場合には、名詞句の方にも標識が現れる場合が多く、動詞側の標識だけが現れる例 (2-39c) は稀であるとも述べられている (Muraoka 2005: 78)。他方で Muraoka (2005) が Nöldeke (1898) 同様に示した 4 通りの目的語標示の使い分けに関しては、動詞に付加される標識についての上述のことに触れているのみで、(2-39) のように 4 通りすべてに対して同じ訳を与えている。

(2-39) シリア語の目的語標示 (Muraoka 2005: 78)[25]

a.	qabbel	šliḥā	"they received an/the apostle"
b.	qabbel	**la**šliḥā	
c.	qabbl**uy**	šliḥā	
d.	qabbl**uy**	**la**šliḥā	

Khan (1984) は、シリア語を含むセム系言語について、従属部標示型目的語標識 (Object Marker)、あるいは指示対象の名詞と共起する人称代名詞 (Agreement Pronoun, 目的語名詞と一致するものに限らない) の出現には、それを伴う名詞類が何らかの形で定 (definite) である必要があるとしている (Khan 1984: 469)。そして、これらの標識の出現は定であったり特定であったり、あるいは固有名詞であったり人間であったりといった「個別化された individuated」名詞に対してより生じやすい、としている。特にシリア語における Agreement Marker の出現については、主として人間を指すもの、特に人間で固有名詞のものと、無生物で、直前の文脈に言及されたもののような、テキスト的に強調された (textually prominent) ものに対してこれが現れる、と述べている (Khan 1984: 473)。

以上を整理すると、以下のようになる。すなわちシリア語で他動詞の直接目的語を標示する方法には、(2-40) 及び表 2-5 に整理できる 4 通りが存在する。

[25] Muraoka (2005) は表記にエステランゲロ体を採用し、母音記号は本稿凡例にあるネストリウス体のものを使用している。翻字は本稿凡例のとおり。

(2-40)

a. 名詞・動詞ともに標識を伴わない
b. 名詞が標識を伴う
c. 動詞が目的語名詞と一致する標識を伴う
d. 名詞・動詞ともに標識を伴う

表 2-5 目的語を示す 4 通りの方法の関係

	名詞側：標識なし	名詞側：標識あり
動詞側：標識なし	(2-40a)	(2-40b)
動詞側：標識あり	(2-40c)	(2-40d)

これらの方法の使い分けについて上記の 4 文献はいずれも定性の関与を指摘している。ただし、その詳細は異なる。Nöldeke (1898) 、Brockelmann (1962)、Khan (1984) は従属部標示型の標識 l-を用いる方法は定の名詞句に限られるとする一方、Muraoka (2005, 2013) は不定の名詞句にも用いられるとしている。また Coghill (2014) も不定の目的語に対してこの標識が現れた例があることを示している (2-41)。

(2-41) 不定の目的語が標識を伴う例② (Coghill 2014: 358, citing Nöldeke 1904: 231[26], glossing modified)

ḥzaw	l-gaḇrā	ḥaḏ	d-ukkām-(h)wā
見る.PF.3PLM	OM-男	一	REL-黒い-COP.PST.3SGM

「彼らはある黒人の男を見た」

また Khan (1984) の記述は、同様の現象を持つセム系言語全体に対する、ある程度一般化された記述である。従って、個別の言語、特にシリア語で実際にどのように標識が用いられているのか、という点には検討の余地も残る。さらに Bekins (2014) も指摘するように、「個別化 individuation」を構成する個々の成分が標識の出現/非出現に与える影響についても議論の余地がある (cf. Bekins 2014: 53)。

主要部標示タイプの標識については、Brockelmann (1962) が条件を述べていないほかは、これも何らかの条件について言及している。Muraoka (2005) と Khan (1984) は主要部標示タイプの標識の出現を、名詞句がそれに一致する余

[26] Coghill (2014) は Nöldeke (1898) の英訳版を参照している。この例は、翻訳元である Nöldeke (1898) では 221 ページに掲載されている。

剰な人称代名詞を伴って現れる prolepsis の例としており、prolepsis の条件として、Muraoka (2005 :88) は名詞句が文脈的に定 (contextually definite) であることを、Khan (1984: 473) は人間を指すもの、特に人間で固有名詞のものと、無生物でテキスト的に強調された (textually prominent) ものであることを挙げている。前者の contextually definite と後者の textually prominent は同じことを指していると考えられる。また Nöldeke (1898) は名詞への標識と動詞への標識が重複する場合には名詞が定であることがより強調される (Nöldeke 1898: 218) としており、これも同種のことを述べているものと思われる。しかしいずれにしても、この「強調」がどのような意味での「強調」なのか、という点には疑問が残る。また Khan (1984) が指摘するように、名詞句がこの条件を満たしているからといって、余剰な人称代名詞が必ず現れる、というわけではない。

2 種類の標識の重複については Nöldeke (1898) と Muraoka (2005) によれば、動詞側に標識が現れる場合には名詞側の標識も現れるのが普通であり、名詞側の標識が現れない場合は稀である。しかし、この名詞側の標識の脱落がどのような場合に起こりうるのかについてはどちらも述べていない。

また Brockelmann (1962) は直接目的語は標識を伴わずに現れるものがほとんどであることを述べているが、Nöldeke (1898) と Muraoka (2005) は目的語の示し方にヴァリエーションがあるということを述べるにとどまっていることも指摘できる。そのため 4 通りの方法の使用実態についてはよくわからないと言わざるをえない。

以上を踏まえて本研究では、シリア語における目的語の表し方のヴァリエーションがどのように使われており、どのような条件によって標識が現れたり現れなかったりしているのかを、実際のテキストから集めた用例によって標識の使用実態を示しながら、実証的に明らかにすることを目的とする。

2.4. 有生性・定性

2.1.、2.2.の議論から、多くの言語で目的語標示の出現/非出現には有生性と定性のいずれか、または両方が関与していることが分かる。このことを踏まえて本論文では、第 1 章で述べたように、資料から集め他動詞の直接目的語となる名詞句を有生性・定性に基づいて分類して議論を行う。これにあたって本節では、この有生性あるいは定性をどのように判断するか、ということを述べておく。

2.4.1. 有生性

有生性に関しては Aissen (2003) にある、有生性の階層 (2-4) に従った分類

を行う。すなわち、基本的に人間/人間以外の有生物/無生物の 3 つに分類する、ということであって、それぞれの分類群内部を更に細分することは行わない。

(2-4) 有生性の階層 (再掲) :

人間 (Human) > 有生 (Animate) > 無生 (Inanimate)

この「有生性」と DOM の関わりについて、ここでもう少し述べておきたい。「有生性 (animacy)」という概念は単に生き物かどうか、というものではない (Yamamoto 1999: 1)。このことは (2-4) の階層で人間とそれ以外の有生物が区別されていることや、スペイン語の DOM が人間とそれ以外を区別していることからも明らかである。この階層は有生物の中でも人間だけを特別に取り出して、他の生物よりも「有生性」が高いものとして位置づけている。このように「有生性」という概念が人間を特別扱いするような階層をなすということは、この概念が人間中心的 (anthropocentric) な視点から構成されている、あるいは分析されていることを示す (cf. Yamamoto 1999: 9)。そしてこの分析はかなりの程度妥当なものであると考えられる。これを示すのがスペイン語の DOM におけるヴァリエーションである。Haspelmath (2008: 2) によるとスペイン語の標識は目的語が人間である場合に現れるものとされる。しかし寺崎 (1998: 12) は人間以外が目的語となる場合にもこれが出現することがあることに触れている。彼によれば、その場合にはその目的語が擬人化されているものとして解釈されることが多い。このことは有生性の階層が「人間にどの程度近いか」あるいは「人間らしさ (humanness)」の階層として理解できることを示唆する。従って有生性が関与する DOM の場合、人間以外の有生物について一様に標識の出現/非出現がコントロールされているのではなく、どの程度人間に近い/人間らしい (と考えられる) かによって、同じ「人間以外の有生物」に分類される名詞であっても標識の現れ方が異なりうることが考えられる。

ただし、本研究では以下に挙げる理由から、「人間以外の有生物」内部の分類については扱わない。1) 本研究で扱うデータはこの「人間以外の有生物」に分類できる用例の数が限られる。 2) 本研究が扱うシリア語はすでに母語話者のない言語であり、従って話者がそこで表されている生物についてどのように考えていたかを知るには限界がある。そのため、本研究では「人間」「人間以外の有生物」「無生物」の 3 カテゴリーと、後述する「神」の計 4 カテゴリーで分類を行う。

また植物を表す名詞については、本研究のデータでは動きのある生物としてではなく、動かぬ物品として言及されている場面が多いことから、本研究では原則として無生物として扱う。この点については、Yamamoto (1999) の以下の

記述を参考にする。

> As Locke and Fowler argue, the capability of locomotion is certainly one of the most fundamental elements of typical animate beings. In this sense, it is natural that plants are not perceived to be typically animate, although they grow – growing (including blooming, budding, etc.) being another element which partly characterises animateness, but not as significantly as the capability of locomotion does. (Yamamoto 1999: 16)

また以降の章で示すように、本研究で扱ったデータには神を表す例が確認される。これについては、シリア語資料の多くがキリスト教徒によるものであることから、上記のいずれにも当てはまらない「神」として別扱いをする。この「神」の階層上の位置については、『創世記』1: 27「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。 (新共同訳)」などの記述を参考に、便宜的に人間より上位のものとして配置する。

2.4.2. 定性

定性も原則として Aissen (2003) にある定性の階層 (2-5) に従って分類する。

(2-5) 定性の階層 (再掲) :

人称代名詞 (Personal Pronoun) > 固有名詞 (Proper Name) > 定の名詞句 (Definite) > 不定特定の名詞句 (Indefinite Specific) > 不定不特定の名詞句 (Non-specific)

ところでシリア語における定/不定の区別は簡単ではない。例えば英語やフランス語では、目的語の定/不定は以下に示すように冠詞によって区別できる (2-42, 2-43)。またシリア語と同じセム語に属するヘブライ語でも、定冠詞によって名詞が定であることは判別できる (2-44)。またアラビア語では定冠詞が定を示すだけでなく、nunation あるいはタンウィーンと呼ばれる名詞語尾の-n によって不定であることが示される (2-45)。

(2-42) 英語における定・不定の標示

and he saw [**an** Egyptian $_{INDF}$] beating a Hebrew,....he struck down [**the** Egyptian $_{DF}$] (『出エジプト記』2: 11-12, English Standard Version)

(2-43) フランス語における定・不定の標示

Il	vit	[**un**	Égyptien]	qui	frappait
彼	見た	[INDF	エジプト人 $_{INDF}$]	REL	叩く

un	Hébreu...	...il	tua	[**l'**Égyptien],
INDF	ヘブライ人...	...彼	殺した	[DF+エジプト人 $_{DF}$]

「彼 (モーセ) はヘブライ人を打つエジプト人を見た……彼はそのエジプト人を殺した」(『出エジプト記』 2: 11-12, Louis Segond Version)

(2-44) 聖書ヘブライ語における定 (・不定) の標示

wayyar’	**’îš**	**miṣrî**	makkeh
CONJ+見た.3SGM	**男**	**エジプト人**	打つ.Ptc.3SGM

’îš-‘ibrî ...	...wayyak	’et-**hammiṣrî**
男-ヘブライ人…	…CONJ+打った.3SGM	OM-**DF+エジプト人**

「彼 (モーセ) はヘブライ人を打つ一人のエジプト人を見た……彼はそのエジプト人を打った」(『出エジプト記』2:11-12)

(2-45) アラビア語における定・不定の標示

faraʔā	**rağulan**	**miṣrīyan**
fa-raʔā	**rağul-a-n**	**miṣrī-a-n**
CONJ-見た.3SGM	**男-ACC-INDF**	**エジプトの-ACC-INDF**

yaḍribu	rağulan	ʕibrānīyan...
yaḍribu	rağul-a-n	ʕibrānī-a-n...
打つ.3SGM	男-ACC-INDF	ヘブライ人の-ACC-INDF

...faqatala	**lmiṣrīya**
...fa-qatala	**ʔal-miṣrī-a**
...CONJ-殺した.3SGM	**DF-エジプト人-ACC**

「彼 (モーセ) はヘブライ人を打つ一人のエジプト人を見た……彼はそのエジプト人を殺した」(『出エジプト記』2:11-12)

これに対しシリア語の場合には、そのように定/不定を標示する方法が存在しない。シリア語の名詞には通常出現する emphatic state と呼ばれる形と、absolute state、construct state という 3 つの語形が存在する (表 2-6)。このうち contruct state は「名詞 A の名詞 B」のように修飾語となる名詞や前置詞句を伴う名詞 B が取る語形であり、自由形に対する拘束形として存在する (2-46)。ただしこの construct chain と呼ばれる構造はシリア語では小辞 d-を用いた構文 (2-47) に取って代わられ、ほとんど用いられない (Muraoka 2005: 22)。シリア語で construct

chain が用いられるのは成句や熟語の例がほどんどである (Thackston 1999: 53)。

表 2-6 シリア語名詞の 3 つの State: malkā 「王」の場合

emphatic	absolute	construct
malkā	mlek	mlek

(2-46) construct chain の例

traʕ　　malkutā
門.CSTR　　王国
「王宮 (lit. 王国の門)」

(2-47) d-構文の例

tarʕā　d-malkutā
門　　GEN-王国
「王国の門」

問題となるのは残る emphatic state と absolute state である。Emphatic state は男性単数の場合語尾に-ā を持つが、この-ā は歴史的には定冠詞であり、emphatic state はその名詞が定であることを示していたと考えられる (Guillaumont 1951: 91, Rubin 2004: 113-118)。しかしこの定を標示する機能はシリア語の段階では失われてしまい (Rubin 2004: 100)、定か不定かを問わず名詞は通常 emphatic state をとるようになっている (Guillaumont 1951: 91-2)。残った absolute state はごく限られた条件下でしか用いられない。このような事情により、シリア語には名詞の定/不定を示す形式が存在しない。従って名詞の定/不定を判定するにはなんらかの基準を定めておく必要がある。

この基準として本研究では同定可能性 (identifiability) を活用する。Lyons (1999: 2-13) は定性の理解に関連して、親密性 familiarity、同定可能性 identifiability、唯一性 uniqueness、包括性 inclusiveness などの概念を示している。親密性による理解では、定とは話し手と聞き手の双方が指示対象に関する知識を持っていることを意味するものとして理解される。また同定可能性による説明では、聞き手がその指示対象を同定することが可能であるときに定であると考える。唯一性はその名詞が表しうるものが 1 つしか存在しないことを示し、包括性は指示対象がその記述内容に適う物体/集合の全体であることを言う。これらの概念のうち、Lyons (1999) が定性において関与的と見なすのが同定可能性と包括性である (Lyons 1999: 15, 274)。

本研究ではこの Lyons (1999) を参考に、名詞の定性を「読み手が指示対象を

同定できると考えられるかどうか」によって判断する。例えば ktābā「本」という名詞があれば、どの本を指しているか読み手が同定できると考える場合には定、そうでない場合には不定と判断する。また上述の定性の階層では不定の名詞句が特定 (specific) と不特定 (non-specific) に区別されている。本研究でもこれに従って不定名詞句を特定と不特定に分類する。この際には書き手が指示対象として特定のものを想定していると考えられるかどうか (= 特定性 specificity) によってこれを判断する。これを図式化すると表 2-7 のようになる。

表 2-7 本研究における定性の判定

同定可能性 [±identifiable]	特定可能性 [±specific]	判定
[+identifiable]	[+specific]	定
[-identifiable]		不定特定
	[-specific]	不定不特定

なお (2-5) にあるもので表 2-7 に含まれないものは、いずれも特別の基準を述べ立てる必要は無いと思われる。なぜなら、固有名詞は人や街、地域を指す名前であればそれであると判断できるからである。また人称代名詞については、第 1 章で述べたように、シリア語では人称代名詞が目的語の位置に立つ場合に振る舞いが名詞のそれと異なるため、本研究の射程外となるからである。

第 3 章 仮説の提案[27]

3.1. 本章の目的

本章ではシリア語の DOM を記述する第一歩として、『偽ヨシュアの年代記 (Chronicle of Pseudo-Joshua)』という単一の資料から、そこに現れる直接目的語名詞句の用例を網羅的に収集し、この資料における DOM の様相を明らかにするとともに、シリア語 DOM を説明するための仮説を提案することを目的とする。また以降の章では本章で提案する仮説がシリア語の東西両方言にも拡大できるものであるかを検証する。

3.2. 資料

本章で取り上げる資料は『偽ヨシュアの年代記 (Chronicle of Pseudo-Joshua)』[28]という年代記資料 (以降『偽ヨシュア』とする) である。この資料は東ローマ帝国の支配下にありペルシア帝国との境界に近いエデッサ (現トルコ領シャンルウルファ) とその近郊地域で、5 世紀末から 6 世紀初頭の 10 年ほどの期間に起きた戦争や飢饉などの出来事を書き記した資料である。テキストの正確な成立年は定かではないが、そこに描かれた出来事の発生からそれほど時間を経ない内に書かれたものであることは間違いないようである (Brock 1979: 11, Trombley and Watt 2011: xi)。執筆者は不明だが、エデッサかその周辺の地域の人物で、執筆もその地域でなされたものと考えられる (Brock 1979: 11)。この資料はより大きいテキスト『ズークニーン年代記 (Zuqnin Chronicle)』の一部として保存されており、一冊の写本 Vat. Sir. 162 の foll. 65r.-86v.に記されている。ここで本資料を採用する理由は以下のとおりである。

第一は、本資料がオリジナルからシリア語で記された散文作品であるという点である。すなわち第 1 章で述べたように、翻訳資料ではない資料を用いることで原語での表現から影響されている可能性を、韻文ではないものを用いることで韻律等によって影響される可能性を、それぞれ排除することができるということである。

第二はテキストの成立時期が比較的推測可能であるという点である。テキス

---

[27] 本章の内容は原 (2018) を大幅に改定したものである。また、本稿の執筆に際し用例数の漏れや誤りを修正している。

[28] 以前は『柱頭行者ヨシュアの年代記 (Chronicle of Joshua the Stylite)』と呼ばれていた。この名前は本資料が柱頭行者ヨシュアの手になるものと考えられていたことに由来する (Brock 1979: 11)。しかし Trombley and Watt (2011 : xxv-xxvi) はこの説を採っておらず、このヨシュアという人物は本資料が保存されていた写本 Vat. Sir. 162 の書記 =『ズークニーン年代記』の著者とみなされている。

トの冒頭部分 (Chabot 1927: 235-241) は著者によるまえがきである。この箇所には著者がテキスト本文に記述されている出来事の数々と同時代の人物であることが度々示唆されている。Brock (1979) によれば、このテキストの成立時期は 6 世紀前半、記述が終わる西暦 507 年からそれほど離れていない時期である[29]。この推定が正しければ、このテキストはシリア語が話し言葉としても用いられていた時代に成立したもので、一人のシリア語話者の言語使用を反映していると考えることができる。

なお本論文ではシリア語テキストとして Chabot (1927) のものを使用する。また写本 Vat. Sir.162 は電子化されており、ウェブサイトにて参照が可能である[30]が、こちらは適宜参照することとする。さらに必要な場合には Chabot (1927) にある注釈のほか、他の出版された版や解説・訳書等の記述も参照する。

3.3. データ

『偽ヨシュア』から収集できた直接目的語名詞句の用例は全 838 例であった。目的語標示を伴わない例 (以下 N)、名詞に目的語標示を伴う例 (以下 M)、動詞に目的語標示を伴う例 (以下 A)、名詞と動詞の両方に目的語標示を伴う例 (以下 MA)にこれを分類すると、表 3-1 のようになる。(3-1) にはそれぞれ実際の用例を示す。

表 3-1 『偽ヨシュア』中の目的語名詞句の用例数

	N	M	A	MA	合計
用例数	556	182	5	95	838
割合	66.4%	21.7%	0.6%	11.3%	100.0%

(3-1)

a. N の用例[31]

wʔḥdw	**trʕʔ**	**dmdyntʔ**
w-ʔḥdw	**trʕʔ**	**d-mdyntʔ**
CONJ-取る.PF.3PLM	**門.PL**	**GEN-町**

「そして彼らは<u>町の門を</u>取った」

(『偽ヨシュア』246: 26)

---

[29] “on internal grounds it is likely that the author wrote in Edessa not long after 507.” (Brock 1979: 11)

[30] https://digi.vatlib.it/view/MSS_Vat.sir.162 (2021/11/24 最終閲覧)

[31] 例文のシリア語表記については、Chabot (1927) が母音記号を使用していないため、ここでも子音字の翻字のみとしている。

b. M の用例

knš　**lklh**　**ḥylʔ**
knš　**l-kl-h**　**ḥylʔ**
集める.PF.3SGM　**OM-すべて-3SGM**　**軍**
dprsyʔ
d-prsyʔ
GEN-ペルシア人.PL
「彼はペルシアの全軍を召集した」

(『偽ヨシュア』274: 20)

c. A の用例

klh　gyr　**gzʔ**　**d**mlkʔ　dqdm-why
kl-h　gyr　**gzʔ**　**d-**mlkʔ　d-qdm-why
すべて-3SGM　CONJ　**宝**　**GEN-**王　REL-前-3SGM
spq**h**　hwʔ
spq-**h**　hwʔ
使い尽くす.PF.3SGM-**3SGM.OBJ**　AUX.3SGM
bqrbʔ　qdmyʔ
b-qrbʔ　qdmyʔ
で-戦争.PL　以前の.PL
「なぜなら彼以前の王の宝すべてを彼は先の緒戦で使い尽くしてしまっていたから」

(『偽ヨシュア』243: 21-22)

d. MA の用例

wmknšyn　**lhyn**
w-mknšyn　**lhyn**
CONJ-集める.ActPtc.PLM　**3PLF.OBJ**
lšldʔ　**hlyn**
l-šldʔ　**hlyn**
OM-死体.PL　**これらの**
「そして彼らはこれらの死体を集めた」

(『偽ヨシュア』268: 17)

観察された直接目的語名詞句を有生性・定性ごとに分類した結果が表 3-2、3-3 である。なお有生性・定性のラベルはそれぞれ神 (表中 God と表記、以下同

様)、人間 (H)、人間以外の動物 (NHA[32])、無生物 (I)、固有名詞 (PN)、定 (DF)、不定特定 (Spec)、不定不特定 (NSpec) とする。それぞれの例文を (3-2) と (3-4) に示す。判断を迷ったものは「保留」としておく。なお有生性で判断を保留したものは語義不明の一例 (3-3) である。

また有生性・定性の組み合わせごとに用例数を数えたものを表 3-4 に示す。なお表 3-4 では有生性・定性のいずれかで判断を「保留」としたものである用例は省いている。

表 3-2 『偽ヨシュア』中の目的語名詞句と有生性

用例数	N	M	A	MA	合計
God	0	2	0	0	2
H	70	111	1	36	218
NHA	19	3	0	2	24
I	466	66	4	57	593
保留	1	0	0	0	1
合計	556	182	5	95	838

(3-2)

[God の用例]

a. wḥzʔ klnš wšbḥ **lʔlhʔ**
w-ḥzʔ kl-nš w-šbḥ **l-ʔlhʔ**
CONJ-見る.PF.3SGM すべて-人 CONJ-讃える.PF.3SGM **OM-神**
「すべての人がこれを見て、神を讃えた」
(M の例、『偽ヨシュア』306: 6)

[H の用例]

b. wšdr **ʔyzgdʔ** lbyt rhwmyʔ
w-šdr **ʔyzgdʔ** l-byt rhwmyʔ
CONJ-送る.PF.3SGM **使者.PL** へ-ローマ帝国
kd sbr ddḥlyn
kd sbr d-dḥlyn
CONJ 考える.ActPtc.SGM C-恐れる.ActPtc.PLM

[32] Non-Human Animate の頭文字。

wmšdryn lh dhbʔ
w-mšdrtn l-h dhbʔ
CONJ-送る.ActPtc.PLM に-3SGM 金
「彼は彼らが恐れて彼に金を送ってくると考えて、ローマ帝国へ使者を送った」

(N の例、『偽ヨシュア』250: 20-21)

c. wqṭl **lmgwšʔ** **d**bynthwn
w-qṭl **l-mgwšʔ** **d-**bynt-hwn
CONJ-殺す.PF.3SGM **OM-マギ.PL** **REL-**間に-3PLM
「彼らのところにあったマギたちを彼は殺した」

(M の例、『偽ヨシュア』249: 18)

d. wʔp **ʔylyn** **d**ʕlw lʔwrhy
w-ʔp **ʔylyn** **d-**ʕlw l-ʔwrhy
CONJ-も **これらのもの** **REL-**入る.PF.3PLM に-PN
twb mwtnʔ ʔdrk **ʔnwn**
twb mwtnʔ ʔdrk **ʔnwn**
また 疫病 取る.PF.3SGM **3PLM.OBJ**
「またエデッサに入った者たちも疫病は襲った (lit. 取った/たどり着いた)」

(A の例、『偽ヨシュア』265: 16-17)

e. rwrbnʔ dyn dprsyʔ
rwrbnʔ dyn d-prsyʔ
貴族.PL CONJ GEN-ペルシア人.PL
ʔtḥšbw hww bksyʔ
ʔtḥšbw hww b-ksyʔ
考える.PF.3PLM AUX.3PLM に-秘密
dnqṭlwn**yhy** **lqwd**
d-nqṭlwn-**yhy** **l-qwd**
C-殺す.IMPF.3PLM-**3SGM.OBJ** **OM-PN**
「ペルシアの貴族たちは密かに、カワードを殺そうと考えていた」

(MA の例『偽ヨシュア』250: 29-251: 2)

[NHA の用例]

f. ṭlyʔ ḥd rʕʔ hwʔ
ṭlyʔ ḥd rʕʔ hwʔ
子供 一 飼育する.ActPtc.SGM AUX.3SGM

gmlʔ wḥ**mrʔ**
gmlʔ w-ḥ**mrʔ**
ラクダ.PL CONJ-**ロバ.PL**
「一人の子供がラクダたちとロバたちを飼育していた」
(N の例『偽ヨシュア』296: 18-19)

g. w**lgmlʔ** šbw
w-**l-gmlʔ** šbw
CONJ-**OM-ラクダ.PL** 捕らえる.PF.3PLM
「彼らはラクダたちを捕らえた」
(M の例、『偽ヨシュア』283: 11)

h. wʔzlw npl ʕl ʔylyn
w-ʔzlw npl ʕl ʔylyn
CONJ-行く.PF.3PLM 落ちる.PF.3SGM[33] 対して これらの者
drʕyn hww **lhwn**
d-rʕyn hww **lhwn**
REL-世話をする.ActPtc.PLM AUX.3PLM **3PLM.OBJ**
lrkšʔ
l-rkšʔ
OM-馬.PL
「彼らは行って、馬を世話していた者たちを攻撃した[34]」
(MA の例、『偽ヨシュア』295: 7-8)

[I の用例]

i. wšdr ʔyzgdʔ lbyt rhwmyʔ
w-šdr ʔyzgdʔ l-byt rhwmyʔ
CONJ-送る.PF.3SGM 使者.PL へ-ローマ帝国
kd sbr ddḥlyn
kd sbr d-dḥlyn
CONJ 考える.ActPtc.SGM C-恐れる.ActPtc.PLM

---

[33] シリア語では動詞の 3 人称男性形において、主語と数が一致しない例がしばしば観察される。これは 3 人称男性の単数形と複数形が音声の上では同形であるためと考えられる。規則動詞の 3 人称男性形では、単数形と複数形は語末に表記される-w の有無で区別されるが、この-w は黙字である。
[34] npl ʕl- (lit. ～に対して落ちる) で「攻撃する」の意味。

wmšdryn	lh	**dhbʔ**
w-mšdrtn	l-h	**dhbʔ**
CONJ-送る.ActPtc.PLM	に-3SGM	金

「彼は彼らが恐れて彼に金を送ってくると考えて、ローマ帝国へ使者を送った」

(N の例、『偽ヨシュア』250: 20-21)

j.

wbnʔ	wḥdt		
w-bnʔ	w-ḥdt		
CONJ-建てる.PF.3SGM	CONJ-新しくする.PF.3SGM		
lklh	**br šwrʔ**	dkrk	**lmdyntʔ**
l-kl-h	**br šwrʔ**	d-krk	**l-mdyntʔ**
OM-すべて-3SGM	**外壁**	REL-囲う.PF.3SGM	**OM-町**

「彼は町を囲う外壁のすべてを新しく建て直した」

(M の例、『偽ヨシュア』308: 4)

k.

klh	gyr	**gzʔ**	**dmlkʔ**	**d**qdmwhy
kl-h	gyr	**gzʔ**	**d-mlkʔ**	**d-**qdm-why
すべて-3SGM	なぜなら	**宝**	**GEN-王**	**REL**-前-3SGM
spq**h**			hwʔ	
spq-**h**			hwʔ	
使い尽くす.PF.3SGM-**3SGM.OBJ**			AUX.3SGM	
bqrbʔ	qdmyʔ			
b-qrbʔ	qdmyʔ			
で-戦争.PL	以前の.PL			

「なぜなら彼以前の王の宝すべてを彼は先の緒戦で使い尽くしてしまっていたから」

(A の例、『偽ヨシュア』243: 21-22)

l.

wḥrbw**h**	**lmdyntʔ**
w-ḥrbw-**h**	**l-mdyntʔ**
CONJ-破壊する.PF.3PLM-**3SGF.OBJ**	**OM-町**

「彼らは町を破壊した」

(MA の例、『偽ヨシュア』280: 9)

(3-3)

wʔškḥ	šyrtʔ	dslqʔ
w-ʔškḥ	šyrtʔ	d-slqʔ
CONJ-見つける.PF.3SGM	隊商	REL-上る.ActPtc.SGF

lwth	wgmlʔ	dmsqyn
lwt-h	w-gmlʔ	d-msqyn
～のところへ-3SGM	CONJ-ラクダ.PL	REL-運ぶ.ActPtc.PLM
lh	**nnḥt**	
l-h	**nnḥt**	
に-3SGM	**<語義不明>**[35]	

「彼は彼のところへ上京する隊商と、彼に nnḥt を運んでいくラクダを見つけた」

(N の例、『偽ヨシュア』283: 9-10)

表 3-3 『偽ヨシュア』中の目的語名詞句と定性

用例数	N	M	A	MA	合計
PN	8	18	0	19	45
DF	157	105	4	72	338
Spec	23	12	0	1	36
NSpec	346	40	0	0	386
保留	22	7	1	3	33
合計	556	182	5	95	838

(3-4)

[PN の用例]

a.	wkd	ʔytwhy	zḥlʔ	ʔkl
	w-kd	ʔyt-why	zḥlʔ	ʔkl
	CONJ-CONJ	COP-3SGM	バッタ	食べる.PF.3SGM

[35] 読み自体についても意見が分かれている。例えば Chabot (1927) は nnḥt と読んだ上で yḥnt である可能性を注釈で提示しているが、Wright (1882) は yḥnt 説を取っている。また Trombley and Watt (2011) は yḥnt または nḥnt としている。さらに Martin (1876) は nḥt として次の文の動詞として解釈しているが、筆者が写本 (Vat. Sir. 162 f. 78 r.) を見る限りこの語は 4 字から構成されているうえ、この解釈では msqyn の目的語が不在になるため、これを支持する積極的理由は見当たらない。本稿では Chabot (1927) に従い、nnḥt として示す。

wgmr **ʕrb** **klh**
w-gmr **ʕrb** **kl-h**
CONJ-食べ尽くす.PF.3SGM **PN** **すべて-3SGF**
「そしてバッタが現れていたとき、それはアラブのすべてを食らい尽くした」

(N の例、『偽ヨシュア』264: 7-8)

b. wšbq **lʔwsyb** lmṭr dwkth
w-šbq **l-ʔwsyb** l-mṭr dwkt-h
CONJ-放つ.PF.3SGM **OM-PN** に-守る.INF 地位-3SGM
wlmdbrw mdyntʔ
w-l-mdbrw mdyntʔ
CONJ-に-統治する.INF 町
「そして彼はエウセビオスをして彼の地位を守り町を統治することを許した」

(M の例、『偽ヨシュア』266: 16-17)

c. rwrbnʔ dyn dprsyʔ
rwrbnʔ dyn d-prsyʔ
貴族.PL CONJ GEN-ペルシア人.PL
ʔtḥšbw hww bksyʔ
ʔtḥšbw hww b-ksyʔ
考える.PF.3PLM AUX.3PLM に-秘密
dnqṭlwn**yhy** **lqwd**
d-nqṭlwn-**yhy** **l-qwd**
C-殺す.IMPF.3PLM-**3SGM.OBJ** **OM-PN**
「ペルシアの貴族たちは密かに、カワードを殺そうと考えていた」

(MA の例、『偽ヨシュア』250: 29-251: 2)

[DF の用例]

d. wʔrpyw sgyʔʔ **ʔtrwthwn**
w-ʔrpyw sgyʔʔ **ʔtrwt-hwn**
CONJ-離れる.PF.3PLM 多く (のひと).PL **土地.PL-3PLM**
「そして沢山の人びとが彼らの土地を離れた」

(N の例、『偽ヨシュア』265: 4)

e. knš **lklh** **ḥylʔ**
knš **l-kl-h** **ḥylʔ**
集める.PF.3SGM **OM-すべて-3SGM** **軍**

dprsyʔ
d-prsyʔ
GEN-ペルシア人.PL
「彼はペルシアの全軍を召集した」

(M の例、『偽ヨシュア』274: 20)

f. **mšḥʔ** dyn **d**mtyhb hwʔ
mšḥʔ dyn **d-**mtyhb hwʔ
油 CONJ **REL-**与えられる.PF.3SGM AUX.3SGM
lbyt shdwtʔ wldyrtʔ
l-byt shdwtʔ w-l-dyrtʔ
に-礼拝堂.PL CONJ-に-修道院.PL
<中略>
šql**h** mnhwn hw hgmwnʔ
šql-**h** mn-hwn hw hgmwnʔ
取る.PF.3SGM-**3SGM.OBJ** から-3PLM かれ 行政官
「しかし礼拝堂や修道院に与えられた <中略> 油をこの行政官はそれらから取った」

(A の例、『偽ヨシュア』308: 11-14)

g. wnpl syp̓ʔ mn ʔydh
w-npl syp̓ʔ mn ʔyd-h
CONJ-落ちる.PF.3SGM 剣 から 手-3SGM
wpsq**h** **lʔdnh** **dʔlws**
w-psq-**h** **l-ʔdn-h** **d-ʔlws**
CONJ-斬る-**SGM.OBJ** **OM-耳-3SGM** **GEN-PN**
「剣が彼の手から落ちて、イッルスの耳を切り落とした」

(MA の例、『偽ヨシュア』245: 4-5)

[Spec の用例]

h. wbʔyrḥ ʔyr šdr ʕlwhy
w-b-ʔyrḥ ʔyr šdr ʕl-why
CONJ-に-月 イーヤール 送る.PF.3SGM 対して-3SGM
tltʔ **ryšy ḥylwtʔ** ʔrbyndʔ wpṭryq whwpṭ
tltʔ **ryšy ḥylwtʔ** ʔrbyndʔ w-pṭryq w-hwpṭ
三 **軍団長.PL** PN CONJ-PN CONJ-PN

w**mdbrnʔ**	**sgyʔʔ**
w-**mdbrnʔ**	**sgyʔʔ**
CONJ-将校	多くの.PL

「イーヤール月に、彼に対して三人の軍団長、アレオビンドス、パトリキウス、ヒュパティウスと多くの将校を送った」

(N の例、『偽ヨシュア』281: 14-15)

i.

lḥd	**mn**	**sṭrṭlṭs**	**d**šmh	ywḥnn
l-ḥd	**mn**	**sṭrṭlṭs**	**d**-šm-h	ywḥnn
OM-一	**から**	**将軍.PL**	**REL**-名前-3SGM	PN

šdr	ltmwn	ʕm	ḥylʔ	sgyʔʔ
šdr	l-tmwn	ʕm	ḥylʔ	sgyʔʔ
送る.PF.3SGM	へ-そこ	ともに	軍	多くの

「彼は将軍たちの一人でユーフナンという名前である者を多くの軍勢とともにそこへ送った」

(M の例、『偽ヨシュア』246: 14-15)

j.

lhyn	**lmlʔ**	dylh	
lhyn	**l-mlʔ**	dyl-h	
3PLF.OBJ	**OM-ことば.PL**	GEN-3SGM	
dʔygrrʔ	hy	dʔtt	ln
d-ʔygrrʔ	hy	d-ʔtt	l-n
GEN-手紙	この	REL-来る.PF.3SGF	に-1PL
sym		ʔnʔ	
sym		ʔnʔ	
引用する.ActPtc.SG		AUX.1SG	

「我々に来たこの手紙の言葉を私は引用する」

(MA の例、『偽ヨシュア』293: 25-26)

[NSpec の用例]

k.

mlkʔ	dyn	dprsyʔ	
mlkʔ	dyn	d-prsyʔ	
王.PL	CONJ	GEN-ペルシア人.PL	
mšdryn		hww	**ʔyzgdʔ**
mšdryn		hww	**ʔyzgdʔ**
送る.ActPtc.PLM		AUX.3PLM	**使者.PL**

「ペルシアの王たちは使者を送っていた」

(N の例、『偽ヨシュア』242: 20-21)

l. wnḥtyn wbzyn
w-nḥtyn w-bzyn
CONJ-下る.ActPtc.PLM CONJ-略奪する.ActPtc.PLM
wḥṭpyn **lqwryʔ** **d**ḥdryhwn
w-ḥṭpyn **l-qwryʔ** **d**-ḥdry-hwn
CONJ-略奪する.ActPtc.PLM **OM-村.PL** **REL**-あいだ-3PLM
w**ltgrʔ** w**ʔksnyʔ** w**lbny ʔtrʔ**
w-**l-tgrʔ** w-**ʔksnyʔ** w-**l-bny ʔtrʔ**
CONJ-**OM-商人.PL** CONJ-**異邦人.PL**[36] CONJ-**OM-現地人**
wslqyn
w-slqyn
CONJ-上る.ActPtc.PLM
「彼らは (山を) 下り、そのあいだの村々、商人たち、異邦人、現地の人々を略奪して、(山上に) 帰っていっていた」
(M の例、『偽ヨシュア』250: 10-11)

表 3-4 『偽ヨシュア』中の目的語名詞句と有生性・定性

用例数	N	M	A	MA	合計
God: DF	0	2	0	0	2
H: PN	1	16	0	12	29
H: DF	14	57	1	24	96
NHA: PN	0	0	0	0	0
H: Spec	4	5	0	0	9
NHA: DF	1	2	0	2	5
I: PN	7	2	0	7	16
H: NSpec	48	28	0	0	76
NHA: Spec	0	0	0	0	0
I: DF	142	44	3	46	235
NHA: NSpec	18	1	0	0	19
I: Spec	19	7	0	1	27
I: NSpec	279	11	0	0	290

[36] 「略奪する」の目的語となっている名詞の内、このʔksnyʔ「異邦人」だけは他と異なり標識を伴わない。この理由についてはよく分からないが、他の名詞句が標識を伴うことから、単に l-の 1 字を書き漏らしただけの可能性も考えられる。

用例数	N	M	A	MA	合計
合計	533	175	4	92	804

3.4. 議論

3.4.1. 4 通りの目的語標示と使用頻度

はじめに表 3-1 を取り上げて、4 通りの目的語標示がそれぞれどの程度使用されていたかを検討する。表 3-1 は本資料中から収集した N、M、A、MA の用例数を示したものである。これを見ると、これら 4 通りの標示の仕方が均等に用いられるものではないことは明らかである。すなわち、確認された用例の半数以上、66.4%は目的語標示を伴わないものであり、標識を用いる他の方法よりも使用される頻度が高い。また何らかの標識を伴っていた 33.7%の大部分は名詞句か名詞句と動詞の双方に標識を付加した M (21.7%) または MA (11.3%) の用例で、動詞にのみ標識を付加する A の方法は使用がわずか 0.6%とかなり限定されている。ここから、目的語を標示する 4 通りの方法はそれぞれが同程度の頻度で用いられるわけでなく、Brockelmann (1962) が述べているように標識を伴わない N が標準的な方法で、何らかの条件を満たしたときに標識が出現しうるものと考えられる。また主要部標示型の標識だけが現れる A の方法は極端に使用例が少なく、かなり特殊な方法であることが分かる。

以下この節では主要部標示型標識の有無、従属部標示型標識の有無の順に、これらの方法の使い分けがどのようになされているか検討する。

3.4.2. 標識の有無と有生性・定性

本項では 2 種類の標識それぞれについて、それが出現するかどうかと目的語名詞句の有生性・定性との関わりの有無および関わり方を検討する。この議論を始める前に前提として、収集できたデータには有生性・定性いずれにおいても偏りが見られたことを確認しておきたい。まず表 3-2 に示した有生性であるが、God が 2 例であったことはともかく、NHA が極端に少ないこと (24 例、2.9%)、I がかなりの数を占めること (595 例、70.9%) が目立つ。他方表 3-3 に示した定性であるが、これは DF と NSpec の用例が多く確認された一方、Spec と PN の用例は数が限られている。また 33 の用例で定性の判断に迷いがあるため、これを以降の議論から除外する。有生性・定性を組み合わせた場合、それぞれの組み合わせ同士での用例数の偏りは更に大きく、特に PN/Spec: NHA の場合には用例そのものが確認できなかった。そのため以降の議論では十分に用例数がある DF と NSpec、H と I の差に特に注目しながら、全体的な傾向を明らかにすることを目指す。

3.4.2.1. 従属部標示タイプ標識の有無と有生性・定性

はじめに従属部標示タイプ標識の出現/非出現について検討したい。表 3-5~7 はそれぞれ表 3-2~4 を従属部標示型の標識が現れなかったもの (N, A) と現れたもの (M、MA) とに整理し、有生性・定性またはその組み合わせごとに標識が出現した/しなかった割合を示したものである。なお、表を簡略化するため「保留」のものは除外している。

まず表 3-5 を検討する。表 3-5 は目的語名詞句の有生性ごとに従属部標示タイプ標識の出現率を示したものである。既に述べたように、『偽ヨシュア』からは人間を除く有生物 NHA が 24 例しか確認できなかったため、NHA の用例についてはここでは標識を伴わない用例の数が、伴う用例のそれを上回る、ということだけを述べて、パーセンテージの議論は行わない。また、神 God を目的語とする用例もわずか2例であり、いずれも名詞句に標識を伴う M の用例であったが、用例が極端に少ないためこの結果が「神が目的語となる場合は M とする」ことを示すのか、あるいは単なる偶然か、という点については明らかにできない。以上の理由で、ここでの議論ではある程度用例数が確認された H と I の場合に限定される。

H の場合、147 例 (67.4%) は従属部に標識を伴う用例であり、標識を伴わなかった 71 例 (32.6%) の 2 倍程度用例数が確認された。他方 I の場合には、名詞が標識を伴う例は 123 例 (20.7%) に過ぎず、470 例 (79.3%) は名詞が裸で現れる例であった。このように H の目的語名詞句と I の目的語名詞句の間で標識の出現率には大きな差があるように見える。この差がどの程度意味のあるものであるかを確かめるために、H と I の目的語名詞句に使用するデータを限定して χ^2 検定を行ったところ、有意差が認められた (χ^2 (1) = 156.46, $p < .05$)。ここから、有生性の高いものは標識を伴いやすく、低いものでは伴いにくい、と考えることができる。

表 3-5 従属部標示タイプ標識の有無と有生性 (『偽ヨシュア』)

	N+A	M+MA	合計
God	0	2	2
	0.0%	100.0%	100.0%
H	71	147	218
	32.6%	67.4%	100.0%
NHA	19	5	24
	79.2%	20.8%	100.0%
I	470	123	593
	79.3%	20.7%	100.0%

	N+A	M+MA	合計
合計	560	277	837
	66.9%	33.1%	100.0%

次に表 3-6 を検討する。表 3-6 では目的語名詞句の定性ごとに、標識が出現したものがどの程度あったかを示している。これを見ると、固有名詞 PN では 8 割が標識を伴っている一方で、不定不特定 NSpec の場合には 9 割近くが標識を伴わない用例となっていることが分かる。また定 DF の場合には標識を伴うものが若干伴わないものの数を上回るが、PN の場合ほど顕著な差ではなく、不定特定 Spec の用例は数がかなり少ないが、標識を伴わない用例が伴う用例の数を上回っている。いずれにしても、標識の出現率が定性に左右されないと考えた場合に期待される標識なし：あり ＝66.8%：33.2%のパーセンテージとの間には差が見られる。これについても χ^2 検定を行った結果有意差が確認された ($\chi^2(3) = 195.76$, $p < .05$)。標識を伴っていた用例の割合が高いものからこれらを配列すると、PN (82.2%) > DF (52.4%) > Spec (36.1%) > NSpec (10.4%) となる。この配列は定性の階層にそのまま一致する。このことから、目的語の定性がこの階層で上位にあるものほど標識を伴いやすい、ということが言える。

表 3-6 従属部標示タイプ標識の有無と定性（『偽ヨシュア』）

	N+A	M+MA	合計
PN	8	37	45
	17.8%	82.2%	100.0%
DF	161	177	338
	47.6%	52.4%	100.0%
Spec	23	13	36
	63.9%	36.1%	100.0%
NSpec	346	40	386
	89.6%	10.4%	100.0%
合計	538	267	805
	66.8%	33.2%	100.0%

ところで、以上の議論は有生性・定性のいずれか一方に焦点を当てて進めてきた。ここで更に議論を深めるため、有生性・定性の組み合わせごとに標識の出現/非出現を検討したい。

はじめに、第 2 章で図 2-1 として示した有生性・定性の二次元階層を再度示しておく (図 3-1)。ただし、シリア語においては人称代名詞が目的語となる場合、

独立した形ではなく動詞に接尾される「人称代名詞接尾形」という形を取り、固有名詞以下の名詞とは異なる振る舞いをするため、以下の図 3-1 では省略した。また元の図に無い God (: Definite) については God > H……という本論文での便宜的な配置に従って付け加えている。有生性において表 3-4 及び 3-8 はこの二次元階層に従って有生性・定性の組み合わせを配列したものである。

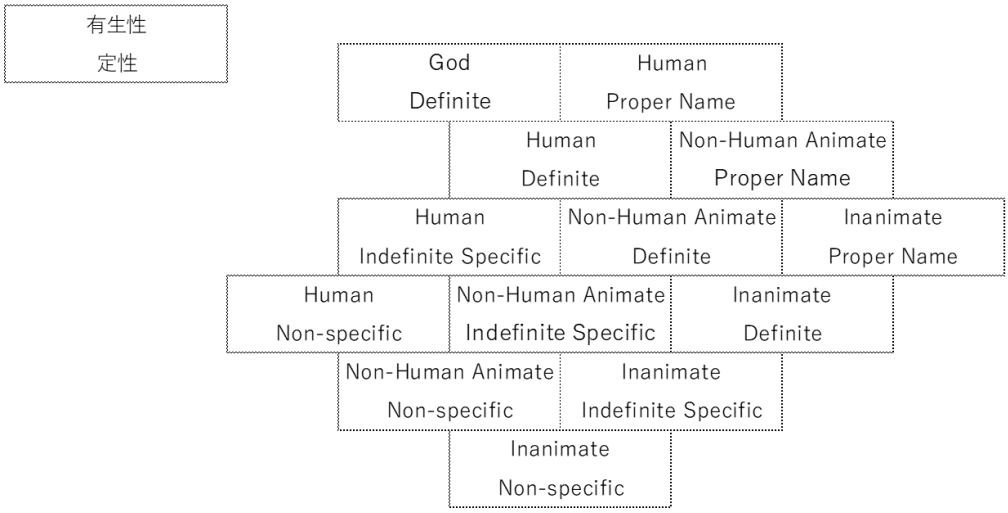

図 3-1 有生性・定性の二次元階層 (図 2-1 より人称代名詞を省略、神を追加)

先に述べたデータの偏りのため、ここでは H: DF、I: DF、H: NSpec、I: NSpec の 4 つの条件に着目して議論を進めたい。これらの 4 条件で名詞に標識が付加された用例が占める割合をそれぞれ示すと、84.4%、38.3%、36.8%、3.8%となる。ここからは次のことが指摘できる。すなわち、定性が同じ DF、NSpec の場合を比較すると、いずれでも H のときにより標識が現れやすいこと、また有生性についても同様に比較すると、今度はいずれにおいても DF のときに標識が現れた用例の割合が増えている、ということである。この差が統計的に有意なものであるかどうかを確認するためにこれら 4 条件のデータの範囲で χ^2 検定を行ったところ有意差が確認された ($\chi^2(3) = 238.81, p < .05$)。従って標識の出現/非出現には有生性と定性の双方のパラメータが関与しており、目的語となる名詞句が図 3-1 のような有生性・定性の二次元階層でより上位にあるものであれば、標識もより出現しやすくなる、ということが示唆される。この説は、定性が PN となる条件をここに追加することで補強しうる。H: PN では、標識が出現した用例は H: DF の場合より高い 96.6%を占め、I: PN でも I: DF の 39.6%より高い 56.3%を、標識を伴う目的語名詞句の用例が占めていた。特に H: PN では、(3-5) に示す一例を除いた全用例が標識を伴うものであった。同じく用例数が少ない H、I の Spec の用例も加えた 8 条件で χ^2 検定を再度行っても同様に有意差が確認された (χ^2 (7)

= 287.18, p < .05)。なお H: PN で従属部標示型の標識が現れなかった一例 (3-5) は、その前に同格の目的語名詞「人質・捕虜を」を伴っており、これが N で現れていることが、qwd breh「彼の子カワード」にも標識が現れない理由である可能性が考えられる。

(3-5)

ḥlp	hlyn	dyn	ʕsrʔ	ṭʕnyn	ʔḥrnyn
ḥlp	hlyn	dyn	ʕsrʔ	ṭʕnyn	ʔḥrnyn
かわりに	これら	CONJ	十	荷物	他の
sm	lwthwn			mškn ʔ	
sm	lwt-hwn			mškn ʔ	
置く.PF.3SGM	ところに-3PLM.GEN			人質	
whmyrʔ	**qwd**	**brh**			
w-hmyrʔ	**qwd**	**br-h**			
CONJ-捕虜	**PN**	**息子-3SGM.GEN**			

「この残りの (lit. 他の) 荷物 10 駄のかわりに彼は彼らのもとに人質として (lit. 人質・捕虜を) 彼の息子カワードを置いた」

(『偽ヨシュア』243: 22-23)

また NHA の名詞では、用例数自体に限りがあるため強固な根拠とは言えないまでも、DF では 5 例中 4 例が標識を伴う用例であった一方で、NSpec では 19 例中わずか 1 例しか標識を伴った用例が確認されなかったことから、ここでもこれまでの議論を当てはめることができる。他方で God: DF を除いたいずれの場合にも「絶対に標識が出現する/しない」という場合は確認されなかった。これを言い換えると、基本的に標識の使用は任意であり、有生性・定性によって使用がより好まれる場合と不使用がより好まれる場合とがある、ということである。

表 3-7 従属部標示タイプ標識の有無と有生性・定性 (『偽ヨシュア』)

	N+A	M+MA	合計
God: DF	0	2	2
	0.0%	100.0%	100.0%
H: PN	1	28	29
	3.4%	96.6%	100.0%
H: DF	15	81	96
	15.6%	84.4%	100.0%

	N+A	M+MA	合計
NHA: PN	0	0	0
	-	-	-
H: Spec	4	5	9
	44.4%	55.6%	100.0%
NHA: DF	1	4	5
	20.0%	80.0%	100.0%
I: PN	7	9	16
	43.8%	56.3%	100.0%
H: NSpec	48	28	76
	63.2%	36.8%	100.0%
NHA: Spec	0	0	0
	-	-	-
I: DF	145	90	235
	61.7%	38.3%	100.0%
NHA: NSpec	18	1	19
	94.7%	5.3%	100.0%
I: Spec	19	8	27
	70.4%	29.6%	100.0%
I: NSpec	279	11	290
	96.2%	3.8%	100.0%
合計	537	267	804
	66.8%	33.2%	100.0%

ここまでの議論を整理すると、図 3-2 のようになる。この図では標識が出現した割合を色の濃淡で示している。この図に示した通り、従属部標示タイプの目的語標識は有生性・定性の階層で上位にあるものほど標識を伴いやすく、下位にいくにつれて標識が出現した用例が占める割合は減少していく。なお*を付記した条件はそもそも用例が確認できなかった条件である。

また H: DF の用例について付言しておくと、標識が現れなかった 14 例のうち 6 例は再帰代名詞的に用いられる npš「魂」+人称代名詞接尾形 (= 属格として機能) の用例であった。他方標識が現れた用例の中に npš+人称代名詞接尾形の用例は確認されなかった。その理由としては、この種の名詞句は主語に立つことがあまりなく、目的語として現れる場合がほとんどのため、あえて標識を

付加して目的語であることを示す必要が無いということがあると考えられる。

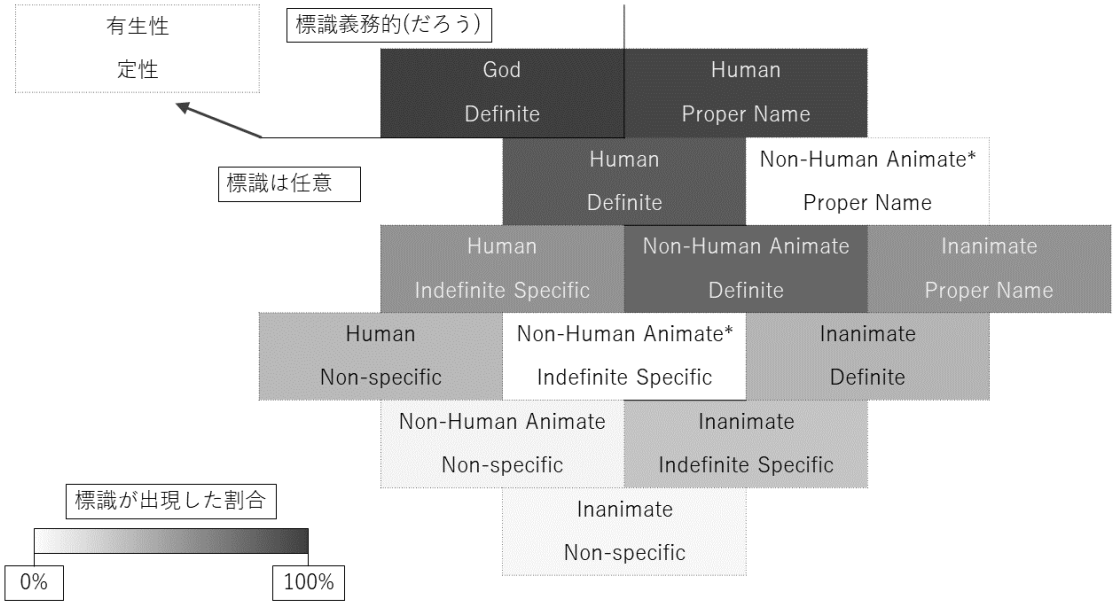

図 3-2 『偽ヨシュア』における目的語標識の出現/非出現

以下 (3-6〜9) に、H: DF、I: DF、H: NSpec、I: NSpec の 4 条件ごとに、標識が現れた用例と現れなかった用例をいくつか示しておく。また、例文の後ろにはそれぞれ多数派のものに [〇] を付記して、どちらの用例がより多く観察された標示パターンであったかを示す。

(3-6) a. H: DF 標識なし

wqbl	pyshwn
w-qbl	pys-hwn
CONJ-受け入れる.PF.3SGM	説得-3PLM.GEN
w**hmyrʔ**	šdr
w-**hmyrʔ**	šdr
CONJ-**捕虜.PL**	送る.PF.3SGM

「彼は彼らの説得を受け入れ、<u>捕虜を</u>送り返した」

(『偽ヨシュア』314: 10)

b. H:DF 標識あり [○]

ʔpyswhy	qlryqws	**lpṭryrkʔ**
ʔpys-why	qlryqws	**l-pṭryrkʔ**
説得する.PF.3PLM-3SGM.OBJ	聖職者.PL	**OM-総主教**

「聖職者たちは総主教を説得した」

(『偽ヨシュア』304: 26)

(3-7) a. I: DF 標識なし [○]

šmṭ	**syph**
šmṭ	**syp-h**
抜刀する.PF.3SGM	**剣-3SGM.GEN**

「彼は剣を抜いた」

(『偽ヨシュア』245: 02)

b. I: DF 標識あり

wpsqh	**lʔdnh**	**dʔlws**
w-psq-h	**l-ʔdn-h**	**d-ʔlws**
CONJ-切り落とす.PF.3SGM-3SGM.OBJ	**OM-耳-3SGM.GEN**	**GEN-PN**

「そしてそれがイッルスの耳を切り落とした」

(『偽ヨシュア』245: 05)

(3-8) a. H: NSpec 標識なし [○]

šdr	gyr	**ʔyzgdʔ**	lwt	zynwn
šdr	gyr	**ʔyzgdʔ**	lwt	zynwn
送る.PF.3SGM	CONJ	**使者**	ところ	PN
dnšdr		lh		dhbʔ
d-nšdr		l-h		dhbʔ
C-送る.IMPF.3SGM		に-3SGM		金

「彼はゼノンのところに、彼 (ゼノン) が彼に金を送るように、使者を送った」

(『偽ヨシュア』248: 05-06)

b. H: NSpec 標識あり

wšdr	ʕlyhwn	qwd
w-šdr	ʕly-hwn	qwd
CONJ-送る.PF.3SGM	対して-3PLM	PN

lmrzbnʔ **ḥd** ʕm ḥylʔ
l-mrzbnʔ **ḥd** ʕm ḥylʔ
OM-マルズバーン 一 ともに 軍
「そして彼はカワードに対してマルズバーンを一人、軍隊とともに送った」

(『偽ヨシュア』249: 19)

(3-9) a. I: NSpec 標識なし [○]

šdr	gyr	ʔyzgdʔ	lwt	zynwn
šdr	gyr	ʔyzgdʔ	lwt	zynwn
送る.PF.3SGM	CONJ	使者	ところ	PN
dnšdr		lh		**dhbʔ**
d-nšdr		l-h		**dhbʔ**
C-送る.IMPF.3SGM		に-3SGM		**金**

「彼はゼノンのところに、彼 (ゼノン) が彼に金を送るように、使者を送った」

(『偽ヨシュア』248: 05-06)

b. I: NSpec 標識あり

ʔw	ʔn hw dmtbʕʔ	lhwn	ḥylʔ
ʔw	ʔn hw d-mtbʕʔ	l-hwn	ḥylʔ
CONJ	もし-必要とされる.ActPtc.SGM	に-3PLM	軍隊

lʕwdrnʔ	nšdrwn	lhwn
l-ʕwdrnʔ	nšdrwn	l-hwn
OM-支援	送る.IMPF.3PLM	に-3PLM

「あるいは (むしろ) もし彼らに軍隊が必要となったときに彼らが支援を送ってくるように」

(『偽ヨシュア』246: 12-13)

3.4.2.2. 主要部標示タイプ標識の有無と有生性・定性

次に主要部標示タイプの標識が出現する条件を検討する。先ほどと同様に、確認された用例を主要部標示タイプの標識が現れなかったもの (N+M) と現れたもの (A+MA) とに分けて整理したものを表 3-8～10 に示す。

表 3-8 は有生性によって用例を分類したものである。これを見ると、若干 H の場合に標識の現れる割合が高くなっているように見えるが、従属部標示型の標識が顕著な差を見せていたことと比較すると、その差は小さいと言える。加えて目的語が神の場合には用例がわずか 2 例で十分に論じることはできないが、こ

の範囲で主要部標示型の標識が出現した例は見られない。表 3-8 に関して χ^2 検定を行ったところ、有意傾向が見られたが、有意差は認められなかった ($\chi^2(3) = 7.36$, $p = .06$)。従って、主要部標示型標識の出現条件として有生性が関与しているということは考えにくい。

表 3-8 主要部標示タイプ標識の有無と有生性 (『偽ヨシュア』)

	N+M	A+MA	合計
God	2	0	2
	100.0%	0.0%	100.0%
H	181	37	218
	83.0%	17.0%	100.0%
NHA	22	2	24
	91.7%	8.3%	100.0%
I	532	61	593
	89.7%	10.3%	100.0%
合計	737	100	837
	88.1%	11.9%	100.0%

それでは定性はどうだろうか。表 3-9 は定性ごとに主要部標示タイプの標識がどの程度出現したかを示したものである。ここから明らかなこととしては、目的語が不定不特定のときにはこの標識は現れない、ということが挙げられる。また、不定特定の場合にも、(3-10) に示す一例を除いて、この標識の出現は確認されなかった。

この (3-10) の例はかなり例外的なものであると考えられる。第 1 章で述べたように、シリア語の能動分詞はコピュラ的に用いられる人称代名詞独立形と組み合わされて、現在時制の本動詞として完了形や未完了形といった定形動詞と同様に用いることができるのだが、元来は非定形動詞であるためか、定形動詞のように人称代名詞接尾形を付加することができない。そのため能動分詞が人称代名詞を目的語にとるには、目的語標示としても機能している l-によって目的語人称代名詞を導く必要がある (cf. Muraoka 2013: 68)。そのような理由から本研究では (3-11a) に示すような「[能動分詞 l+目的語名詞に性・数で一致する人称代名詞] [l+目的語名詞]」の構造を (3-11b) に見える「[定形動詞+目的語名詞に性・数で一致する人称代名詞接尾形] [l+目的語名詞]」の構造に対応する形と考え、MA の用例として統一的に扱っている。しかし、(3-10) の用例は他の能動分詞を本動詞とする MA の用例とは異なって、目的語名詞句が動詞に対して前置されているが、これと同時に定形動詞で人称代名詞接尾形に相当する要素「l+人称代

名詞」も先頭に出ている。このような語順を取っているのは『偽ヨシュア』中この (3-10) だけであり、また定形動詞を本動詞とする場合には、人称代名詞接尾形が動詞と不可分である以上、このような語順は取り得ない。従って、この (3-10) の用例を (3-11a) のような他の能動分詞を本動詞とする MA の用例と同列に捉えるのは難しい。

(3-10) **lhyn** **lmlʔ** dylh dʔygrtʔ hy
lhyn **l-mlʔ** dyl-h d-ʔygrtʔ hy
3PLF.OBJ **OM-言葉.PL** GEN-3SGF GEN-手紙 この
dʔtt ln sym ʔnʔ
d-ʔtt l-n sym ʔnʔ
REL-来る.PF.3SGF に-1PL 引用する.AtcPtc.SGM 1SG
「我々のところに届いたこの手紙にあった言葉を私は引用する」
(『偽ヨシュア』293: 25-26)

(3-11)

a. wmknšyn **lhyn**
w-mknšyn **lhyn**
CONJ-集める.ActPtc.PLM **3PLF.OBJ**
lšldʔ **hlyn**
l-šldʔ **hlyn**
OM-死体.PL **これらの**
「そして彼らはこれらの死体を集めた」
(『偽ヨシュア』268: 17)

b. wḥrbw**h** **lmdyntʔ**
w-ḥrbw-**h** **l-mdyntʔ**
CONJ-破壊する.PF.3PLM-**3SGF.OBJ** **OM-町**
「彼らは町を破壊した」
(『偽ヨシュア』280: 9)

上述の理由から (3-10) を例外として省くと、この主要部標示型の目的語標識はすべて目的語が定である場合に出現する、ということができる。ここで定性を「定」(PN+DF) と「不定」(Spec+NSpec) に整理して χ^2 検定を行ったところ、有意差が確認された (χ^2 (1) = 118.42, p < .05)。従って、この標識の出現には目的語の名詞が定であるということが重要であることが分かる。他方で、目的語が定性の最も高い PN であっても、この標識の出現率が 50%に満たないことから、目的

語の定性がこの標識の出現にとって決定的な要素となる、と言うことも難しいように思われる。標識の出現を左右する要素が他に存在し、この要素を持つ場合には目的語名詞句は固有名詞または定の名詞句のいずれかとなる、ということである可能性も十分に考えられる数値であろう。

表 3-9 主要部標示タイプ標識の有無と定性（『偽ヨシュア』）

	N+M	A+MA	合計
PN	26	19	45
	57.8%	42.2%	100.0%
DF	262	76	338
	77.5%	22.5%	100.0%
Spec	35	1	36
	97.2%	2.8%	100.0%
NSpec	386	0	386
	100.0%	0.0%	100.0%
合計	709	96	805
	88.1%	11.9%	100.0%

ところで、このタイプの標識の出現について Khan (1984) は人間を指す名詞、無生物でテキスト的に強調された[37]名詞 (textually prominent) に対して現れるとしていた (Khan 1984: 473)。この「テキスト的に強調されている」例として彼は直前の文脈に言及されたものを挙げているが、そのような場合にはその名詞は定であると考えられ、彼がこの「定である」ことを「テキスト的に強調されている」と表現していると考えれば、本研究の結果は彼の主張に一致する、ということができる。しかし彼はこの論文内で別に「定 definite/不定 indefinite」という用語を用いており (Khan 1984: 470)、もし彼がそのように考えていたとすると、「テキスト的に強調されている」という表現を使った理由が分からなくなる。従って彼の言う「強調」は定/不定とは別のことを表していると考えるほうが自然である。

これについて Coghill (2014) は「主題性によって条件付けられたものとしても理解しうる (“...it could equally be understood as conditioned by topicality”, Coghill 2014: 358)」としている。しかしこの「主題性 (topicality)」について、これを Coghill (2014) が現代北東アラム語について論じている箇所のように「主題[38]であるかど

[37] あるいは「卓立する」。

[38] ここでいう主題とは、その文によって表される命題がそれについて語るところのも

うか」という理解で捉えると、この説明には疑問が生じる。確かに (3-12) に示すような例では目的語は主題であると考えられる[39]。(3-12a) はそれ以前に言及されている復興のためにエデッサの人々や教会に与えられた金銭と対比的に、教会に与えられた油を行政官が接収したことについて述べた文である。この文は目的語である「油」が、それまでに言及されている与えられた金銭と対比されて、文の主題となっていて、そのために文頭に出ている、というふうに解釈しうる。また (3-12b) はそれ以前に語られていたゼウグマ (Zeugma) の地で起きた奇跡について、その中心である卵がその後どうなったのかを述べた一文である。この文は、このセクションで代名詞によるものも含めて 5 回言及されるこの卵についてさらに説明を追加する主題-題述 (topic-comment) 型の文となっている。他方で (3-13) に示すような例では、この標識と一致する目的語名詞句が主題であるとは考えにくい。(3-13a) は 499 年に起きた地震について述べたセクション 34 の中で、ニコポリスの町[40]の被害について語っている箇所からの例である。ここで目的語となっている ʔpysqwpʔ「司教」は確かにそれ以前にも言及されているが、その箇所とここまでの間に、この被害について語っている人物が地震後の夜を町の外の洞窟で過ごしていたことについて述べるくだりが挿入されている。そして彼らがニコポリスの町に戻ったところで見たものが、崩れた建物に下敷きにされる人々や家畜、そしてそこから聞こえてくるうめき声であった。この例以前で最後に「司教」に言及した箇所との間には 22 行[41]の隔たりがある。また「司教」を含む複数の人物を指す代名詞が現れた箇所までで計測しても、そこまでの隔たりは 19 行と、かなり大きい。このことから、(3-13a) はこの「司教」について述べるものというよりは、その次の文から「司教」について述べるために、談話にこれを導入する文と考えるのが妥当であろう。そうであれば (3-13a) の ʔpysqwpʔ がこの文の主題である、と言うのは難しい。また (3-13b) は地域一帯に蔓延した疫病について述べた箇所からの例である。この例も、ここで述べられているのは体中に潰瘍ができるというその流行病について、あるいはこの流行病

の (cf. Lambrecht 1994: 118) のことである。例えば (What did the children do next?) “[The children]TOP went to SCHOOL.”という例 (Lambrecht 1994: 121) における the children がそれである。

[39] ここで示す例文には前 (後) の文脈を Trombley & Watt (2011) の英訳から付記する。

[40] アルメニア属州のニコポリスと考えられる (Trombley & Watt 2011: 33)。その所在地は現在ではトルコ領内となっている。

[41] この「行」は、Chabot (1927) で付された「.」によって区切られる単位について便宜的に用いたものである。しかし関係節がこの「.」によって先行詞から離されている例も見られることから、この記号が示すのは決して文の区切りではない。ここではこの記号がどういう区切りを示すのか、ということは問題にせず、ある程度の大きさの節であることのみを認め、これを便宜的に「行」と称する。

を神罰として与えた神についてであり、彼らの体について情報を提供するという文ではない。むしろこの神罰について、「潰瘍が我々の体全体を満たした」ことを報告する event-repotring な文であると考えられる。

(3-12)

a. ...Thus Edessa had a little peace, ...Governor Eulogius was diligent in rebuilding it, [and the emperor gave] him two hundred pounds for the expenses of reconstruction. .....The emperor also gave twenty pounds to the bishop for expenses and the renewal of the wall, while Urbicius the eunuch (gave him) ten pounds to build a *martyrion* to the blessed Mary.

mšḥ̮	dyn	**d**mtyhb	hwʔ
mšḥ̮	dyn	**d**-mtyhb	hwʔ
油	CONJ	**REL**-与えられる.PF.3SGM	AUX.3SGM

lbyt	shdwtʔ	wldyrtʔ
l-byt	shdwtʔ	w-l-dyrtʔ
に-礼拝堂.PL		CONJ-に-修道院.PL

<中略>

šql**h**	mnhwn	hw	hgmwnʔ
šql-**h**	mn-hwn	hw	hgmwnʔ
取る.PF.3SGM-**3SGM.OBJ**	から-3PLM	かれ	行政官

「しかし礼拝堂や修道院に与えられた <中略> 油についてはこれをこの行政官がそれらから取った」

(『偽ヨシュア』308: 11-14)

and gave orders that it should be used for illumination in the city's colonnades.

(Trombley and Watt 2011: 105-107)

b. ' Listen now to a miracle <...> On the nineteenth of March, a Friday, the day when our Saviour was killed, in the village of 'Agar, which is in the *chora* of Zeugma, a goose laid an egg, and on it were inscribed elegant and readable Greek characters. <...> Let anyone who hears (of this) be assured (of its truth) without doubt.' These are the words of the letter from the Zeugmatites.

lh dyn TOP[**lbyʕtʔ]** FOC[yhbw**h**
l-h dyn **l-byʕtʔ** yhbw-**h**
ʔ[42]-3SGF CONJ **OM-卵** 与える.PF.3PLM-**3SGF.OBJ**
ʔylyn dʔtyldt bqrythwn lʔrbyndʔ]
ʔylyn d-ʔtyldt b-qryt-hwn l-ʔrbyndʔ
かれら REL-生まれる.PF.3SGF で-村-3PLM.GEN に-PN
「その卵はそれが生まれた村の人々がアレオビンドスに献上した」
(『偽ヨシュア』294: 27-295: 1, Trombley and Watt 2011: 86-87)

(3-13)

a. We got up, went to the city, and discovored all its buildings demolished and the people, domestic animals, oxen, and camels buried in it. The sound of their groaning emerged from deep inside the earth.

wFOC[ʔylyn dʔtknšw ltmn
w-ʔylyn d-ʔtknšw l-tmn
CONJ-かれら REL-集まる.PF.3PLM に-そこ
ʔpqw**hy** **lʔpysqwpʔ**
ʔpqw-**hy** **l-ʔpysqwpʔ**
出す.PF.3PLM-**3SGM.OBJ** **OM-司教**
mn tḥyt qysʔ hlyn
mn tḥyt qysʔ hlyn
から 下 梁.PL これら
dʕdtʔ dmstr hwʔ bhwn]
d-ʕdtʔ d-mstr hwʔ b-hwn
GEN-教会 REL-守る.PassPct.SGM AUX.3SGM で-3PLM
「そこに集まった人たちは司教を彼が守られていた教会の梁の下から救い出した」
(『偽ヨシュア』261: 3-6)

and he sought bread and wine to celebrate the mysteries.

(Trombley and Watt 2011: 33-34)

---

[42] 主題標示と考えられるが、シリア語にしばしば見られる「[前置詞+人称代名詞 $_i$] [前置詞+名詞 $_i$]」という構造（人称代名詞はその後ろに現れる名詞を指す、いわゆる prolepsis）を鑑みるに、その後ろの lbyʕtʔの l-と同じ目的語標識である可能性も否定しきれない。ただし後者の場合にはさらに動詞にも目的語名詞と一致する主要部標示型標識が現れており、明らかに標識過多である。

b. Our whole country was encompassed with health at this time, but the diseases and sicknesses of our souls were numerous. Since God wills that sinners should repent of their sins and be saved,

ʔyk	mḥzytʔ	FOC[ʕbdh	
ʔyk	mḥzytʔ	ʕbd-h	
のように	鏡	作る.PF.3SGM-3SGM.OBJ	
lh	lgwšmn]		wFOC[šwḥnʔ
l-h	l-gwšm-n		w-šwḥnʔ
?-3SGM	OM-体-1PL.GEN		CONJ-潰瘍.PL
mlyh			
mly-h			
満たす.PF.3SGM-3SGM.OBJ			
lklh		**pgrn]**	
l-kl-h		**pgr-n**	
OM-すべて-3SGM.GEN		**体-1PL.GEN**	

「彼 (神) は我々の体を鏡のようになし、潰瘍が<u>我々の体全体を</u>満たした」

(『偽ヨシュア』253: 6-7)

so that by our outside we might see what our inside was like, and by the marks on our bodies we might learn how foul were the marks on our soul.

(Trombley and Watt 2011: 23)

このように、主要部標示型の標識の出現を主題性によって説明するという試みはあまりうまく行っているとは言えない。確かに (3-12) の例はいずれも目的語名詞がその文の主語になっていると言えそうである。またこれらの例では目的語名詞が前置されており、このこともこれらが文の主題であることを示唆している。しかし (3-13) の例ではそのようなことは見られない。(3-13a) はそれ以降の節で主題となる司教を文脈に導入する文であり、(3-13b) は生じた事態を読み手に伝える event-report の文である。これはすなわち、いずれにおいても目的語名詞は主題 (topic) の範囲ではなく、むしろ焦点 (focus) の範囲に含まれていると考えられる、ということである。このことから、少なくとも Lambrecht (1994) 的な「主題かどうか」という捉え方で見た「主題性」ではこの標識の出現は説明

できないのではないか、と筆者は主張する[43]。

以上をまとめると、次のようになる。主要部標示タイプの標識の出現を左右するものは有生性ではなく、また定性も、標識の出現は目的語が定である場合に限定されているものの、その場合にも標識を伴う用例の数は半分に満たず、他の要素が出現/非出現を決定し、その要素を持つ場合には目的語名詞が定になる、ということである可能性が否定しきれない。他方でその「他の要素」が何であるかについても問題があり、シリア語における主要部標示タイプの標識の出現/非出現 = Differential Object Agreement については未解決のままである。

以下 PN、DF それぞれの場合で主要部標示型の目的語標識が現れたり現れなかったりする様子を (3-14～15) に示しておく。

(3-14) 目的語が PN の場合

a. 主要部標示型標識なし

šdr	**lqlywb**	**ḥlbyʔ**	lwt	pṭryq	whpyṭ
šdr	**l-qlywb**	**ḥlbyʔ**	lwt	pṭryq	whpyṭ
送る.PF.3SGM	**OM-PN**	**ハラブの**	ところへ	PN	PN

「彼はパトリキウスとヒュパティウスのところへハラブ[44]のカリオピウスを送った」

(『偽ヨシュア』282: 8-9)

b. 主要部標示型標識あり

rwrbnʔ	dyn	dprsyʔ	
rwrbnʔ	dyn	d-prsyʔ	
貴族.PL	CONJ	GEN-ペルシア人.PL	
ʔtḥšbw		hww	bksyʔ
ʔtḥšbw		hww	bksyʔ
考える.PF.3PLM		AUX.3PLM	密かに
dnqṭlwn**yhy**			**lqwd**
d-nqṭlwn-**yhy**			**l-qwd**
C-殺す.IMPF.3PLM-**3SGM.OBJ**			**OM-PN**

「ペルシアの貴族たちはカワードを殺すことを密かに考えていた」

(『偽ヨシュア』250: 29-251: 2)

---

[43] このことは Shain (2009) がグアラニー語について行ったような、段階的なものとしての主題性による説明の可能性を否定するものではない。

[44] 日本ではアレッポ (Aleppo) として知られる。

(3-15) 目的語が DF の場合

a. 主要部標示型標識なし

whw	gmr	ṣbynh
w-hw	gmr	ṣbyn-h
CONJ-3SGM	完成する.PF.3SGM	望み-3SGM.GEN

wqṭl	**lrwrbnʔ**
w-qṭl	**l-rwrbnʔ**
CONJ-殺す.PF.3SGM	**OM-貴族.PL**

「彼は望んだように貴族たちを殺害した」

(『偽ヨシュア』251: 18)

b. 主要部標示型標識あり

ʔpys**why**	qlryqws	**lpṭryrkʔ**
ʔpys-**why**	qlryqws	**l-pṭryrkʔ**
説得する.PF.3PLM-**3SGM.OBJ**	聖職者.PL	**OM-総主教**

「聖職者たちは総主教を説得した」

(『偽ヨシュア』304: 26)

3.4.3. 2 つの標識の出現条件

ここまで 2 種類の目的語標識がそれぞれどのような場合に出現するかについて検討した。その結果、従属部標示型の標識が出現する条件については有生性・定性の二次元階層によってある程度説明することが可能である、ということが指摘できた。すなわち、目的語となる名詞句が有生性・定性の二次元階層において上位にある場合には標識の使用が好まれ、下位になるにつれて使用されないことの方が多くなる。ただし God: DF を除くすべての場合でこの標識の出現には揺れが見られたことから、標識の使用自体はいずれにおいても任意であることも指摘できる。

他方主要部標示型の標識の出現は、従属部標示型標識とは異なる原理に基づいていることが明らかである。すなわち名詞句の有生性については主要部標示型標識の出現/非出現には関与せず、従って有生性・定性の二次元階層を用いて説明する理由は無い。また定性についても、不定の場合にはこの標識が出現しないという事実があることから無関係であるということはできないが、他方で標識が出現しうる定の場合においても、PN で 42.2%、DF では 22.5%と標識を用いた用例が多数派となることは無く、これが決定的な要素である、と判断することは難しい。

以上のことから、2 種類の目的語標識がそれぞれ現れたり現れなかったりする現象は 1 つの現象として捉えるのではなく、従属部標示型の目的語標識が現れ

たり現れなかったりする現象 (狭義の DOM) と主要部標示型の目的語標識が現れたり現れなかったりする現象 (DOA または DOI) という 2 つの異なる現象として考えるほうが適切であると考えられる。以降本研究ではこの立場に立って考察を進めていく。

このような理由から、続く第 4 章と第 5 章では従属部標示型の目的語標識の出現/非出現 ＝ 狭義の DOM に的を絞って議論を行う。

3.5. 本章のまとめ

本章ではエデッサの町あるいはその周辺の地域で記されたと思われるシリア語西方言の資料『偽ヨシュアの年代記』から収集した目的語名詞句のデータに基づいて、シリア語 DOM に関して仮説を提案した。これを整理すると以下のようになる。

目的語を標示する標識のうち、目的語となる名詞側に付加される従属部標示タイプの標識の出現/非出現については、目的語名詞句が有生性・定性の二次元的階層において上位にあるほど標識を伴いやすく、下位になるに従ってこれを伴いにくくなること、標識の出現が義務的になる場合が (2 例しか確認されなかった God: DF を除いて) 確認されなかったこと、標識が出現できない条件も観察されなかったことの 3 点が指摘できた。これを図に整理すると図 3-2 のようになる。

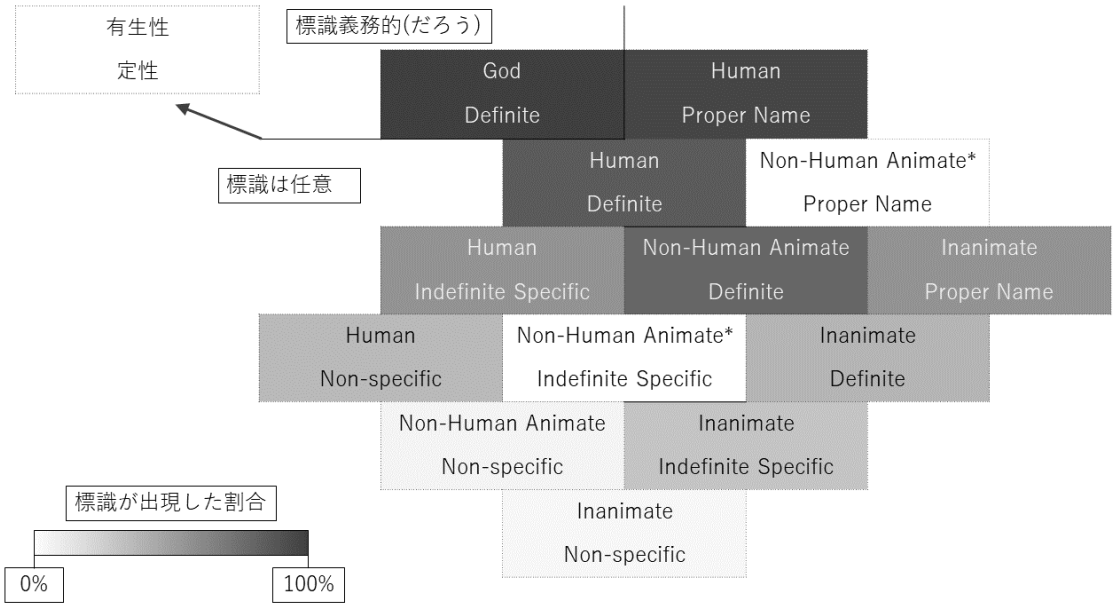

図 3-2 (再掲) 『偽ヨシュア』における目的語標識の出現/非出現

他方動詞に付加される主要部標示型の標識については、これとは異なる条件で出現が左右されていることが分かった。すなわち従属部標示型の標識とは異なり目的語の有生性はこの標識の出現に関与しない。また標識が現れる用例は目的語が PN ないし DF の場合に限られているが、いずれの場合においてもそのような用例は 50%に満たず、多数派となることはない。従って、目的語の有生性・定性からは主要部標示型の標識が出現する条件を十分に説明することはできない。しかしながらここでの議論では「主要部標示型標識は目的語が定の場合に使用が限られる」以上のことを明らかにすることはできず、出現/非出現を説明する仮説をここで提案することは叶わなかった。今後の課題である。

以上が本章で提案するシリア語 DOM を説明する仮説である。続く 2 つの章ではこの仮説を、第 4 章では西方言の他の資料で、第 5 章では東方言の資料で、それぞれ検証する。

第 4 章 仮説の検証①：西方言の DOM

4.1. 本章の目的

本章と続く第 5 章では、第 3 章で提案した仮説がシリア語の他の資料にも当てはまる議論であるかどうか検証することを目的とする。本章では仮説検証の第一歩として、西方言で書かれたと考えられる他の資料の DOM にこれが当てはまるかどうかを検証する。

4.2. 資料

本章で用いる資料は『柱頭行者シメオン伝』『東方諸聖人伝』の 2 点である。以下にそれぞれの概要を述べる。

『柱頭行者シメオン伝 (The Life of St. Simeon Stylites)』(以下『シメオン』) は 4 世紀の終わりに北シリアで生まれた聖人、聖シメオンの生涯を記した聖人伝 (hagiography) である。彼はシリアのキリスト教社会において、俗世を離れて柱の上で修行をする柱頭行者 (stylites) の最初の一人として認識されている (Lent 1915: 103)。

テキストは Bedjan の Acta Martyrum et Sanctorum, Vol. IV (Bedjan 1894: 507-644) に収録されている他、Assemani の Acta Sanctorum Martyrum, Vol. II (Assemani 1748: 273-394) としても出版されている。元の写本はいくつかあり、Assemani はヴァチカン所蔵の写本に基づいたものを出版しているが、Bedjan は大英図書館 British Library (当時は大英博物館 British Museum) の写本 Add. 12174 及び Add. 14484 に基づいて出版している。テキストの成立は、この聖人が 459 年に死亡してからさほど時を経ない時期であることが想定されている (Lent 1915: 103)。地域については、彼が修行していた柱がアレッポにあること、及び著者が彼のいた修道院の修道士であると考えられること (Brock 1997: 35) から、西方言の地域であることが推察される。

この資料には英訳 (Lent 1915) が存在する。英訳は Bedjan 版に基づいて行われているため、本研究ではこの Bedjan 版本文を利用する。なお、Assemani 版にもラテン語訳が付されている。本テキストは分量豊富であるため、本研究では一部 (Bedjan 1894: 507-536, l. 12) を利用する。

『東方諸聖人伝 (Lives of the Eastern Saints)』(以下『東方』) は、これが書かれた頃のシリア正教における、諸聖人たちに関する 58 の伝記である。著者はエフェソスのヨハネ (John of Ephesus) と呼ばれる人物である。彼はアミード近郊の出身で、542 年に東ローマ皇帝ユスティニアヌス I 世より小アジアへの伝道を任ぜられ、その後エフェソスの司教になった。彼の著作としてはこの『東方』の他

に、不運にも散逸し断片的にのみ遺されている『教会史 (Ecclesiastical History)』が知られている (Reed 2015)。

この『東方』が成立したのは 566 年から 568 年のことと考えられる (Brock 1979: 6)。この資料で扱われている聖人の多くは彼が個人的にも知っていた人々であると考えられる (Brock 1997: 45)。また彼の来歴から考えれば、このテキストは西側の教会の伝統に従って書かれていると考えられ、その言語も西側のものであるということが推測される。

このテキストを出版したものとしては Brooks (1923, 1924, 1926) が挙げられる。この版には英訳が付されている。シリア語本文にはセルト一体が使用されており、母音記号は示されていない。この版が元にする写本は複数存在する。その中で十分な分量を保存しているものが Brit. Mus. Add. 14647 であり、これは 688 年の写本である。この他に BM 所蔵 (当時) の 6 写本と Paris Syr. 234 がテキストの何章かを含んでいる。分量豊富なテキストであるため、本研究では一部 (Brooks 1923: 5-21) を利用する。なお、対象とした範囲には欠落部が存在する。

4.3. データ

『シメオン』『東方』から収集できた直接目的語名詞句の用例を表 4-1 に示す。第 3 章で述べたように、本研究では従属部標示型標識の出現に焦点を当てて議論を行うため、本章と第 5 章では従属部標示型標識が出現した用例 (第 3 章における M, MA) としなかった用例 (N, A) に予め整理した上でデータを提示する。また以降断りがない場合は、この従属部標示型の標識を単に「目的語標識」や「標識」と称する。

表 4-1 西方言 2 資料中の目的語名詞句の用例数

	標識なし	標識あり	合計
『シメオン』	200	45	245
	81.6%	18.4%	100.0%
『東方』	80	26	106
	75.5%	24.5%	100.0%
合計	280	71	351
	79.8%	20.2%	100.0%

これを観察された有生性・定性ごとに分類した結果を以下表 4-2～7 に示す。『シメオン』の用例が表 4-2～4、『東方』が表 4-5～7 である。なお判断を保留したものが無い場合にはその記載を省略する。

表 4-2 『シメオン』中の目的語名詞句と有生性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God	0	5	5
H	24	30	54
NHA	11	1	12
I	165	9	174
合計	200	45	245

表 4-3 『シメオン』中の目的語名詞句と定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
PN	0	3	3
DF	87	38	125
Spec	26	0	26
NSpec	87	4	91
合計	200	45	245

表 4-4 『シメオン』中の目的語名詞句と有生性・定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God: DF	0	5	5
H: PN	0	3	3
H: DF	16	23	39
NHA: PN	0	0	0
H: Spec	4	0	4
NHA: DF	2	1	3
I: PN	0	0	0
H: NSpec	4	4	8
NHA: Spec	4	0	4
I: DF	69	9	78
NHA: NSpec	5	0	5
I: Spec	18	0	18
I: NSpec	78	0	78
合計	200	45	245

表 4-5 『東方』中の目的語名詞句と有生性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God	0	3	3
H	10	14	24
NHA	0	1	1
I	69	8	77
保留	1	0	1
合計	80	26	106

表 4-6 『東方』中の目的語名詞句と定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
PN	0	0	0
DF	54	23	77
Spec	9	0	9
NSpec	17	3	20
合計	80	26	106

表 4-7 『東方』中の目的語名詞句と有生性・定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God: DF	0	3	3
H: PN	0	0	0
H: DF	3	11	14
NHA: PN	0	0	0
H: Spec	4	0	4
NHA: DF	0	1	1
I: PN	0	0	0
H: NSpec	3	3	6
NHA: Spec	0	0	0
I: DF	50	8	58
NHA: NSpec	0	0	0
I: Spec	5	0	5
I: NSpec	14	0	14
合計	79	26	105

ここで保留としたものは (4-1) に示す1例である[45]。この例は有生性について、指示対象が人間から無生物まですべてを含んでいるものであった。

(4-1) mrn yšwʕ mšyḥʔ drmzk
mr-n yšwʕ mšyḥʔ d-rmz-k
主-1PL.GEN PN REL-徴-2SGM.GEN
wpwqdnk mdbr **kl** **mʔ**
w-pwqdn-k mdbr **kl** **mʔ**
CONJ-命令-2SGM.GEN 導く.AtcPtc.SGM すべて もの
dbšmyʔ **wmʔ** **dbʔrʕʔ**
d-b-šmyʔ **w-mʔ** **d-b-ʔrʕʔ**
REL-に-天 **CONJ-もの** **REL-に-地**
「我らが主イエス・キリスト様、あなたの徴と命令が天と地にある万物を支配されるお方、」

(『東方』13: 10-11)

4.4. 議論

4.4.1. 目的語標識の使用頻度

はじめに目的語標識の使用頻度に関して『偽ヨシュア』と比較する。『偽ヨシュア』では目的語標識が現れない用例が確認された全用例の 2/3 を占めており、ここから目的語は標識を伴わずに現れるのがデフォルトであることを主張した。これと比較すると、表 4-1 に示した『シメオン』『東方』のデータでも『偽ヨシュア』同様に標識を伴わない用例が多数を占めており、標識を伴わない方法が基本である様子が見て取れる。従って、西方言では目的語となる名詞句には標識が現れないのがデフォルトであり、条件を満たした時にそれが現れうるものであると考えられる。以下の項では、この標識が現れうる条件について、第 3 章で提案した有生性・定性の二次元階層による説明がここでも当てはまるかどうか検討する。

4.4.2. 標識の有無と有生性・定性

本項では標識の出現と有生性・定性の関係について論じる。議論の前に断っておくが、『偽ヨシュア』データ同様に、本研究で西方言 2 資料から収集したデータも有生性・定性によって用例数に偏りがある。有生性では、無生物 I の用例が

[45] 『東方』からの例文は使用したテキストが母音表記を行っていないため、ここでも母音は示さず、子音字の翻字だけを示している。他方使用した『シメオン』のテキストはネストリウス式の母音記号が付されていたため、凡例に従って母音を示している。

251/351 例 (71.5%) と多数を占める一方、人間を除いた有生物 (NHA) はわずか 13/351 例 (3.7%) であった。定性では、用例の大部分が DF と NSpec のどちらかであり、PN や Spec の名詞句が目的語になっている用例はわずか 38/351 例 (10.8%) であった。また有生性・定性の組み合わせに関しては、用例が一例も確認されなかった組み合わせが NHA: PN と I: PN の 2 件存在し、用例が確認されたものについてもその数は組み合わせごとにばらつく。本論文ではこのばらつきのため、人間 H と無生物 I、定 DF と不定不特定 NSpec の比較に焦点を当てて議論を進める。

4.4.2.1. 標識の有無と有生性

ここでは標識の出現/非出現と目的語名詞句の有生性との関わりを見る。

表 4-8 は『シメオン』『東方』の 2 資料から得られた目的語名詞句の用例を合算して、有生性ごとに分類して示したものである。なおこの表からは (4-1) に示した、有生性がいずれかに定まらない 1 例を除外している。ここから目的語標識がどのように出現しているか、第 3 章の仮説がこれに当てはまるかについて確認する。

まず神が目的語になっている用例では、『偽ヨシュア』同様必ず標識が現れていることが今回のデータからは指摘できる。それ以外の条件ではすべて標識の使用は任意となっている点も第 3 章で見たデータと同様である。また標識が出現した用例が占める割合についてであるが、これは有生性の階層に従って H > NHA > I となっている。この差が統計的に意味のあるものであるかどうか確認するために God の用例も含めて χ^2 検定を行ったところ、有意差が確認された ($\chi^2(3) = 122.92, p < .05$)。このことから、目的語標識は有生性の高いものに対して現れやすく、低いものに対しては現れにくい、という第 3 章の仮説は『シメオン』『東方』のデータについても当てはまると言える。

表 4-8 標識の有無と有生性 (『シメオン』『東方』)

	標識なし	標識あり	合計
God	0	8	8
	0.0%	100.0%	100.0%
H	34	44	78
	43.6%	56.4%	100.0%
NHA	11	2	13
	84.6%	15.4%	100.0%
I	234	17	251
	93.2%	6.8%	100.0%

	標識なし	標識あり	合計
合計	279	71	350
	79.7%	20.3%	100.0%

4.4.2.2. 標識の有無と定性

次に定性が標識の出現に関与するかどうかを検討する。表 4-9 は表 4-8 同様に『シメオン』『東方』の 2 資料から得られた目的語名詞句の用例を合算して、名詞句の定性ごとに標識の有無を整理したものである。有生性同様、今回のデータには定性によって用例数に偏りが見られた。固有名詞 PN の用例は 2 資料を通して 3/351 例 (0.9%) しか確認されなかった。後ほど表 4-10 に示すように、この 3 例はいずれも人間を表す固有名詞 H: PN[46]のものであった (4-2) 。また不定特定 Spec の用例も 35/351 例 (10.0%) が確認されただけであった。そのためここでの議論は定 DF と不定不特定 NSpec の用例を中心にして行わざるを得ない。

(4-2) 確認された(H:) PN の用例

a. māwdʕēn ḥnan lkōn baktībātan
māwdʕēn ḥnan l-kōn ba-ktībāt-an
知らせる.AtcPtc.PLM 1PL に-2PLM によって-書くこと-1PL
neṣḥānāy dgabrā dalāhā
neṣḥānā-y d-gabrā d-alāhā
輝かしい功績-3SGM.GEN GEN-男 GEN-神
darḥem **lamšīḥā**
da-rḥem **la-mšīḥā**
REL-愛する.PF.3SGM **OM-キリスト**
「我々は我々の記録によってあなた達にキリストを愛した神の人の輝かしい功績を示し知らせましょう」
(『シメオン』507:18-508: 1)

b. wašbāw ʕammā saggīyā
wa-šbāw ʕammā saggīyā
CONJ-捕える.PF.3PLM 人々 たくさん

[46] (4-2a) の目的語「キリスト」の有生性をどう判断するか、という点にはかなりの難しさがある。ここではこの問題には深く立ち入らず、キリストを神性と人性をともに持つものとして、神性のみを持つものと区別するために、便宜的に人間として分類している。

w**latʔōmā**	bar	aḥūy	
w-**la-tʔōmā**	bar	aḥūy	
CONJ-**OM-PN**	息子.CSTR	兄弟+3SGM.GEN	
dīlēh	dṭūbānā		
dīl-ēh	d-ṭūbānā		
GEN-3SGM.GEN	GEN-聖人		

「彼らはたくさんの人々と聖人の兄弟の息子であるトマを捕えた」

(『シメオン』512: 18-19)

c.

qaššīšā	dēn	dtelnešīl	saggī		
qaššīšā	dēn	d-telnešīl	saggī		
司祭	CONJ	GEN-PN	とても		
maḥḥeb	hwā	lēh	**lmār**	**šemʕōn**	
maḥḥeb	hwā	lēh	**l-mār**	**šemʕōn**	
愛する.ActPtc.SGM	AUX.3SGM	3SGM.OBJ	**OM-師**	**PN**	

「テルネシールの司祭はシメオン師をとても愛していた」

(『シメオン』534: 19-20)

この DF と NSpec の 2 条件を比較すると、DF では 61/202 例 (30.2%) が標識を伴っている用例であったのに対し、NSpec ではわずか 7/111 例 (6.3%) だけが標識を伴い、残る 104/111 例 (93.7%) は標識を伴わない用例であった。この 2 条件のデータについて χ^2 検定を行ったところ、有意差が確認された (χ^2 (1) = 24.05, p < .05)。

なお、わずか 3 例しか確認されなかった PN ではあるが、これがすべて標識を伴って現れていたことは、第 3 章で述べたように定性の階層における高低が標識の出現率に関与することを示唆するものであると思われる。他方で Spec は 35 例確認されながらその中に標識を伴う用例が一例も確認されなかったことは注意する必要がある。そこで DF と Spec の間、Spec と NSpec の間それぞれについてその差が有意なものであるかを検討する。ここで問題となるのは特に Spec と NSpec の間の差についてである。初めに DF と Spec を比べると、標識の出現率には顕著な差が見て取れる。これについて χ^2 検定を行ったところ有意差が確認された (χ^2 (1) = 14.23, p < .05)。他方 Spec と NSpec の差については χ^2 検定の結果から有意差は認められなかった (χ^2 (1) = 2.32, p > .05)。そのため NSpec での標識出現率が Spec のそれより高いことに関しては、偶然 Spec に標識を伴う用例が確認されなかっただけ、あるいは NSpec で標識を伴う用例が多く確認されただけであるという可能性が否定しきれない。従って、『シメオン』『東方』のデータから言えることとしては、標識の現れやすさが (PN >) DF > Spec, NSpec となっ

ているというところまでである。

表 4-9 標識の有無と定性 (『シメオン』『東方』)

	標識なし	標識あり	合計
PN	0	3	3
	0.0%	100.0%	100.0%
DF	141	61	202
	69.8%	30.2%	100.0%
Spec	35	0	35
	100.0%	0.0%	100.0%
NSpec	104	7	111
	93.7%	6.3%	100.0%
合計	280	71	351
	79.8%	20.2%	100.0%

4.4.2.3. 標識と有無と有生性・定性の二次元階層

最後に有生性・定性の２つの意味特性を組み合わせて分類して、これと標識の出現/非出現との関係について検討する。表 4-10 に西方言 2 資料から確認できた用例数を合算して、有生性・定性ごとに整理する。この表からは第 3 章で扱った『偽ヨシュア』のデータ同様、有生性・定性の組み合わせによって用例数に偏りがあることが指摘できる。特に NHA: PN の例はいずれにおいても確認されなかった。また『偽ヨシュア』では確認できなかった NHA: Spec の用例が『シメオン』『東方』から確認できたが、その一方で『偽ヨシュア』で 16 例確認できた I: PN がここでは一例も見られなかった。このようにデータが欠落した条件もあるが、H: DF、I: DF、I: NSpec の 3 条件については用例数が比較的多く確認できた。これらの条件は『偽ヨシュア』のデータでも比較的用例数が多かったものであり、第 3 章の議論でも焦点を当てたものである。このような理由から、ここでの議論も H: DF、I: DF、I: NSpec と H: NSpec に焦点を当てる。なお『偽ヨシュア』では比較的多数の用例が確認された H: NSpec は、本章で扱う西方言 2 資料では 14 例と数が限られてしまったが、第 3 章での議論と比較するため、本章でも検討範囲に含める。

表 4-10 標識の有無と有生性・定性 (『シメオン』『東方』)

	標識なし	標識あり	合計
God: DF	0	8	8
	0.0%	100.0%	100.0%
H:PN	0	3	3
	0.0%	100.0%	100.0%
H: DF	19	34	53
	35.8%	64.2%	100.0%
NHA: PN	0	0	0
	-	-	-
H: Spec	8	0	8
	100.0%	0.0%	100.0%
NHA: DF	2	2	4
	50.0%	50.0%	100.0%
I: PN	0	0	0
	-	-	-
H: NSpec	7	7	14
	50.0%	50.0%	100.0%
NHA: Spec	4	0	4
	100.0%	0.0%	100.0%
I: DF	119	17	136
	87.5%	12.5%	100.0%
NHA: NSpec	5	0	5
	100.0%	0.0%	100.0%
I: Spec	23	0	23
	100.0%	0.0%	100.0%
I: NSpec	92	0	92
	100.0%	0.0%	100.0%
合計	279	71	350
	79.7%	20.3%	100.0%

H: DF、I: DF、H: NSpec、I: NSpec の各条件で標識が現れた用例が占める割合を見ると、それぞれ 64.2%、12.5%、50.0%、0.0%となっていた。この割合は有生性・定性の二次元階層で上位にある H: DF で最も高く、I: NSpec で最も低くなっ

ている。この傾向は第 3 章でも指摘されたとおりである[47]。これら 4 条件の間の差が有意であるかどうかを確かめるため χ^2 検定を行ったところ、有意差が認められた (χ^2 (3) = 101.50, p < .05)。またより精緻に論じるために H: DF-I: DF、H:DF-H: NSpec、H: DF-I: NSpec、I: DF-H: NSpec、I: DF-I: NSpec、H: NSpec-I: NSpec それぞれの組み合わせごとに χ^2 検定を行ったところ、H:DF-H: NSpec を除く 5 組で有意差が確認された (それぞれの結果は表 4-11 参照)。ここから、用例数が少なかった H: NSpec が関わる場合には若干精度が落ちるものの、有生性・定性の高低と標識出現率の高低にはある程度の関連性があるものと考えてよさそうである。

表 4-11 2 条件ずつ組み合わせて比較した場合の χ^2 検定の結果

組み合わせ	有意差について	検定結果
H: DF-I: DF	確認された	χ^2 (1) = 51.64, p < .05
H:DF-H: NSpec	確認されなかった	χ^2 (1) = 0.93, p > .05
H: DF-I: NSpec	確認された	χ^2 (1) = 77.10, p < .05
I: DF-H: NSpec	確認された	χ^2 (1) = 49.25, p < .05
I: DF-I: NSpec	確認された	χ^2 (1) = 12.43, p < .05
H: NSpec-I: NSpec	確認された	χ^2 (1) = 49.25, p < .05

他方で第 3 章のデータと比較すると異なる点も指摘できる。顕著なものとしては標識が出現した用例が占める割合がそれで、H: DF、I: DF、I:NSpec の 3 条件はいずれにおいても本章の『シメオン』『東方』合算データでの標識出現率が第 3 章で示した『偽ヨシュア』のそれよりも低くなっている。有生性・定性を区別せず全用例で比較しても、『偽ヨシュア』のデータでは 33.1%が標識を伴っていた一方、『シメオン』『東方』のデータでは標識を伴う用例は全体の 20.2%に過ぎない。『シメオン』と『東方』の間では標識を伴う用例の出現率には有意差が確認されなかったため (χ^2 (1) = 1.74, p = > .05)、ここで比較するものとしてはこれら 2 資料を合算した 351 例と『偽ヨシュア』の 838 例とを取り上げるのが妥当である。これらの間の標識の出現率を比較すると、確認された目的語名詞句は『偽ヨシュア』で 33.1%が、西方言の 2 資料で 20.2%が標識を伴っていた。この差について χ^2 検定を行ったところ有意差が認められた (χ^2 (1) = 19.66, p < .05)。従って『偽ヨシュア』と本章で扱った西方言 2 資料の間に見られた標識出現率の差はただの偶然とは考えられない。しかしながら標識が有生性・定性の二次元階層に従って出現しやすく/しにくくなるというところには違いがなく、この差

[47] 第 3 章のデータではそれぞれ 84.4%、38.3%、36.8%、3.8%であった。

は著者の書き癖を反映しているだけとも考えられる。

またI: DFとH: NSpecを比較すると、『偽ヨシュア』では標識を伴った用例の割合はほとんど変わらない (それぞれ 39.6%、38.2%) 一方で、本章で扱った西方言2資料では13.8%、50.0%と開きがあった。しかし用例数に着目すると、I:DFは『偽ヨシュア』でも西方言 2 資料合算データでもかなり用例数が確認できた一方、H: NSpecは2資料合算の方でわずか14例しか確認できなかった。このことからH: NSpecで標識を伴う用例のパーセンテージが高くなっているのは単なる誤差の可能性が十分に考えられる。

このように第 3 章のデータと比較すると、標識を伴う用例が占める割合の具体的な数字には差が見られるものの、他方で全体的な傾向を見ると、有生性・定性の双方が高い目的語ほど標識を伴いやすく、低い場合に標識が現れにくくなる、という点は共通していることが指摘できる。また、4.4.2.1.でも触れたことであるが、God: DFの用例を見ると、標識の出現率は第3章のデータと同様100.0%となっている。このことから、神が目的語になる場合には必ず標識が現れる、という可能性が考えられる。しかしながら『偽ヨシュア』『シメオン』『東方』3資料を合わせてもGod: DFの用例は10例しか確認されなかったため、何かを断言するにはデータが不足していると言うべきであろう。また H: PN もすべて標識を伴う用例であったが、『シメオン』『東方』から確認できた用例が3例 (4-2) しかなく、現時点でこの場合の標識の出現について断定的に述べることはできないように思われる。しかしながら、十分に用例を集めることができたH: DF、I: DF、I: NSpecの比較からは、有生性・定性が標識の出現に関与していることはほぼ確実であると考えられる。

以上の指摘を整理すると、図4-1のようになる。なお、今回の範囲で用例が確認できなかったケースには*を付記してある。また標識を伴う用例が確認できなかった条件については、『偽ヨシュア』でも標識を伴う用例の数が少なかった条件であるため、本研究で利用した箇所に偶然標識を伴う用例が現れなかっただけで標識の使用自体は任意である、という可能性も否定できない。そのためここではそのような条件での標識使用の可不可については結論を出さない。他方God: DFについては『偽ヨシュア』のデータ以上に用例数が確認でき、かつすべてが標識を伴う例であったため、標識使用が義務的である可能性が高く、図でもそのように示す。以下それぞれの有生性・定性の組み合わせについて、その用例を (4-3～13) に示す。また、標識の出現に揺れが見られた組み合わせについては、例文の後ろにはそれぞれ多数派のものに [○] を付記して、どちらの用例がより多く観察された標示パターンであったかを示しておく。標識の出現率が50.0%のものについては、この記号を省略する。

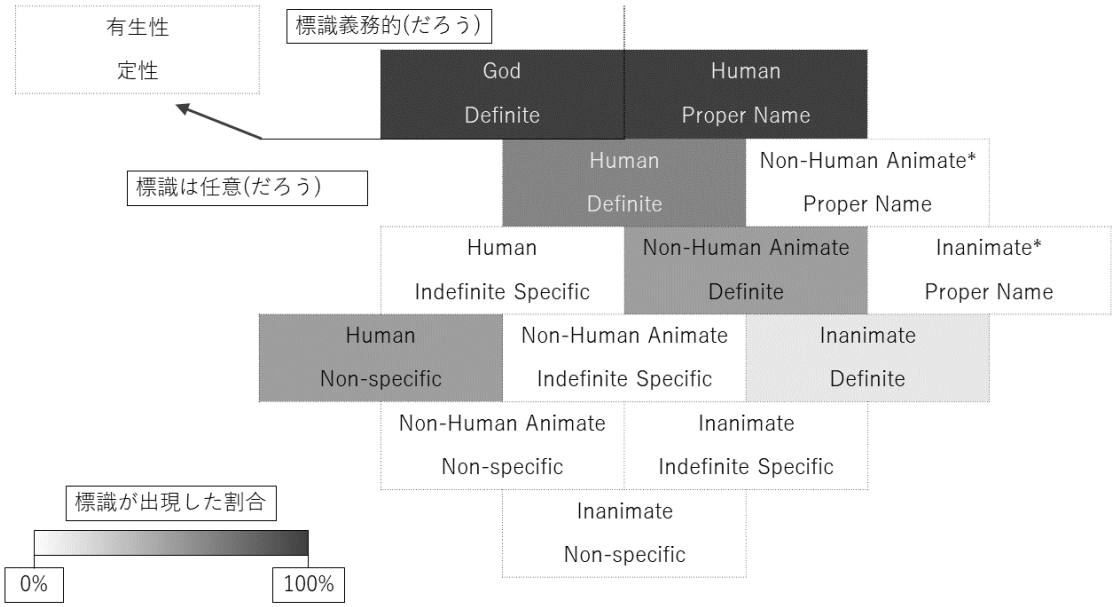

図 4-1 『シメオン』『東方』における目的語標識の出現/非出現と有生性・定性

(4-3) God: DF すべて標識あり

wkd	ḥzw	thrw	wʔwdyw
w-kd	ḥzw	thrw	w-ʔwdyw
CONJ-CONJ	見る.PF.3PLM	驚く.PF.3PLM	CONJ-認める[48].PF.3PLM

wšbḥw **lʔlhʔ**
w-šbḥw **l-ʔlhʔ**
CONJ-称える.PF.3PLM **OM-神**
「彼らは (これを) 見ると、驚き、神を認め称えた」
(『東方』19: 8-9)

(4-4) H: PN すべて標識あり

qaššīšā	dēn	dtelnešīl	saggī
qaššīšā	dēn	d-telnešīl	saggī
司祭	CONJ	GEN-PN	とても

[48] あるいは「告白する」「宣言する」。

maḥḥeb wā lēh **lmār šemʕōn**
maḥḥeb wā lēh **l-mār šemʕōn**
愛する.ActPtc.SGM AUX.3SGM 3SGM.OBJ **OM-師 PN**
「テルネシールの司祭はシメオン師をとても愛していた」
(『シメオン』534: 19-20)

(4-5) H: DF

a. 標識なし

ašlem bīday **šbaytā hādē**
ašlem b-īd-ay **šbaytā hādē**
引き渡す.IMPR.SGM に-手.PL-1SG.GEN **捕虜 この**
dšabyā lāk
d-šabyā l-āk
REL-捕まえる.PassPtc.SGF によって-2SGM
「お前に捕らえられたこの捕虜を私の手に渡せ」
(『シメオン』513: 21)

b. 標識あり [○]

kad dēn ḥzāy **lṭūbānā**
kad dēn ḥzā-y **l-ṭūbānā**
CONJ CONJ 見る.PF.3PLM-3SGM.OBJ **OM-聖人**
pras gepayhon
pras gepay-hon
広げる.PF.3PLM 翼.PL-3PLM.GEN
「それら (鳥たち) は (この) 聖人を見ると、翼を広げた」
(『シメオン』511: 13-14)

(4-6) H: Spec すべて標識なし

ḥzā **ṭlītā ḥdā btūltā**
ḥzā **ṭlītā ḥdā btūltā**
見る.PF.3SGM **少女 一 処女**
wlabkāh baqṭīrā
w-labk-āh ba-qṭīrā
CONJ-捕まえる.PF.3SGM-3SGF.OBJ によって-暴力

wṣaʕrāh
w-ṣaʕr-āh
CONJ-暴行する.PF.3SGM-3SGF.OBJ
「彼は一人の乙女を見て、彼女を乱暴に捕まえ、暴行した」
(『シメオン』532: 1-2)

(4-7) NHA: DF

a. 標識なし

wbašqāl ṭaʕnā saggīyā		mgabbē	wā
w-bašqāl ṭaʕnā saggīyā		mgabbē	wā
CONJ-非常に注意深く		集める.ActPtc.SGM	AUX.3SGM
esṭūrqē	kad	rāʕē	**ʕānē**
esṭūrqē	kad	rāʕē	**ʕānē**
ストラックス	CONJ	世話をする.ActPtc.SGM	**羊.PL**

「彼は羊たちを世話しながら、非常に注意深くストラックスを集めていた」
(『シメオン』508: 13-14)

b. 標識あり

wabʕāw	da**lhālēn**	**nūnē**	nkannšūn
wa-bʕāw	da-**l-hālēn**	**nūnē**	nkannšūn
CONJ-欲する.PF.3PLM	C-**OM-これら**	**魚.PL**	集める.IMPF.3PLM

「彼らはこれらの魚を集めようと欲した」
(『シメオン』515: 12)

(4-8) H: NSpec

a. 標識なし

wyldt	**brʔ**
w-yldt	**brʔ**
CONJ-産む.PF.3SGF	**息子**

「彼女は男の子を産んだ」
(『東方』12: 8)

b. 標識あり

wa**lsaggīyē**	tapnē	men	ṭāʕyūtā
wa-**l-saggīyē**	tapnē	men	ṭāʕyūtā
CONJ-**OM-大勢.PL**	戻す.IMPF.2SGM	から	誤り

līdaʕtā	dašrārā
l-īdaʕtā	da-šrārā
によって-知識	GEN-真実

「そしてあなたは正しきことの知識によって、多くの人々を誤った道から引き戻すだろう」

(『シメオン』510: 4-5)

(4-9) NHA: Spec すべて標識なし

tūb	men	bātar	ʕesrā	yāwmīn	kad	qāʔēm
tūb	men	bātar	ʕesrā	yāwmīn	kad	qāʔēm
また	から	あと	十	日.PL	CONJ	立つ.AtcPtc.SGM

wamṣalē	blelyā	ḥzā	**dmūtā** **dtanīnā**
wa-mṣalē	b-lelyā	ḥzā	**dmūtā** **d-tanīnā**
CONJ-祈る.ActPtc.SGM	に-夜	見る.PF.3SGM	**姿** **GEN-竜**

「また 10 日の後、彼が夜に立って祈りを捧げていると、竜の姿を見た」

(『シメオン』529: 14-15)

(4-10) I: DF

a. 標識なし [○]

w**dyrh**	ʕl	ʔydh
w-**dyr-h**	ʕl	ʔyd-h
CONJ-**修道院-3SGM.GEN**	対して	手-3SGM.GEN

dṭwbnʔ	ḥbyb	šbq
d-ṭwbnʔ	ḥbyb	šbq
GEN-聖人	PN	委ねる.PF.3SGM

「そして彼は彼の修道院を聖ハビーブ師の手に委ねた」

(『東方』7: 4-5)

b. 標識あり

bīdāw	dṭūbānā	
b-īd-āw	d-ṭūbānā	
に-手.PL-3SGM.GEN	GEN-聖人	

abʕleh	wā	**lʕūmrā**
abʕl-eh	wā	**l-ʕūmrā**
委ねる.PF.3SGM-3SGM.OBJ	AUX.3SGM	**OM-修道院**

「彼は修道院を聖人の手に委ねた」

(『シメオン』524: 19-20)

(4-11) NHA: NSpec すべて標識なし

wabhāw	lelyā	ṣād	wā
wa-b-hāw	lelyā	ṣād	wā
CONJ-に-この	夜	釣る.PF.3SGM	AUX.3SGM

nūnē	**lā**	**zʕūr**
nūnē	**lā**	**zʕūr**
魚.PL	**NEG**	**少ない**

「そしてこの夜彼は少なくない量の魚を釣った」

(『シメオン』514: 22)

(4-12) I: Spec すべて標識なし

wyab	leh	hāw	gabrā
w-yab	l-eh	hāw	gabrā
CONJ-与える.PF.3SGM	に-3SGM	この	男

šabṭā	**ddahbā**	**d**aḥīd	wā
šabṭā	**d-dahbā**	**d**-aḥīd	wā
杖	**GEN-金**	**REL**-取る.PassPtc.SGM	AUX.3SGM

「この男は彼に持っていた金の杖を与えた」

(『シメオン』512: 10-11)

(4-13) I: NSpec すべて標識なし

wkad	ḥzā	rēš dayrā	dlayt	hū
w-kad	ḥzā	rēš dayrā	d-layt	hū
CONJ-CONJ	見る.PF.3SGM	修道院長	C-NEG.COP	かれ

ʔemar	lhōn	sab	lkōn
ʔemar	l-hōn	sab	l-kōn
言う.PF.3SGM	に-3PLM	取る.IMPR.PLM	ために-2PLM

šrāgē	wzel
šrāgē	w-zel
灯り.PL	CONJ-行く.IMPR.PLM

「修道院長は彼が居ないのを見ると、彼らに言った『灯りを取って、行け...』」

(『シメオン』523: 14-15)

4.4.3. 仮説は西方言に拡大できるか

以上、本章では『柱頭行者シメオン伝』『東方諸聖人伝』の 2 資料から用例を

収集し、その目的語標識の出現/非出現の様相を見てきた。その結果が第 3 章で見た『偽ヨシュアの年代記』での観察に一致するのか、それとも相違するのか、という点についてここで整理しておきたい。

第一に目的語標識が出現した割合について再度データを比較する。表 4-12 は『偽ヨシュア』と『シメオン』+『東方』それぞれで標識の出現した用例が何例確認されたかを示したものである。この表からは、『偽ヨシュア』でも『シメオン』『東方』でも標識が出現しない方がデフォルトであり、条件によっては標識が用いられることもある、と解釈するのが妥当であることが指摘できる。他方すでに述べたことではあるが、『偽ヨシュア』では『シメオン』『東方』に比べて標識の用いられる頻度が高くなっている。これについてはテキストを執筆した著者の書き癖を反映している可能性が指摘できる。しかしながら次の段落で述べるように、標識がどのような場合に現れやすくなるか、という点についてはこれら 3 資料で共通した傾向が見られたことから、ことさらこの差を問題視する必要は無いと思われる。

表 4-12 西方言における目的語標示

	標識なし	標識あり	合計
『偽ヨシュア』	561	277	838
	66.9%	33.1%	100.0%
『シメオン』+『東方』	280	71	351
	79.8%	20.2%	100.0%

第二に目的語標識の出現/非出現について検討する。『偽ヨシュア』では、目的語標識は God: DF を含むすべての有生性・定性条件で出現することが確認された。また、標識が出現しない用例も God: DF 以外の全条件で確認できた。このように God: DF を除く有生性・定性の全組み合わせにおいて標識の出現の揺れが観察された。しかし、この揺れ方が目的語の有生性・定性によって異なっていることも示された。有生性・定性の階層で上方に位置する H: PN、H: DF では 96.6%、84.4%が標識を伴う用例であり、標識が出現する用例の方が多数派であった。これに対し下方の I: Spec、I: NSpec は 70.4%、96.2%が標識を伴わない N の用例で、標識を伴う用例よりも多く確認された。『偽ヨシュア』で目的語名詞句の有生性・定性ごとに標識を伴う用例の割合を濃淡で示したのが、以下の図 3-2 (再掲) である。

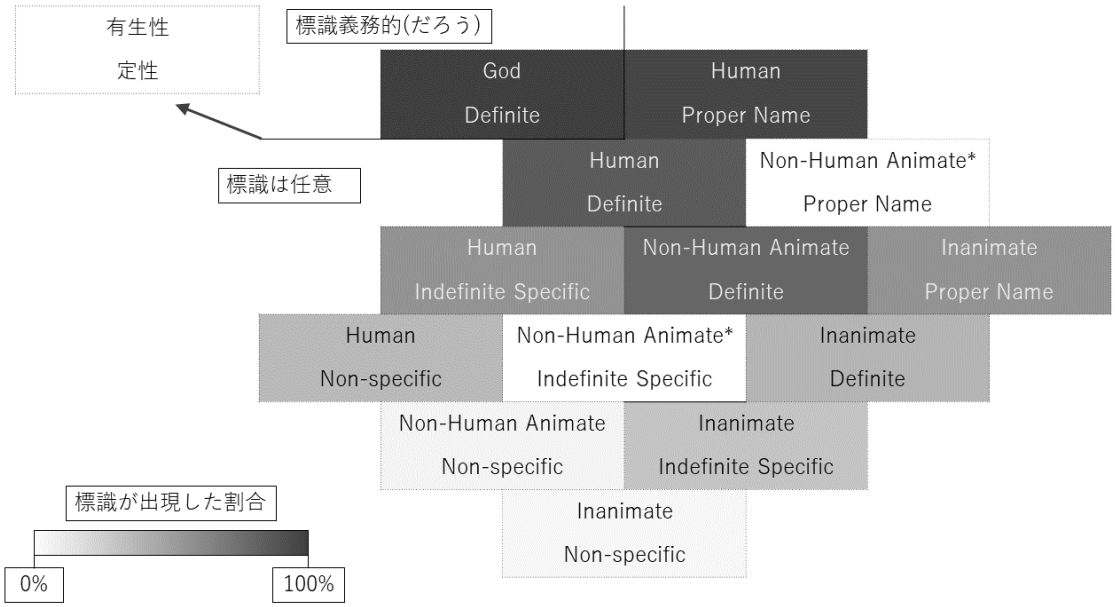

図 3-2 (再掲) 『偽ヨシュア』における目的語標識の出現/非出現

これに対して、『シメオン』+『東方』では、標識を伴う用例しか確認できなかったのが God: DF と H: PN の 2 条件、標識を伴わない用例しか現れなかったのが H: Spec、NHA:Spec、NHA: NSpec、I: Spec、I: NSpec の 5 条件存在した。そして標識の出現/非出現に揺れがあったのは H: DF、NHA: DF、H: NSpec、I: DF であった。この結果を図に整理したものが図 4-1 (再掲) である。

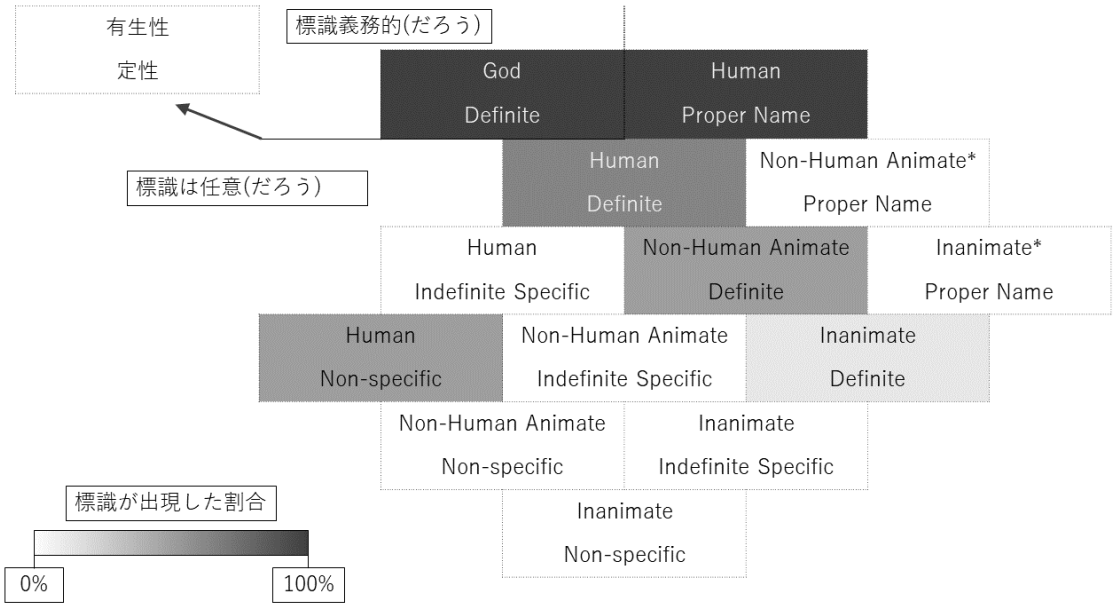

図 4-1 (再掲) 『シメオン』『東方』における目的語標識の出現/非出現と有生性・定性

この 2 つの図は表面的には異なる点が多い。『偽ヨシュア』データでは標識の出現率/非出現率が 100%になることは God: DF 以外ではなかった。他方『シメオン』+『東方』では標識の出現揺れが観察された有生性・定性の組み合わせは少なかった。しかしながら、『シメオン』+『東方』の詳細を検討すると、標識が必ず現れたのは God: DF、H: PN と二次元階層の上方に位置するもので、他方標識の現れる例が確認されなかったものは NHA: NSpec、I: Spec、I: NSpec といった階層の下方のものに集中していた。H: Spec、NHA:Spec の 2 条件は確認された用例数自体が少ないこともあって、偶然すべてが N であった可能性もある。また『シメオン』+『東方』で標識の出現が揺れていた H: DF、NHA: DF、H: NSpec、I: DF は、これを標識出現率の高いものから並べると H: DF (64.2%) > H: NSpec (50.0%) = NHA: DF (50.0%) > I: DF (12.5%) となっていた。この内 NHA: DF と H: NSpec は用例が少なく信頼性のある数値とは言えないだろうが、しかし標識出現率は有生性・定性の階層の高低に一致している。これらのことを総合すると、『シメオン』『東方』の結果についても『偽ヨシュア』同様「目的語名詞句が有生性・定性の階層で上位にあるほど標識が現れやすくなる」と言うことができる。両データ間の表面上の差異は、特に『シメオン』『東方』で目的語名詞句の有生性・定性に偏りが激しかったこととが要因のひとつと考えられる。また各条件における標識使用率の差については、『偽ヨシュア』の著者が標識を用いる方法を好む作家であったことによる可能性が考えられる。それ以外にも、有生性・定性

以外の要素が関与しており、この要素が両データの間で分布に偏りがあって、そのことが標識の現れ方に影響している可能性も否定できない。この要素が何か、あるいはそもそもそのような要素が存在するのか、という問題については今後の課題である (4-14)。

(4-14)

a. ḥzā **ṭlītā** **ḥdā** **btūltā**
ḥzā **ṭlītā** **ḥdā** **btūltā**
見る.PF.3SGM **少女** **一** **処女**
wlabkāh baqṭīrā
w-labk-āh ba-qṭīrā
CONJ-捕まえる.PF.3SGM-3SGF.OBJ によって-暴力
wṣaʕrāh
w-ṣaʕr-āh
CONJ-暴行する.PF.3SGM-3SGF.OBJ
「彼は一人の乙女を見て、彼女を乱暴に捕まえ、暴行した」
(『シメオン』532: 1-2)

b. wšdr **lʔnš** mn dylhwn
w-šdr **l-ʔnš** mn dyl-hwn
CONJ-送る.PF.3SGM **OM-人** から GEN-3PLM
dšmh hwʔ mṭrwnynʔ
d-šm-h hwʔ mṭrwnynʔ
REL-名前-3SGM.GEN COP.PST.3SGM PN
ʕm ḥmšmʔʔ pršyn
ʕm ḥmšmʔʔ pršyn
ともに 五百 騎兵.PL
「彼は彼の(配下)からマトロニアヌスという名前の人を 500 人の騎兵と共に送った」
(『偽ヨシュア』246: 23-24)

以上の議論から、本章で扱った 2 資料のデータと第 3 章で扱った『偽ヨシュア』のデータとの間には全体的な傾向が共通しており、従ってこれらを合算して西方言のデータとすることは十分に妥当性があると筆者は主張する。

4.5. 本章のまとめ

本章では『柱頭行者シメオン伝』『東方諸聖人伝』という西方言の 2 資料から

データを採って、目的語標識の使用状況を検討した。その結果、目的語標識は目的語となる名詞句が有生性・定性の二次元階層で上方にある場合により使用されやすく、下方のものほど標識を伴わない用例が増える、ということが確認された。この傾向は第 3 章で検討した『偽ヨシュア』のデータで確認されたことと同様である。ここから、目的語標識の出現/非出現に関する第 3 章の仮説を西方言の記述として拡大することは可能である、と筆者は主張する。

以下本章で扱った 2 資料と第 3 章で扱った『偽ヨシュア』の用例数を合算した図表を示しておく。表 4-13 は目的語標識の出現/非出現で分けたもの、図 4-2 はこれを図に整理したものである。いずれにおいても、有生性・定性の判断が出来ず保留としたものは省く。

表 4-13 目的語標識の出現/非出現と有生性・定性 (西方言 3 資料合算)

	標識なし	標識あり	合計
God: DF	0	10	10
	0.0%	100.0%	100.0%
H: PN	1	31	32
	3.1%	96.9%	100.0%
H: DF	34	115	149
	22.8%	77.2%	100.0%
NHA: PN	0	0	0
	-	-	-
H: Spec	12	5	17
	70.6%	29.4%	100.0%
NHA: DF	3	6	9
	33.3%	66.7%	100.0%
I: PN	7	9	16
	43.8%	56.3%	100.0%
H: NSpec	55	35	90
	61.1%	38.9%	100.0%
NHA: Spec	4	0	4
	100.0%	0.0%	100.0%
I: DF	264	107	371
	71.2%	28.8%	100.0%

	標識なし	標識あり	合計
NHA: NSpec	23	1	24
	95.8%	4.2%	100.0%
I: Spec	42	8	50
	84.0%	16.0%	100.0%
I: NSpec	371	11	382
	97.1%	2.9%	100.0%
合計	816	338	1154
	70.7%	29.3%	100.0%

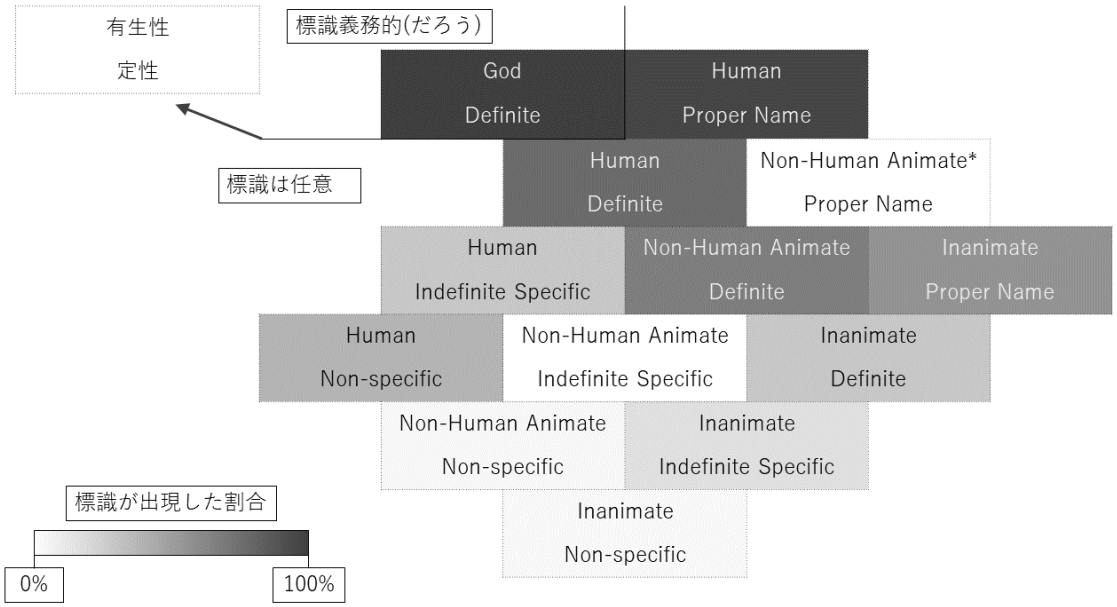

図 4-2 西方言における目的語標識の出現と有生性・定性

第 5 章 仮説の検証②：東方言の DOM

5.1. 本章の目的

本章では西方言を扱った第 4 章に続いて、第 3 章で提案した仮説がシリア語東方言の資料から得たデータにも当てはまるかどうかを検討し、この仮説がシリア語の東西両方言に拡大できるかどうかを明らかにする。

5.2. 資料

本章では『カルカー・ド・ベート・スロークとその地の殉教者達の歴史』『祭司アイタイラーハーと助祭ハプサイの殉教』『司祭ヤアコーブと助祭アーザードの殉教』『匿名筆者によるササン朝末の年代記』の 4 資料を用いる。

『カルカー・ド・ベート・スロークとその地の殉教者達の歴史 (History of Karka d-Beth Slokh)』(以下『カルカー』とする) はそのタイトル通り、カルカー・ド・ベート・スローク (現在のイラク領キルクーク) とその周辺地域の歴史と、その地で起きたキリスト教徒の迫害と殉教について記した歴史資料である。テキストは複数の写本に保存されており、出版もそれらを校合して行われている (三津間・石渡 2005: 61)。また三津間・石渡による日本語訳が存在する (三津間・石渡 2005 及び三津間・石渡 2006)。テキスト成立の時期は、三津間らは明言していないものの、6 世紀の終わりからムスリムによる征服までの間に活動した、カルカー出身またはカルカーの主教、バル・サーフデーによるものとする説を紹介している (三津間・石渡 2005: 61-62)。資料の成立した地域については、扱う内容のローカルさから、地元民による歴史記述ということで問題は無いと考えられる。また、テキストの綴りについても、Payne Smith (1999) の辞書が東側の綴りとするものがしばしば観察されることから、このテキストが東方言のものと考えられることが支持される。本研究では、Bedjan (1891: 507-535) 収録のテキストを利用する。この版は三津間らの翻訳においても底本となっている。分量はテキストをすべて使用する。

『祭司アイタイラーハーと助祭ハプサイの殉教 (Martyrdom of Aitailaha the Priest and Hapsai the Deacon)』(以下『アイタイラーハー』) は、先述の『カルカー…』同様、ササン朝ペルシア帝国において殉教したキリスト教徒の殉教者伝のひとつである。テキストは Bedjan の Acta Martyrum et Sanctorum, Vol. IV (Bedjan 1894: 133-137) に収録されている。翻訳は三津間・石渡による日本語訳 (三津間・石渡 2004) がある。Bedjan (1894) が底本とした写本は Jean Baptiste Abbeloos 氏 (1836-1906) が所蔵していた写本で、これはディヤルバクル・カルデア教会大司教館の写本 96 を一部写したものである (三津間・石渡 2004: 58)。ディヤルバク

ル写本 96 は 11～12 世紀のもの、記録されている出来事はシャープール II 世の大迫害の 15 年目、354～355 年以降に起こったもの、ということは分かっているものの、テキストの成立時期自体については三津間・石渡 (2004) は言及していない。成立地域については、語られる出来事がペルシア帝国領内のものであり、また『アルベラ年代記』(アルベラは現在のイラク領エルビール) に同じ殉教伝が記録されていることから東方言の地域である可能性がかなり高いと考えられる。本研究では Bedjan (1894) のテキストを利用する。分量が非常に少ないため、『カルカー』同様テキストのすべてを利用する。

『司祭ヤアコーブと助祭アーザードの殉教 (Martyrdom of Jacob the Elder and Azad the Deacon)』(以下『ヤアコーブ』) は前述の『アイタイラーハー』と同じ Abbeloos の写本に収録されていた殉教者伝である。この作品もペルシア帝国領内でのキリスト教徒迫害の時期に起きた、二人の聖職者の殉教について語った資料である。テキストを出版した Bedjan (1894) のまえがきはこの資料について触れておらず、詳しいことは明らかでない。Peeters (1910: 96) の記載から、記録されている出来事は前述シャープール II 世の大迫害の 32 年目 (371～372 年) のものであると考えられる。本研究では Bedjan (1894) のテキストを利用する。

『匿名筆者によるササン朝末の年代記 (Anonymous chronicle on the end of the Sassanids)』(以下『匿名年代記』) は、ササン朝ペルシア帝国が滅亡する前の最後の半世紀の歴史について扱った資料である (Brock 1979: 25)。この資料はテキストを校訂・出版した人物の名前を取った『グイーディの年代記 (Guidi's Chronicle)』、あるいはこの資料が成立したと考えられる土地の名から『フーゼスターン年代記 (Khuzistan Chronicle)』とも呼ばれる。著者は不明であるが、Brock (1976: 23-24) によれば、670～680 年ごろにフーゼスターンで書かれたものである。テキストは Borg. Syr. 82 などの写本に保存されており、Guidi による出版が存在する (Guidi, I. 1903, Chronica Minora, I pp. 15-39)。本発表ではこの Guidi の出版を利用する。なお本研究では 27 ページ 6 行目までを利用する。

5.3. データ

本節では上に紹介した 4 資料から収集した目的語名詞句の標識の有無を示す。

はじめに各資料それぞれから確認できた目的語名詞句の用例数を、標識が現れないものと現れるものとに分けて提示する (表 5-1)。

表 5-1 東方言 4 資料中の目的語名詞句の用例数

	標識なし	標識あり	合計
『カルカー』	169	79	248
	68.1%	31.9%	100.0%

	標識なし	標識あり	合計
『アイタイラーハー』	11	4	15
	73.3%	26.7%	100.0%
『ヤアコーブ』	23	8	31
	74.2%	25.8%	100.0%
『匿名年代記』	97	61	158
	61.4%	38.6%	100.0%
合計	300	152	452
	66.4%	33.6%	100.0%

なお『カルカー』には (5-1) に示す、標識の有無に関わる異読が存在する。この目的語名詞 ḥērē「有力者たち」については本研究の議論から除外する[49]。

(5-1) walrēšē w**(al)ḥērē** wšarkā
wa-l-rēšē w**(-al)-ḥērē** w-šarkā
CONJ-OM-頭.PL CONJ**(-OM)-有力者.PL** CONJ-残り
dīdaʕē dabkarkā nagged
d-īdaʕē da-b-karkā nagged
REL-有名な.PL.M REL-に-PN 連れ去る.PF.3.PL.M
「頭たち、有力者たち、そしてカルカーにいた残りの有名な者たちを連れ去った」

(『カルカー』519: 18-19)

続けて『カルカー』から確認された目的語名詞を有生性・定性ごとに分類したものを表 5-2〜3 に示す。表 5-4 は 2 つの意味特性を組み合わせて分類した結果である。

表 5-2 『カルカー』中の目的語名詞句と有生性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God	0	0	0
H	26	44	70
NHA	0	0	0

[49] 『匿名年代記』からの例文は Guidi (1903) が母音を示していないため、ここでも子音字の翻字だけを示す。他方それ以外の 3 作品からの例文は、出版されたテクストにネストリウス式の母音記号が付されていたため、凡例に従って母音を示す。

用例数	標識なし	標識あり	合計
I	143	35	178
合計	169	79	248

表 5-3 『カルカー』中の目的語名詞句と定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
PN	2	17	19
DF	62	48	110
Spec	13	8	21
NSpec	92	6	98
合計	169	79	248

表 5-4 『カルカー』中の目的語名詞句と有生性・定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God: DF	0	0	0
H: PN	0	11	11
H: DF	3	20	23
NHA: PN	0	0	0
H: Spec	5	7	12
NHA: DF	0	0	0
I: PN	2	6	8
H: NSpec	18	6	24
NHA: Spec	0	0	0
I: DF	59	28	87
NHA: NSpec	0	0	0
I: Spec	8	1	9
I: NSpec	74	0	74
合計	169	79	248

同様の方法で残る 3 資料の用例数を示す。『アイタイラーハー』の用例数は表 5-5～7 に、『ヤアコーブ』の用例数は表 5-8～10 に、『匿名年代記』の用例数は表 5-11～13 にそれぞれ示す。

表 5-5 『アイタイラーハー』中の目的語名詞句と有生性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God	0	0	0
H	1	2	3
NHA	0	0	0
I	10	2	12
合計	11	4	15

表 5-6 『アイタイラーハー』中の目的語名詞句と定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
PN	0	1	1
DF	7	3	10
Spec	2	0	2
NSpec	2	0	2
合計	11	4	15

表 5-7 『アイタイラーハー』中の目的語名詞句と有生性・定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God: DF	0	0	0
H: PN	0	1	1
H: DF	1	1	2
NHA: PN	0	0	0
H: Spec	0	0	0
NHA: DF	0	0	0
I: PN	0	0	0
H: NSpec	0	0	0
NHA: Spec	0	0	0
I: DF	6	2	8
NHA: NSpec	0	0	0
I: Spec	2	0	2
I: NSpec	2	0	2
合計	11	4	15

表 5-8 『ヤアコーブ』中の目的語名詞句と有生性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God	0	1	1
H	2	2	4
NHA	0	0	0
I	21	5	26
合計	23	8	31

表 5-9 『ヤアコーブ』中の目的語名詞句と定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
PN	0	0	0
DF	10	8	18
Spec	0	0	0
NSpec	13	0	13
合計	23	8	31

表 5-10 『ヤアコーブ』中の目的語名詞句と有生性・定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God: DF	0	1	1
H: PN	0	0	0
H: DF	0	2	2
NHA: PN	0	0	0
H: Spec	0	0	0
NHA: DF	0	0	0
I: PN	0	0	0
H: NSpec	2	0	2
NHA: Spec	0	0	0
I: DF	10	5	15
NHA: NSpec	0	0	0
I: Spec	0	0	0
I: NSpec	11	0	11
合計	23	8	31

表 5-11 『匿名年代記』中の目的語名詞句と有生性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God	0	0	0
H	22	41	63
NHA	2	0	2
I	73	20	93
合計	97	61	158

表 5-12 『匿名年代記』中の目的語名詞句と定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
PN	1	24	25
DF	17	31	48
Spec	13	5	18
NSpec	66	1	67
合計	97	61	158

表 5-13 『匿名年代記』中の目的語名詞句と有生性・定性

用例数	標識なし	標識あり	合計
God: DF	0	0	0
H: PN	1	20	21
H: DF	4	15	19
NHA: PN	0	0	0
H: Spec	4	5	9
NHA: DF	0	0	0
I: PN	0	4	4
H: NSpec	13	1	14
NHA: Spec	0	0	0
I: DF	13	16	29
NHA: NSpec	2	0	2
I: Spec	9	0	9
I: NSpec	51	0	51
合計	97	61	158

5.4. 議論

5.4.1. 目的語標識の使用頻度

はじめに第 4 章同様、目的語の使用頻度がどのようになっているかを確認する。表 5-1 には 4 資料それぞれで目的語標識がどの程度出現していたか、および 4 資料のデータを合算した数値を示している。これを見ると、4 資料いずれにおいても標識の現れない用例の数は、これが現れた用例の数よりも多くなっている。このことから東方言でも、他動詞の目的語は標識 l-を伴わずに現れるのが通常であり、何かしらの条件によってこれが出現しうる、という理解で問題は無いと言えよう。細かいパーセンテージを見ると、『アイタイラーハー』『ヤアコーブ』の 2 作では標識無し：標識ありの比率がほぼ 3:1 となっている一方で、『カルカー』はほぼ 2:1、『匿名年代記』ではおおよそ 3:2 と、標識の出現したものの割合には差が観察される。ところでこの 4 資料はテキスト自体の分量差が大きく、そのため用例数にもかなりの開きがある。そこでこの差が統計的に意味のあるものであるかどうか確かめるために χ^2 検定を行ったところ、有意差は認められなかった (χ^2 (3) = 3.28, p > .05)。このため本研究ではこれ以降の議論を 4 資料のデータを合計した数字に基づいて展開する。

5.4.2. 標識の有無と有生性・定性

次に目的語名詞句の有生性・定性と標識の出現/非出現の関係を検討していく。議論はまず有生性に焦点を当て、次に定性を見ていく。最後に有生性・定性の二次元階層と照らし合わせて東方言における目的語標識の出現/非出現の様子を明らかにする。

5.4.2.1. 標識の有無と有生性

ここでは目的語標識と有生性との関係を見る。表 5-14 は 4 資料から確認された目的語名詞句の用例を、その有生性によって整理したものである。この表 5-14 を見れば明らかなように、今回の東方言のデータから確認された目的語名詞句はほとんどが人間 H (140/452 例、31.0%) か無生物 I (309/452 例、68.4%) のどちらかであった。そのためここでの議論はこの 2 条件間の差を見ることが中心になる。

さてその H と I の 2 条件で目的語標識がどのように現れているかを見ると、H の場合には 89/140 例 (63.6%) が標識を伴う用例で多数派となっていたが、他方 I の場合には標識の現れた用例は 62/309 例 (20.1%) で、I の用例の 1/5 程度に過ぎなかった。ここから目的語標識は目的語が人間のときには現れやすく、無生物のときには現れにくくなる、ということが言えそうである。この差について、使用するデータを H と I のものに絞った上で χ^2 検定を行ったところ、有意差が

認められた ($\chi^2(1) = 81.70, p < .05$)。従って、H と I の間の標識出現率の差は偶然によるものではなく、目的語標識の使用/不使用には目的語の有生性が関与すると言うことができよう。

表 5-14 標識の有無と有生性 (東方言 4 資料)

	標識なし	標識あり	合計
God	0	1	1
	0.0%	100.0%	100.0%
H	51	89	140
	36.4%	63.6%	100.0%
NHA	2	0	2
	100.0%	0.0%	100.0%
I	247	62	309
	79.9%	20.1%	100.0%
合計	300	152	452
	66.4%	33.6%	100.0%

また、第 3 章、第 4 章と見てきたデータでは全用例が標識を伴っていた God の用例は、東方言 4 資料のデータでも標識を伴っていた (5-2)。用例が 1 例しか見られなかったためはっきりしたことを主張することはできないが、ここまで標識を伴わない用例が確認されていないことから考えると、「目的語の有生性が God である場合には標識が必ず現れる」という仮説を立てることができる。この仮説の検証は今後の課題と言える。また NHA の場合には、このデータでは標識の現れた用例は観察されていない。こちらも用例数が 2 例と極端に少なく、NHA の場合の標識出現/非出現については十分に議論し得ない。

(5-2) wbātar hālēn qām wṣallī
w-bātar hālēn qām w-ṣallī
CONJ-あとで これら 立つ.PF.3PLM CONJ-祈る.PF.3PLM
wšabbaḥ **lalāhā**
w-šabbaḥ **l-alāhā**
CONJ-称える.PF.3PLM **OM-神**
「これらの出来事のあとで、彼らは立ち、祈り、神を称えた」
(『ヤアコーブ』139: 8)

5.4.2.2. 標識の有無と定性

続けて目的語標識と定性との関係を見る。表 5-15 は 4 資料から確認された目的語名詞句の用例を、その定性によって整理したものである。ここからは以下のことが指摘できる。目的語の定性が高い固有名詞 PN の場合には、3/45 例 (6.7%) を除いたすべてが標識を伴う用例であった一方、定性の階層で最も下位にある不定不特定 NSpec の名詞の場合には 7/180 例 (3.9%) が標識を伴うだけであった。またその間の定 DF、不定特定 Spec ではそれぞれ 90/186 例 (48.4%)、13/41 例 (31.7%) が標識によって標示される用例であった。この結果について χ^2 検定を行ったところ有意差が確認できた (χ^2 (3) = 161.41, $p < .05$)。標識出現率の高い順に各条件を並べると PN > DF > Spec > NSpec となり、これは定性の階層の順番に一致している。ここから、目的語標識は目的語となる名詞句が定性の階層で上位にあるほど現れやすく、下位になるほど現れにくくなることが言える。

表 5-15 標識の有無と定性 (東方言 4 資料)

	標識なし	標識あり	合計
PN	3	42	45
	6.7%	93.3%	100.0%
DF	96	90	186
	51.6%	48.4%	100.0%
Spec	28	13	41
	68.3%	31.7%	100.0%
NSpec	173	7	180
	96.1%	3.9%	100.0%
合計	300	152	452
	66.4%	33.6%	100.0%

5.4.2.3. 標識の有無と有生性・定性の二次元階層

最後に有生性・定性の 2 つの意味特性を組み合わせて分類して、これと標識の出現/非出現との関係について検討する。表 5-16 は東方言 4 資料の目的語名詞句を有生性・定性によって整理して示したものである。既に 5.4.2.1.で述べたように、今回のデータ中 NHA の用例はわずか 2 例であった。この 2 例はいずれも不定不特定 NSpec の用例である (5-3)。また God の用例も (5-2) として上に示した 1 例しか確認されなかった。このため以降の議論では NHA を除いて、H と I のものに注目する。

表 5-16 標識の有無と有生性・定性 (東方言 4 資料)

	標識なし	標識あり	合計
God:DF	0	1	1
	0.0%	100.0%	100.0%
H:PN	1	32	33
	3.0%	97.0%	100.0%
H:DF	8	38	46
	17.4%	82.6%	100.0%
NHA:PN	0	0	0
	-	-	-
H:Spec	9	12	21
	42.9%	57.1%	100.0%
NHA:DF	0	0	0
	-	-	-
I:PN	2	10	12
	16.7%	83.3%	100.0%
H:NSpec	33	7	40
	82.5%	17.5%	100.0%
NHA:Spec	0	0	0
	-	-	-
I:DF	88	51	139
	63.3%	36.7%	100.0%
NHA:NSpec	2	0	2
	100.0%	0.0%	100.0%
I:Spec	19	1	20
	95.0%	5.0%	100.0%
I:NSpec	138	0	138
	100.0%	0.0%	100.0%
合計	300	152	452
	66.4%	33.6%	100.0%

(5-3)

a. lʔnš dyn mšmšnʔ dbrtʕlʔ
l-ʔnš dyn mšmšnʔ d-brtʕlʔ
OM-人 CONJ 助祭 REL-PN
mtknʔ hwʔ
mtknʔ hwʔ
名付けられる.ActPtc.SGM AUX.3SGM
ʔškḥwhy kd mdbr
ʔškḥw-hy kd mdbr
見つける.PF.3PLM-3SGM.OBJ CONJ 犠牲に捧げる.ActPtc.SGM
trnglʔ ḥwrʔ bʕbʔ dlbr mn mdyntʔ
trnglʔ ḥwrʔ b-ʕbʔ d-lbr mn mdyntʔ
雄鶏 白い にて-森 REL-外に から 町
「彼らは Bar Taʕlē という名の助祭を、彼が町の外の森で白い雄鶏を犠牲に捧げているときに見つけた」

(『匿名年代記』18: 11-13)

b. wʔp **swsyʔ** bʕʔ mnh
w-ʔp **swsyʔ** bʕʔ mn-h
CONJ-また **馬** 求める.PF.3SGM から-3SGM
dsgy mʕly hwʔ
d-sgy mʕly hwʔ
REL-とても 高貴な COP.PST.3SGM
wlʔ yhb lh
w-lʔ yhb l-h
CONJ-NEG 与える.PF.3SGM に-3SGM
「また彼 i は彼 ii に対してとても高貴な馬も求めたが、彼 ii は彼 i に与えなかった」[50]

(『匿名年代記』19: 24-25)

God と NHA を除いた 8 条件 (H: PN、H: DF、H: Spec、H: NSpec、I: PN、I: DF、I: Spec、I:NSpec) では、その大部分において標識の出現に揺れが見られた。唯一揺れが確認されなかったのは I: NSpec の場合で、このときには標識を伴う用例が観察されなかった。ここまでの議論から予測されるように、標識の使用の揺れ方は一様ではない。有生性・定性の二次元階層で上にあるものから標識の出現率

[50] 日本語訳には二人の「彼」が現れるため、それぞれ彼 i、彼 ii として区別する。

を見ていくと、標識が現れたものは最上位の H: PN では 32/33 例 (97.0%)、H: DF で 38/46 (82.6%)、H: Spec では 12/21 (57.1%)、I: PN で 10/12 (83.3%)、H: NSpec で 7/40 (17.5%)、I: DF は 51/139 (36.7%)、I: Spec で 1/20 (5.0%) となっていた。各条件における標識の出現率を二次元階層における高低で区切って示すと、H: PN (97.0%) | H: DF (82.6%) | H: Spec (57.1%)、I: PN (83.3%) | H: NSpec (17.5%)、I: DF (36.7%) | I:Spec (5.0%) | I: NSpec (0.0%) となる。図示すると図 5-1 のようになる。これら出現率の差について χ^2 検定を行ったところ、有意差が確認された (χ^2 (7) = 209.75, $p < .05$)。ここから目的語標識は有生性・定性の二次元階層でより上位にあるものほど現れやすく、下位になるにつれて現れにくくなる、と言うことができる。

ただし、この観察が妥当であるか、という点については疑問を差し挟む余地がある。図 5-1 で同じ高さであるように示した H: Spec と I: PN、及び H: Nspec と I: DF を比較すると、いずれもより定性が高い場合、すなわち I: PN/DF の場合のほうが標識出現率が高くなっている。このことから、東方言では目的語の有生性と定性がともに標識の出現/非出現に関与するが、2 つの意味特性の間で標識の出現に対する影響力は均等ではなく、定性の値がより重要となっている、と考えることもできそうである。この点に関して H: Spec と I :PN、H: NSpec と I: DF の組み合わせでそれぞれ χ^2 検定を行ったところ、H: NSpec と I: DF の組み合わせについては有意差が確認された (χ^2 (1) = 5.22, $p < .05$) が、H: Spec と I :PN の組み合わせについては有意差は認められなかった (χ^2 (1) = 2.36, $p > .05$)。このことから、「東方言では定性の値がより重要となる」という仮説については、ここでは結論を保留したい。

いずれにしても、標識の出現/非出現には有生性と定性の双方が関与していることは確かである。ここでは十分な用例数が確保できていると言えそうな H: DF、H: NSpec、I: DF、I: NSpec を取り上げて、有生性・定性のいずれかを揃えた組み合わせでそれぞれ比較する。はじめに有生性を揃えた H: DF と H: NSpec の組み合わせを見ると、標識の出現率は H: DF の方が高く、これについて χ^2 検定を行ったところ有意差が認められた (χ^2 (1) = 36.36, $p < .05$)。同じように I: DF と I: NSpec の組み合わせについても χ^2 検定を行ったところ、こちらも有意差が認められた (χ^2 (1) = 62.06, $p < .05$)。また定性を揃えた H: DF と I: DF の組み合わせでは、H: DF の方が標識出現率が高い。これについて χ^2 検定を行ったところ有意差が認められた (χ^2 (1) = 29.19, $p < .05$)。さらに H: NSpec と I: NSpec の組み合わせで行った χ^2 検定でも同様に有意差が確認できた (χ^2 (1) = 25.14, $p < .05$)。このことから、東方言でも目的語標識の出現は有生性・定性の二次元階層によってコントロールされている、と言うことが可能である。

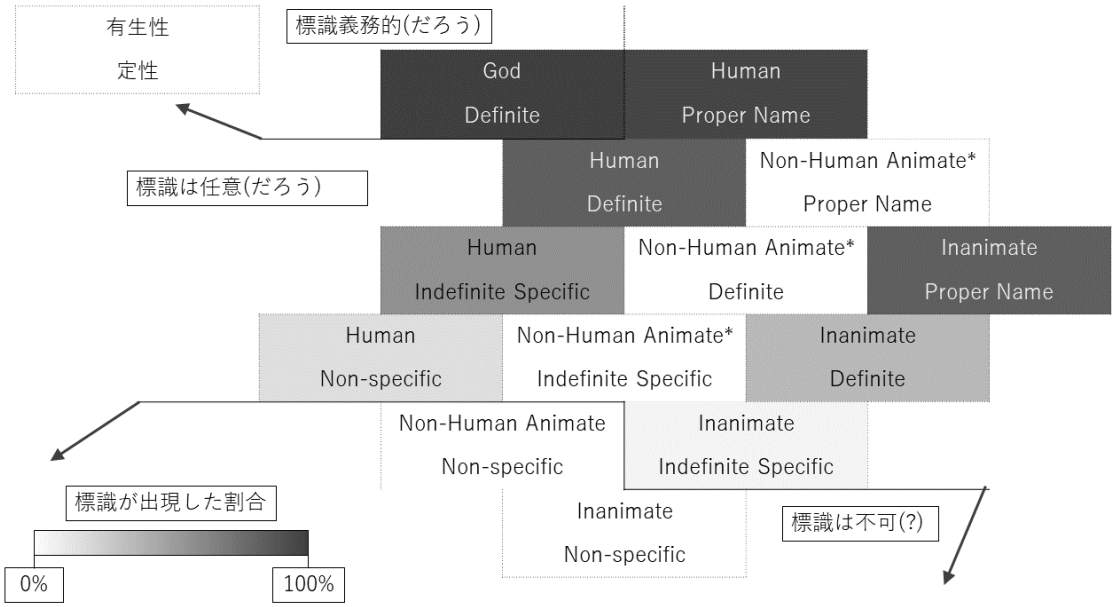

図 5-1 東方言 4 資料における目的語標識の出現/非出現と有生性・定性

以下 (5-4～10) には H: PN、H: DF、H: Spec、H: NSpec、I: PN、I: DF、I: Spec それぞれの場合の用例を、標識の出現しなかったものとしたものと、それぞれ提示する。この標識の出現の揺れについては、それぞれ多数派のものに [○] を付記して、どちらの用例がより多く観察された標示パターンであったかを示しておく。また (5-11) に標識の出現に揺れの見られなかった I: NSpec の用例を示す。

(5-4) H: PN の場合

a. 標識なし

wsmw bh bʕdtʔ
w-smw b-h b-ʕdtʔ
CONJ-置く.PF.3PLM に-3SGF に-教会
dndbryh **mry ʔbʔ** ʔrkdyqwn
d-ndbr-yh **mry ʔbʔ** ʔrkdyqwn
REL-導く.IMPF.3SGM-3SGF.OBJ **PN** 大助祭
mn qṭyspwn
mn qṭyspwn
から PN
「彼らはその人が指導することになる教会にクテシフォン出身の大助祭 Abhā 師を置いた」

(『匿名年代記』22: 12-13)

b. 標識あり [○]

wʔqymw	**lhwrmyzd**	mn	kwrsyh
w-ʔqymw	**l-hwrmyzd**	mn	kwrsy-h
CONJ-立たせる.PF.3PLM	**OM-PN**	から	玉座-3SGM.GEN

「彼らはホルミズドを玉座から引きずり下ろした」

(『匿名年代記』15: 8)

(5-5) H: DF の場合

a. 標識なし

dlgbrʔ	dbʕyrtnʔyt	mzdwg	
d-l-gbrʔ	d-bʕyrtnʔyt	mzdwg	
C-に-男	REL-動物的に	結婚する.ActPtc.SGM	
lʔ	yhb	ʔnʔ	**brty**
lʔ	yhb	ʔnʔ	**brt-y**
NEG	与える.ActPtc.SGM	AUX.1SG	**娘-1SG.GEN**

「私は獣のようなやり方で結婚をする男に我が娘を与えはしないと (伝えた)」

(『匿名年代記』19: 27-28)

b. 標識あり [○]

waḥzāy	**ldayānā**
wa-ḥzā-y	**l-dayānā**
CONJ-見る.PF.3SGM-3SGM.OBJ	**OM-裁き手**

「彼 (投獄されていた牧者) は裁き手を見た」

(『カルカー』520: 16)

(5-6) H: Spec の場合

a. 標識なし

wʕbd	**tryn**	**rby ḥylʔ**
w-ʕbd	**tryn**	**rby ḥylʔ**
CONJ-任命する.PF.3SGM	二人	**軍団長.PL**

wšdr	lmʕrbʔ
w-šdr	l-mʕrbʔ
CONJ-送る.PF.3SGM	へ-西

「二人の軍団長を任命し、西へ送った」

(『匿名年代記』25: 2)

b. 標識あり [○]

wdebrat	**latrēn**	**bnēh**
w-debrat	**la-trēn**	**bnē-h**
CONJ-連れて行く.PF.3SGF	**OM-二人**	こども**.PL-3SGF.GEN**
ʕammāh		
ʕamm-āh		
ともに-3SGF		

「彼女は二人の子供を連れて行った」

(『カルカー』529: 6)

(5-7) I: PN の場合

a. 標識なし

ḥad	men	malkē	mlek	**pāres**
ḥad	men	malkē	mlek	**pāres**
一人	から	王.PL	支配する.PF.3SGM	**PN**

「王たちのうちの一人がペルシアを支配した」

(『カルカー』510: 5)

b. 標識あり [○]

wkbšw	**lmrdʔ**	**wlʔmd**
w-kbšw	**l-mrdʔ**	**w-l-ʔmd**
CONJ-制圧する.PF.3PLM	**OM-PN**	**CONJ-OM-PN**

wlmyprqṭ	**wlʔwrhy**
w-l-myprqṭ	**w-l-ʔwrhy**
CONJ-OM-PN	**CONJ-OM-PN**

「彼らはマルデー、アミード、マイペルカト、エデッサの町を制圧した」

(『匿名年代記』25: 2-3)

(5-8) H: NSpec の場合

a. 標識なし [○]

šaddar	ʕlayhon	**paylē**
šaddar	ʕlay-hon	**paylē**
送る.PF.3PLM	対して-3PLM	**歩兵.PL**

「彼らは彼らに対して歩兵たちを送った」

(『カルカー』526: 19)

b. 標識あり

wtalmed		waʕmed
w-talmed		w-aʕmed
CONJ-教化する.PF.3SGM		CONJ-洗礼する.PF.3SGM
wā	**lsaggīyē**	
wā	**l-saggīyē**	
AUX.3SGM	**OM-大勢**	

「彼は大勢の人々を教化し、洗礼した」

(『カルカー』516: 6-7)

(5-9) I: DF の場合

a. 標識なし [○]

hānā	karkā	rabbā	sām	**šatēsāw**
hānā	karkā	rabbā	sām	**šatēs-āw**
この	城塞	大きな	置く.PF.3SGM	**基礎-3SGM.GEN**
malkā	dātūr			
malkā	d-ātūr			
王	GEN-PN			

「この偉大な城塞/カルカー[51]はアッシリアの王がその基礎を築いた」

(『カルカー』507: 3)

b. 標識あり

wkad	ḥzāw	da**lṣebyānhōn**
w-kad	ḥzāw	da-**l-ṣebyān-hōn**
CONJ-CONJ	見る.PF.3PLM	C-**OM-望み-3PLM.GEN**
lā	šālem	
lā	šālem	
NEG	完成させる.ActPtc.SGM	

「彼が彼らの望みを成し遂げないのを見ると、」

(『カルカー』515: 2)

[51] karkā は「城塞」を表す一般名詞であるとともに、この資料『カルカー』の主題となっている都市の名前でもある。

(5-10) I: Spec の場合

a. 標識なし [○]

wabnā	tammān	**mdīttā**
wa-bnā	tammān	**mdīttā**
CONJ-建てる.PF.3SGM	そこに	**町**
waqrāh		ʕal šmēh
wa-qrā-h		ʕal šm-ēh
CONJ-呼ぶ.PF.3SGM-3SGF.OBJ		名にちなんで-3SGM.GEN
šahrestān yazdgard		
šahrestān yazdgard		
PN		

「彼はそこに<u>町を</u>建てて、それを彼の名にちなんでシャフレスターン・ヤズドガルドと呼んだ」

(『カルカー』518: 18-19)

b. 標識あり

(wtalmed		waʕmed		
(w-talmed		w-aʕmed		
(CONJ-教化する.PF.3SGM		CONJ-洗礼する.PF.3SGM		
wā...)	wʕam	hālēn	wāp	**laqrītā**
wā...)	w-ʕam	hālēn	w-āp	**la-qrītā**
AUX.3SGM...)	CONJ-ともに	かれら	CONJ-も	**OM-村**
dtīšīn	metqaryā			
d-tīšīn	metqaryā			
REL-PN	呼ばれる.AtcPtc.3SGF			

「そして彼らとともに<u>ティーシーンと呼ばれる村</u>も (彼は教化し、洗礼した)」

(『カルカー』516: 6-7)

(5-11) I: NSpec の場合 すべて標識なし

wansab	paygā	ḥad	**saypā**
wa-nsab	paygā	ḥad	**saypā**
CONJ-取る.PF.3SGM	兵士	一	**剣**

「一人の兵士が<u>剣を</u>取った」

(『ヤアコーブ』139: 12-13)

5.4.3. 仮説は東方言に拡大できるか

第 4 章では、第 3 章で提案した目的語標識の出現に関する仮説が西方言に拡大できるものと主張した。本項ではこの議論を発展させて、東方言に対してもそれが当てはまるかを検証する。

初めに第 3 章で提案した仮説を確認しておく。第 3 章では『偽ヨシュアの年代記』というシリア語西方言で記された資料を元に、以下の仮説を提案した。すなわち、①シリア語では他動詞の目的語は裸で現れる ＝ 目的語標識 l-を伴わないことが普通であり、場合よっては標識を用いて示されることもある、②目的語標識の出現には目的語となる名詞句の有生性・定性という 2 つの意味特性が関与している、③目的語標識は目的語となる名詞句が有生性・定性の二次元階層において上位にある場合にはより現れやすく、下位にある場合にはより現れにくくなる。第 4 章ではこれらの仮説が『偽ヨシュア』だけに当てはまるものではなく、西方言に拡大・適用することが可能であると主張した。以下ここでは①～③それぞれについて、ここまで述べてきた東方言での観察と照らし合わせていく。

表 5-17 は西方言 3 資料（『偽ヨシュア』『シメオン』『東方』）と東方言 4 資料それぞれの範囲で目的語となる名詞がどの程度標識を伴っていたかを示したものである。両方言を比較すると、東方言で若干標識の出現率が高くなっているが、いずれにおいても標識の現れない用例が現れた用例よりも多くなっている。標識の現れた用例がより多かった東方言でも標識の現れなかった用例は現れた用例の 2 倍程度確認された。このことから、東西両方言について、目的語標識は現れないほうが普通であり、場合によって標識が現れることもある、という観察が当てはまると言える。

また両方言の差については χ^2 検定を行ったところ、有意差は認められなかった（$\chi^2(1) = 2.94, p > .05$）。これはすなわち「東方言で若干標識の出現率が高くなっている」という上の指摘が単なる偶然の産物である可能性が否定できないということである。

表 5-17 東西両方言の目的語標示

	標識なし	標識あり	合計
西方言 3 資料	841	348	1189
	70.7%	29.3%	100.0%
東方言 4 資料	300	152	452
	66.4%	33.6%	100.0%

続けて②と③の検討を行う。これまで述べてきたように、東方言のデータについても西方言同様に標識の出現には有生性と定性の双方が関与している様子が

見て取れた。このことを確認するために、東西方言それぞれの H: DF、H: NSpec、I: DF、I: NSpec の 4 条件における標識の出現率を見ていきたい。表 5-18 には西方言の、表 5-19 には東方言のデータをそれぞれ示す。

表 5-18 目的語標識の出現/非出現と有生性・定性 (抜粋・西方言)

	標識なし	標識あり	合計
H: DF	34	115	149
	22.8%	77.2%	100.0%
H:NSpec	55	35	90
	61.1%	38.9%	100.0%
I: DF	264	107	371
	71.2%	28.8%	100.0%
I:NSpec	371	11	382
	97.1%	2.9%	100.0%

表 5-19 目的語標識の出現/非出現と有生性・定性 (抜粋・東方言)

	標識なし	標識あり	合計
H: DF	8	38	46
	17.4%	82.6%	100.0%
H:NSpec	33	7	40
	82.5%	17.5%	100.0%
I: DF	88	51	139
	63.3%	36.7%	100.0%
I:NSpec	138	0	138
	100.0%	0.0%	100.0%

まず西方言について、有生性の条件を揃えた H: DF (標識出現率 77.2%) – H: NSpec (38.9%) の組み合わせと I: DF (28.8%) – I: NSpec (2.9%) の組み合わせをそれぞれ見ると、いずれの場合にも定性の高い DF のほうが標識の現れた例が多くなっている。これらについて χ^2 検定を行ったところ、いずれも有意差が認められた (χ^2 (1) = 35.20, $p < .05$, χ^2 (1) = 95.99, $p < .05$)。また定性の条件を揃えた H: DF – I: DF、H: NSpec – I: NSpec の組み合わせについてもそれぞれ検討すると、有生性の高い H で標識の現れた用例の割合が多くなることが指摘できる。こちらについても χ^2 検定を行った結果、ともに有意差が確認された (χ^2 (1) = 101.53, $p < .05$, χ^2 (1) = 107.38, $p < .05$)。

他方東方言では上で言及した通り、有生性を揃えた H: DF (82.6%) – H: NSpec (17.5%)、 I: DF (36.7%) – I: NSpec (0.0%)、定性を揃えた H: DF – I: DF、H: NSpec – I: NSpec どの組み合わせにおいても定性/有生性が高い方で標識出現率も高くなっている。既に述べたように χ^2 検定の結果いずれの組み合わせにおいても有意差が確認されている (χ^2 (1) = 36.36, p < .05, χ^2 (1) = 62.06, p < .05, χ^2 (1) = 29.19, p < .05, χ^2 (1) = 25.14, p < .05)。このことから、東方言についても西方言同様、②③の説明が当てはまると判断してよいと考えられる。東西両方言のこの様子をそれぞれ図示すると図 4-2、5-1 のようになる。

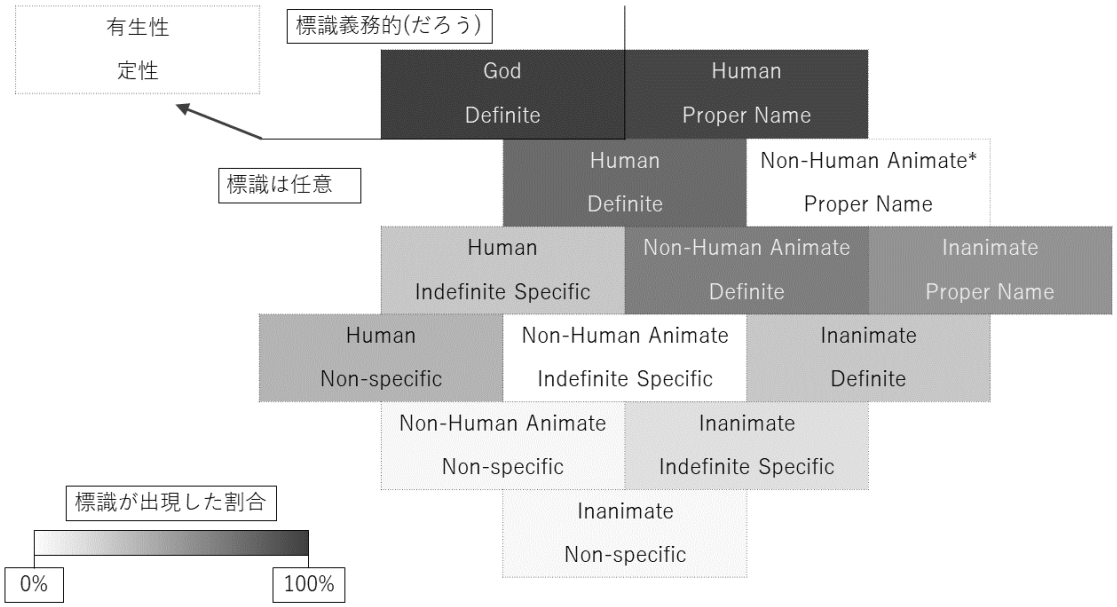

図 4-2 (再掲) 西方言における目的語標識の出現と有生性・定性

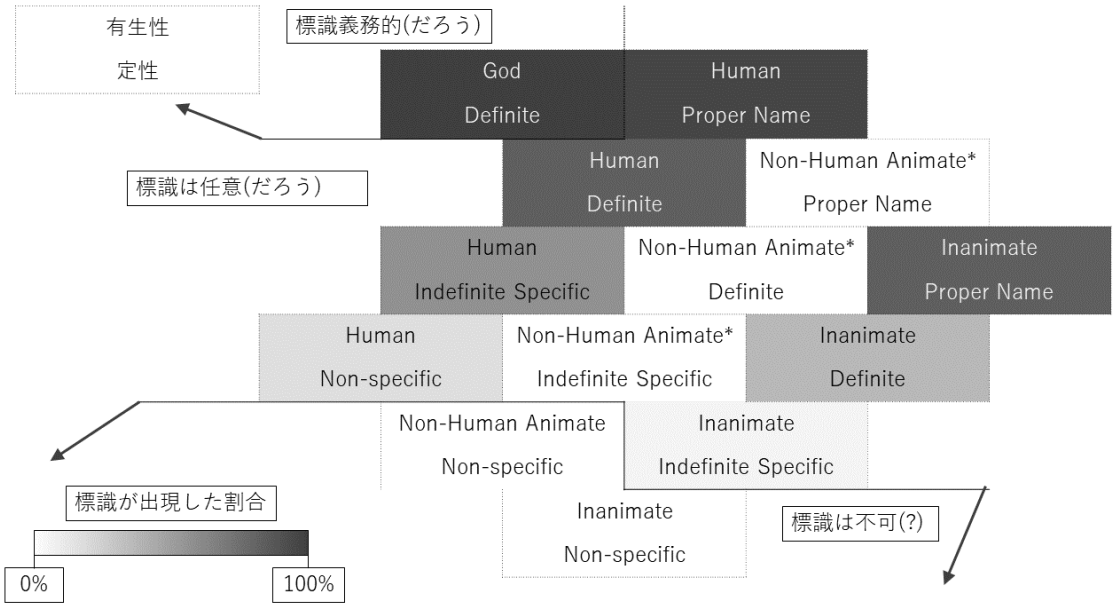

図 5-1 (再掲) 東方言 4 資料における目的語標識の出現/非出現と有生性・定性

ところでこれらの図を比較すると、西方言の H: Spec など、ここでの議論に反するような様子もあることが分かる。しかしこの条件に当てはまる用例は 17 例と数の多いものではなく、偶然生じた偏りを反映している可能性も棄却できない。現に H: Spec における標識ありの用例が占める割合の東西方言差について χ^2 検定を行ったところ、有意差は認められなかった (χ^2 (1) = 2.92, p > .05)。また表 5-18、5-19 に示した範囲でも、それぞれの条件で標識が出現した用例の割合には方言間で差があるように見える。しかし定性が DF となる条件において両方言を比較して χ^2 検定を行ったところ、いずれも有意差は認められなかった (H: DF で χ^2 (1) = 0.61, p > .05, I: DF で χ^2 (1) = 2.91, p > .05)。他方定性が NSpec の場合には H: NSpec、I: NSpec ともに有意差が認められた (H: NSpec で χ^2 (1) = 5.79, p < .05, I: NSpec で χ^2 (1) = 4.06, p < .05)。この差が何を示すのか、という点については今後の課題ということになる。

以上の議論から、東西方言における目的語標識の出現/非出現に関しては細部には異同も見受けられるものの、しかし全体的な傾向に着目すると、「目的語標識は有生性・定性の二次元階層で上位にある目的語に対して用いられやすく、下位のものほど用いられにくくなる」という第 3 章で提案した仮説は東西両方言に共通して当てはまるものである、と言うことができる。

また、以上のような全体的な傾向に関することの他にもう一点東西両方言に共通して観察されたのが、目的語が神を表す場合には、標識が必ず出現していた、ということである。しかしこの条件に当てはまる用例は東西方言を合わせても

12 例しかないため、今後反例が見つかる可能性もあることは言い添えておきたい。

5.5. 本章のまとめ

以上、本章では『カルカー・ド・ベート・スロークとその地の殉教者達の歴史』『祭司アイタイラーハーと助祭ハプサイの殉教』『司祭ヤアコーブと助祭アーザードの殉教』『匿名筆者によるササン朝末の年代記』という 4 つのシリア語東方言の地域で書かれた資料を用いて、第 3 章で提案し、第 4 章で西方言にも当てはまることを示した「シリア語では他動詞の目的語は裸で現れる ＝ 目的語標識 l-を伴わないことが普通であり、場合によっては標識を用いて示されることもある」「目的語標識の出現には目的語名詞の有生性と定性の 2 つの意味特性が関与しており、標識は有生性・定性の二次元階層で上位にある目的語に対して用いられやすく、下位のものほど用いられにくくなる」という仮説が東方言にも当てはまるかどうか検証した。その結果、どちらの記述も東方言のデータとは矛盾しないことが示された。本章で示したデータからは、西方言と同様に東方言でも、目的語名詞は標識を伴わずに出現するのが普通であり、標識を伴っていた用例は全体の 3 割程度であったことが確認できた。また目的語標識が出現した用例の占める割合が、目的語となる名詞句が有生性・定性の二次元階層でより上位に位置する場合に高くなり、下位になるにつれてその割合も低下していく、ということも示された。他方で差異が観察されなかったわけではなく、例えば H: NSpec の場合には、標識出現率について東西方言の間で有意な差が確認された。これ以外の条件における差異は、その有生性・定性の条件に当てはまる用例が少ないために、その差の意義を十分に論じることができないものも多い。そのために細部については今後、東西の方言差が観察される可能性も否定しきれない。しかしいずれにしても、全体的な傾向として「目的語となる名詞句が有生性・定性の二次元階層でより上位に位置する場合に高くなり、下位になるにつれてその割合も低下していく」ということは明らかであり、この記述が東西両方言に拡大・適用できることについては疑いが無い。

第 6 章 結論と今後の課題

6.1. 結論

本論文ではシリア語の Differential Object Marking の用例を実際の資料から収集し、目的語名詞の有生性・定性という観点から、統計的手法を用いて実証的に分析した。第 3 章では『偽ヨシュアの年代記』という西方言で書かれたと考えられる 6 世紀初頭の資料を使って、他動詞の直接目的語がどのように表されているかについて調査した。その結果、他動詞の直接目的語はそのほとんどが標識を伴わずに現れていることと、従属部標示型の標識と主要部標示型の標識はそれぞれが独立した機序によって現れたり現れなかったりしていることが明らかになった。また従属部標示型の標識 l-に焦点を当てて、その出現/非出現と目的語名詞の有生性・定性との間の関連を検討した。その結果、確認された目的語名詞句のうち 2/3 ほどはこの標識を伴わない用例であったこと、標識は目的語名詞句が有生性・定性の二次元階層で上位にあるものがこれを伴いやすく、下位のものでは現れにくくなる、ということを見た。

第 4 章では、この『偽ヨシュア』での観察が他の西方言による資料についても言えるかどうかを検証した。その結果は『偽ヨシュア』同様、目的語名詞句の有生性・定性が高いほど標識が現れやすいというものであった。ここから第 3 章で提示した仮説は西方言の他の資料にも当てはまるものであることを主張した。

第 5 章では議論を東方言に拡大した。東方言で書かれた 4 資料を用いてデータを収集・分析したところ、ここでも西方言同様、目的語名詞句が有生性・定性の二次元階層で上位にある場合には標識が現れやすく、下位の場合には現れにくい、ということが示された。ここから東方言でも第 3 章の仮説は当てはまることを主張した。

以下表 6-1～2 に、本研究で利用した東西方言の全資料から確認された目的語名詞句の用例数を示しておく。また図 6-1 にはこの範囲で目的語標識を伴う用例の割合を、目的語名詞句の有生性・定性ごとに示したものである。この結果からも、ここまでの章で見てきたように、目的語名詞句が有生性・定性の二次元階層で上位にあるときには標識が現れやすく、下位になるほど標識を伴う用例の割合が低下していく様子が見て取れる。この結果について、用例数が少なく信頼性の低い God と NHA の用例を除いた 8 条件の間で χ^2 検定を行ったところ、有意差が確認された (χ^2 (7) = 578.90, $p < .05$)。

表 6-1 シリア語の目的語標示 (全資料合算)

標識なし	標識あり	合計
1141	500	1641
69.5%	30.5%	100.0%

表 6-2 標識の有無と有生性・定性 (全資料合算)

	標識なし	標識あり	合計
God:DF	0	11	11
	0.0%	100.0%	100.0%
H:PN	2	63	65
	3.1%	96.9%	100.0%
H:DF	42	153	195
	21.5%	78.5%	100.0%
NHA:PN	0	0	0
	-	-	-
H:Spec	21	17	38
	55.3%	44.7%	100.0%
NHA:DF	3	6	9
	33.3%	66.7%	100.0%
I:PN	9	19	28
	32.1%	67.9%	100.0%
H:NSpec	88	42	130
	67.7%	32.3%	100.0%
NHA:Spec	4	0	4
	100.0%	0.0%	100.0%
I:DF	352	158	510
	69.0%	31.0%	100.0%
NHA:NSpec	25	1	26
	96.2%	3.8%	100.0%
I:Spec	61	9	70
	87.1%	12.9%	100.0%
I:NSpec	509	11	520
	97.9%	2.1%	100.0%

	標識なし	標識あり	合計
合計	1116	490	1606
	69.5%	30.5%	100.0%

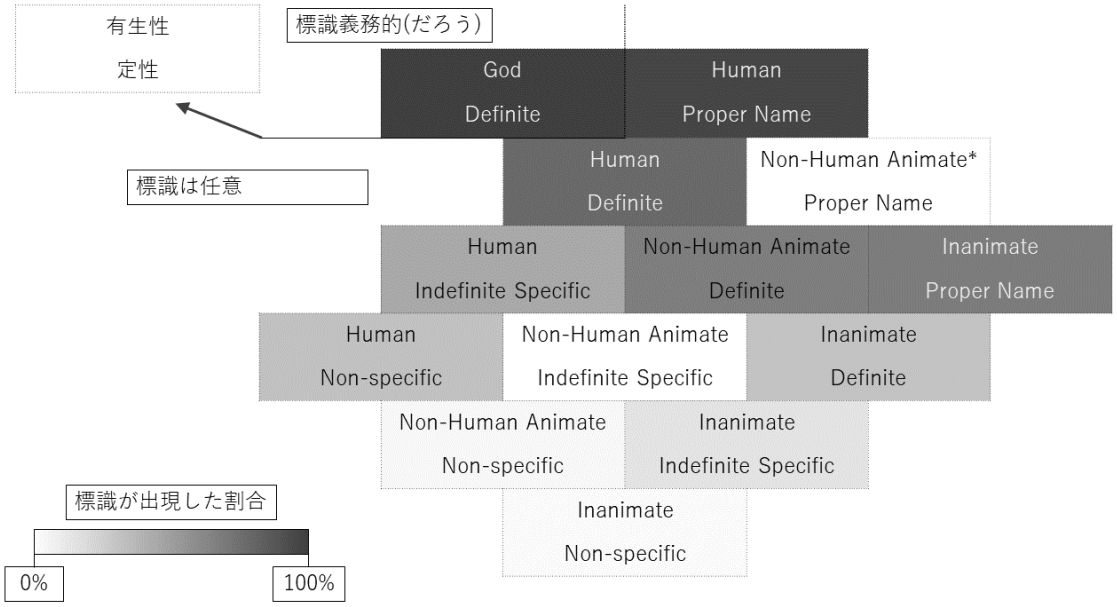

図 6-1 シリア語における目的語標識の出現/非出現と目的語名詞句の有生性・定性

ここまでの議論から、第 3 章で実際のテキストに現れた用例数に基づいて提案した「従属部標示型の標識は、目的語名詞句が有生性・定性の二次元階層で上位にあるものがこれを伴いやすく、下位のものでは現れにくい」という仮説は、4〜7 世紀のシリア語東西両方言に当てはまる、ということを筆者は主張する。また第 3 章では、この上の仮説で従属部標示型標識の出現は説明できる一方で、主要部標示型標識の出現は説明できないということも明らかになった。ここから、これら 2 種類の標識の出現/非出現はそれぞれ異なる要因に左右される、独立した 2 つの現象として捉えるべきであることを筆者は主張する。これらは、従来のシリア語研究では取り立てて指摘されてこなかった新しい知見である。

本研究による通言語的な DOM 研究に対する貢献としては、次の 2 点が挙げられる。第一に、実証的なデータに基づいて Aissen (2003) の学説を補強するというものがある。Aissen (2003) が述べているように、多くの言語において DOM は、有生性または定性、あるいはこの 2 つを組み合わせた二次元階層において上位にある目的語に対して標識が出現しやすく、下位にあるものは無標で現れやすい、という傾向を示す。第 2 章で述べたように、スペイン語では有生性の高い人

間が標識を伴う一方で、これの低い無生物は無標で現れる。またペルシア語では標識を伴うのは目的語が定である場合だけで、不定の目的語は標識を伴わない。ヒンディー語では、標識は目的語が人間の場合には定性によらず現れうるが、他方無生物の場合には定である場合に限定される。本研究で明らかになったシリア語における標識の出現もまた、これらの言語と同様に目的語名詞の有生性・定性の二次元階層における高低によって説明することが可能であり、従って Aissen (2003) の学説を補強するものである。

第二に、従属部標示型の標識が関与する狭義の DOM と主要部標示型の標識が関与する DOA の双方を持つ言語に、新しい類型のものがあることを示すというものがある。シリア語では、従属部に現れる目的語標識と主要部に現れる目的語標識の 2 種類の標識が、それぞれ現れたり現れなかったりする。本研究はこれら 2 種類の標識について、その出現が別々の原理に基づいていることを明らかにした。他方、シリア語と同様に狭義の DOM と DOA の双方を持つ北東現代アラム語テルケペ方言やティグリニャ語では、2 種類の標識の出現が同じ原理によって説明される (Coghill 2014, Kievit and Kievit 2009)。このことから、従属部標示型の標識と主要部標示型の標識とがそれぞれ出現したりしなかったりする言語について、これがさらに 2 つのタイプに分けられる可能性が本研究の結果から指摘できる。この 2 つのタイプとは、2 種類の標識が同じ要因によって出現を左右されるもの (北東現代アラム語テルケペ方言、ティグリニャ語など) と、それぞれが異なる要因によって出現を左右されるもの (シリア語) である。このように、本研究は DOM を持つ言語の分類に対して、新しい類型があることを提案する。

6.2. 今後の課題

6.2.1. DOM の記述に関する課題

本研究では、シリア語が話し言葉としても用いられていたと考えられる 4 世紀から 7 世紀までの間に書かれたと考えられる資料を用いて用例を収集した。これは話し言葉としてのシリア語が生きていた時代の資料が、それ以降の資料より言語の資料として信頼性が高いと考えられるためである。しかしシリア語は話し言葉の地位を失ったあとも、13〜14 世紀ごろまでは書き言葉として生産的に用いられ続けた言語である (Healey 2011: 643-644)。このもっぱら書き言葉として用いられた 7 世紀から 13〜14 世紀の間のシリア語でも本研究で提示した説明が当てはまるかどうかは、改めて検討する価値がある問題である。

上の表 6-2 には、本研究で用いた全資料から収集した目的語名詞句について、これをその有生性・定性によって分類した結果を標識の有無とともに示した。これを見ると明らかなように、本研究で用いたデータには、有生性・定性によって

データ数に大きな偏りがある。用例数が最も多く確認されたのは無生物 I : 不定不特定 NSpec の 520 例で、これは利用した全目的語名詞句の 32.4%に相当する。またその次に用例数が多かったのは無生物 I: 定 DF の 510 例で、31.8%にあたる。このように確認された目的語名詞句の 2/3 がこれら 2 条件のいずれかのものであったことと対照的に、人間以外の動物 NHA の用例はごくわずか (2.4%) しか確認されず、特に名前の付けられた動物が目的語となる NHA: PN の用例は一例も確認できなかった。このように有生性・定性の条件によっては用例数が少なく、そのような場合には、たまたま確認された数例のために標識の出現した割合が大きく変動することも考えられる。これはすなわち、用例数の少ない条件では標識の出現率に対する信頼性も低くなってしまう、ということである。この用例数の偏りのために、本論文での議論は NHA の用例をほぼ無視せざるを得なかった。また不定特定 Spec の用例も定 DF、不定不特定 NSpec のものに比べるとかなり少なく、そのために定/不定と DOM との関係については考察できた一方で、特定/不特定との関係については十分に考察できなかった。従って DOM に定性が関与していることまでは明らかにできたものの、DF/Spec/NSpec の区別に関わる 2 特性 (すなわち同定可能性と特定性) のいずれが標識の出現を左右しているのか、あるいは２つの要素が関わった結果「定性の階層に沿うように標識の出現率も上下する」というデータが得られたのか、という問題については未解決である。この課題を解決するためには、今後も様々な資料からデータを収集していくことが必要である。

また本研究では、有生性・定性の二次元階層で上位のものほど標識が現れやすくなるということを明らかにした一方で、「このような場合には必ず標識が現れる/現れない」という条件が (11 例しか見られなかった目的語が神である場合と、4 例しか確認されなかった NHA: Spec の場合を除いて) 見られないことも示した。ここからは 2 つの可能性が考えられる。1 つは有生性・定性によって標識を用いる/用いないほうが好まれる、ということはあるが最終的な選択については話者/テキストの著者次第である、というものである。もう 1 つは有生性・定性以外の要素が DOM に関与しているというものである。本論文の議論では名詞句の有生性・定性以外の要素についてはほとんど触れていない。これはシリア語の DOM に関する先行研究が特に定性に触れていたこと、及び多くの言語で定性か有生性のいずれか、あるいはその双方がこの現象に関与していることから、目的語の有生性・定性が第一に注目すべき点であろうと判断したことによる。しかしそのことは、他の要因が標識の出現/非出現に関与している可能性を棄却するものではない。有生性・定性以外の要素がシリア語の DOM に関わっている可能性は今後検討すべき課題である。

この「他の要因」として考えうるものとしては、例えば情報構造 (information

structure) が挙げられる。この点については、第 2 章で見たグアラニー語で、目的語標示の出現にその名詞句の主題性 (topicality) が関与しているということが参考になる。また、シリア語と同じくアラム語の変種である北東現代アラム語テルケペ方言でも、目的語となる名詞句が主題であるかどうかということが標識の出現に関わっていることが報告されている (Coghill 2014)。従って今後は主題 (topic) や焦点 (focus) といった情報構造に着目した分析を行う必要がある。

加えて、今後の分析にあたっては動詞に着目する必要があることも指摘できる。本研究では Aissen (2003) などを参考に、目的語となる名詞句の意味特性に注目した分析を行った。しかしながら DOM という現象は名詞のみの問題ではなく、他動詞とその目的語となる名詞句との間の関係の示し方に関わる問題である。従って名詞に関わる特徴だけを考慮していても十分な記述とは言えない可能性がある。そのため今後は動詞の意味や他動詞性に着目した分析も検討する必要がある[52]。

6.2.2. シリア語の Differential Object Agreement

本研究では他動詞の直接目的語を示す従属部標示型の標識 l-の出現/非出現について議論を行ってきた。しかし第 1 章、第 2 章で示したように、シリア語で目的語の標示に関与する標識にはこの l-の他に、動詞に付加される主要部標示型の標識も存在する (6-1)。こちらも現れたり現れなかったりするもので、Differential Object Agreement (DOA)、あるいは Differential Object Indexation (DOI) と呼ばれる現象の例だと言える。

(6-1) シリア語 DOA の例 (cf. Nöldeke 1898: 218)

a.	bnā	baytā
	建てる.PF.3SGM	家
b.	bnā-**y**	baytā
	建てる.PF.3SGM-**3SGM.OBJ**	家

このタイプの標識が出現する条件については第 3 章で、これが従属部標示型の標識とは異なる原理に基づいて出現しているということを明らかにした。6.1. で述べたように従属部標示型の標識の出現には有生性と定性の 2 つの意味特性が関与するが、他方主要部標示型の標識の出現には有生性が関与しないことが第 3 章の議論では示された。また、主要部標示型標識の出現は目的語が定である場合に限られるということも明らかになった。しかしその一方で、標識が出現

[52] この問題については Muraoka (1979) が参考になる。詳しくは注 7 を参照。

しうる場合においても、これが現れた用例が多数派になることが無いということも本研究の結果からは示された。このことから、目的語名詞が定であるということがこの標識の出現/非出現を決める決定的な要素であると判断することは難しい。しかし既に上でも述べたように、本研究では目的語となる名詞句の有生性・定性に焦点を当てたために、他の意味特性などの要素についてはほとんど検討していない。そのため主要部標示型の標識が出現する条件が何であるか、ということについてはこれを明らかにはできなかった。

しかしながら、現時点においてもこの主要部標示型標識の出現条件について、指摘できることが無いわけではない。第 3 章では、確認された目的語名詞の用例を 2 種類の標識それぞれの出現に応じて 4 パターンに分類した。その結果から、主要部標示型の標識が出現した用例のほとんどは従属部標示型の l-と共起していることが指摘された。これはすなわち、従属部標示型の標識に比べて主要部標示型の標識が出現しうる範囲は狭いということを示唆する。

また、この主要部標示型の標識が出現する条件については、Khan (1984) が「テキスト的に強調されている (textually prominent)」かどうかという視点を提示した。しかしながら第 3 章で論じたように、この「テキスト的に強調されている」という表現が指す内容については問題もある。Coghill (2014) はこれを「主題性によって条件付けられたものと理解しうる ("...it could equally be understood as conditioned by topicality", Coghill 2014: 358)」としている。この説明は (3-12) のような例には当てはまると言えよう。しかしこの「主題性」を「主題であるかどうか」と捉えると、この理解では (3-13) のような例は説明出来ない。(6-2) [53] には『偽ヨシュア』から確認された、主要部標示型の標識が単独で現れた用例を示す。このうち (6-2de) の 2 例は、目的語がその文の主題となっていて、かつその前に現れたものと対比されている用例である。他方でそれ以外の 3 例については目的語名詞句が主題であるとは考えにくい用例である。このことから、Coghill (2014) の述べた topicality との関わりについては疑問符を付けざるを得ない。

ところで (6-2) の 5 例を見ると、以下のような共通項が指摘できる。 ①目的語名詞句が動詞に対して先行する語順で、文頭に近い位置にある ②関係節などの要素がその間に挟まっている ものが多く見られた。このことからは、少なくとも主要部標示型標識が単独で現れる場合についてはむしろ、①②のような統語的な特徴がその選択の動機になっていると考えるほうが妥当だろう[54]。

---

[53] 例文には前後の文脈を付した。英訳は Trombley & Watt (2011) から。

[54] 主要部標示型の標識と従属部標示型の標識が共起する場合については、この説明は当たらない (cf. 3-13, 3-14b, 3-15b)。

(6-2)

a. Like Jonathan, the true friend, you have tied yourself to me in love, but the bonding of Jonathan's soul with David's, after seeing that the giant was killed by his hand and the (Israelite) army was saved, was not as great as this,. because he loved (David) for his noble deeds, but you have loved me more than yourself although you have not seen anything noble in me. Neither is Jonathan's deliverance of David from death at the hands of Saul worthy of admiration on the scale of this (graciousness) of yours,

mṭl	dʕdkyl	**mdm**	**d**ḥyb
mṭl	d-ʕdkyl	**mdm**	**d**-ḥyb
なぜなら	C-単に	もの	**REL**-借りがある.3SGM

hwʔ	lh	prʕ**h**
hwʔ	l-h	prʕ-**h**
COP.PST.3SGM	に-3SGM	報いる.PF.3SGM-**3SGM.OBJ**

「なぜなら彼は彼に負うところのものに報いたにすぎないのだから」

(『偽ヨシュア』236: 15-16 , Trombley and Watt 2011:2)

b. As these things have astonished you also by their multiplicity, you have commissioned me to write them down in words of sadness and sorrow which will impress readers and listeners.

wydʕnʔ	d**hdʔ**
w-ydʕ=nʔ	d-**hdʔ**
CONJ-知る.ActPtc.SG=AUX.1SG	C-これ

bṭynk	hw
b-ṭyn-k	hw
において-熱意-2SGM	この

dʕl	špyrtʔ	ʔmrt**h**
d-ʕl	špyrtʔ	ʔmrt-**h**
REL-について	真実	言う.PF.2SGM-**3SGF.OBJ**

「私は知っている、あなたがその真実に対する熱意によってこれを言ったということを」

(『偽ヨシュア』238: 16-17)

so that there should be remorse in those who hear them, and that they should be brought to repentance.

(Trombley and Watt 2011:4)

c. ...Peroz then made a treaty with the Huns that he would not cross the border into their territory again to make war, but like Zedekiah he went back on his agreement, went to war, and like him was delivered into the hands of his enemies. His entire army was routed and put to flight, and he himself captured alive. Boastfully promising to pay for his life a ransom of thirty mule-loads of drachmas, he sent the order for it back to his own realm but could hardly muster twenty loads,

klh	gyr	**gzʔ**	**d**mlkʔ	dqdmwhy
kl-h	gyr	**gzʔ**	**d**-mlkʔ	d-qdm-why
すべて-3SGM	なぜなら	**宝**	**GEN-**王	REL-前-3SGM
spq**h**			hwʔ	
spq-**h**			hwʔ	
使い尽くす.PF.3SGM-**3SGM.OBJ**			AUX.3SGM	
bqrbʔ	qdmyʔ			
b-qrbʔ	qdmyʔ			
で-戦争.PL	以前の.PL			

「なぜなら彼以前の王の<u>宝すべてを</u>彼は先の緒戦で使い尽くしてしまっていたから」

(『偽ヨシュア』243: 21-22)

In place of the remaining ten loads he gave them his son Kawad as a pledge and hostage until he should deliver (the money), and for the second time he made a treaty with them that he would not make war again.

(Trombley and Watt 2011:10-11)

d. Because the locusts had consumed the entire crop, leaving no food or nourishment for people or animals, many left their own districts and moved to other regions of the north and west....Many villages and hamlets were emptied of people, but (the people) did not [escape] punishment, not even those who went to distant regions. What is written of the Israelite people 'Wherever they went out, the hand of the Lord was against them for evil', similarly applied to them. The pestilence overtook them in the districts to which they had gone,

w-ʔp	**ʔylyn**	**d**-ʕlw	lʔwrhy
w-ʔp	**ʔylyn**	**d**-ʕlw	l-ʔwrhy
CONJ-また	**これらのもの**	**REL**-入る.PF.3PLM	に-PN

twb　mwtnʔ　ʔdrk　**ʔnwn**
twb　mwtnʔ　ʔdrk　**ʔnwn**
また　疫病　取る.PF.3SGM　**3PLM.OBJ**
「またエデッサに入った者たちも疫病が襲った (lit. 取った/たどり着いた)」
(『偽ヨシュア』265: 16-17, Trombley and Watt 2011: 38-39)

e. ...Thus Edessa had a little peace, ...Governor Eulogius was diligent in rebuilding it, [and the emperor gave] him two hundred pounds for the expenses of reconstruction. .....The emperor also gave twenty pounds to the bishop for expenses and the renewal of the wall, while Urbicius the eunuch (gave him) ten pounds to build a martyrion to the blessed Mary.

mšḥʔ　dyn　**d**mtyhb　hwʔ
mšḥʔ　dyn　**d**-mtyhb　hwʔ
油　そして　**REL**-与えられる.PF.3SGM　AUX.3SGM
lbyt　shdwtʔ　wldyrtʔ
l-byt　shdwtʔ　w-l-dyrtʔ
に-礼拝堂.PL　CONJ-に-修道院.PL
<中略>
šql**h**　mnhwn　hw　hgmwnʔ
šql-**h**　mn-hwn　hw　hgmwnʔ
取る.PF.3SGM-**3SGM.OBJ**　から-3PLM　かれ　行政官
「しかし礼拝堂や修道院に与えられた <中略> 油についてはこれをこの行政官がそれらから取った」
(『偽ヨシュア』308: 11-14, Trombley and Watt 2011: 105-107)

このように、主要部標示型の標識がいついかなる場合に現れるのか、という点については未だ明らかでないことが多い。目的語の主題性がこの標識の出現に関与しているように思われる用例があるのは事実であるが (cf. 3-12, 6-4de)、他方で目的語が主題であるとは思えない用例も観察される (cf. 6-4abc)。ただしここでの議論では、Lambrecht (1994) のように主題かそうでないかという二項的なものとして主題を捉えており、そのため第 2 章で取り上げた Shain (2009) のように、段階的なものとして主題を捉えた場合に異なる結論が導かれる可能性は十分にありうるものである。

しかしこの主要部標示型標識の出現をコントロールしている要素が何である

にせよ、それが従属部標示型標識の出現をコントロールする要素とは異なっていることはほぼ確実である。従って本稿では、これら 2 種類の標識がそれぞれ現れたり現れなかったりする現象は、従属部標示型の標識が現れたり現れなかったりする (狭義の) DOM と、主要部標示型の標識が現れたり現れなかったりする DOA の､2 つの異なる現象として理解すべきであるということを主張する。

参照文献

Aissen, Judith. 2003. “Differential Object Marking: Iconicity vs. Economy.” *Natural Language & Linguistic Theory* 21(3): 435-483.

Akopian, Arman. 2017. *Introduction to Aramean and Syriac Studies: A Manual*. Piscataway, New Jersey: Gorgias Press.

Arnold, Werner. 2011. “Western Neo-Aramaic.” In: Weninger, Stefan (ed.) *The Semitic Languages: An International Handbook*, 685-696. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.

Assemani, Joseph Simon. 1748. *Acta Sanctorum Martyrum Orientalium et Occidentalium in Duas Partes Distributa, Adcedunt Acta S. Simeonis Stylitae, vol.1-2*. Rome: Joseph Collins.

Banksira, Degif Petros. 2000. *Sound Mutations: The Morphophonology of Chaha*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins.

Bedjan, Paul. 1891. *Acta Martyrum et Sanctorum, vol. II*. Leipzig: Otto Harrassowitz.

Bedjan, Paul. 1894. *Acta Martyrum et Sanctorum, vol. IV*. Leipzig: Otto Harrassowitz.

Bekins, Peter. 2014. *Transitivity and Object Marking in Biblical Hebrew: An Investigation of the Object Preposition ʾet*. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.

Birnstiel, Daniel. 2019. “Classical Arabic.” In: Huehnergard, John and Naʿama Pat-El (eds.) *The Semitic Languages: Second Edition*, 367-402. London/New York: Routledge.

Bossong, Georg. 1985. *Empirische Universalienforschung: Differentielle Objekt-markierung in den Neuiranischen Sprachen*. Tübingen: Närr.

Brock, Sebastian. 1976. “Syriac Sources for Seventh-Century History.” *Byzantine and Modern Greek Studies* 2: 17-36.

Brock, Sebastian. 1979. “Syriac Historical Writing: a Survey of the Main Sources.” *Journal of the Iraqi Academy, Syriac Corporation* 5: 1-30.

Brock, Sebastian. 1997. *A Brief Outline of Syriac Literature*. Baker Hill, Kottayam, Kerala, India: St. Ephrem Ecumenical Research Institute.

Brockelmann, Carl. 1962. *Syrische Grammatik mit Paradigmen, Literatur, Chrestomathie und Glossar*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

Brooks, Edmund Wright (ed.) 1923. “John of Ephesus: Lives of the Eastern Saints (I)” In: *Patrologia Orientalis*. Paris: Firmin-Didot. 1-307.

Brooks, Edmund Wright (ed.) 1924. “John of Ephesus: Lives of the Eastern Saints (II)” In: *Patrologia Orientalis*. Paris: Firmin-Didot. 513-698.

Brooks, Edmund Wright (ed.) 1926. “John of Ephesus: Lives of the Eastern Saints (III)”

In: *Patrologia Orientalis*. Paris: Firmin-Didot. 151-285.

Butts, Aaron Michael. 2019. “The Classical Syriac Language.” In: King, Daniel (ed.) *The Syriac World*, 222-242. London/New York: Routledge.

Chabot, Jean-Baptiste. (ed.) 1927. *Chronicon Pseudo Dionysianum Vulgo Dictum I*. Louvain: L. Durbecq.

Coghill. Eleanor. 2014. “Differential Object Marking in Neo-Aramaic.” *Linguistics* 52(2): 335-364.

Comrie, Bernard. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

Enç, Mürvet. 1991. “The Semantics of Specificity.” *Linguistic Inquiry* 22(1): 1-25.

Fales, Frederick Mario. 2011. “Old Aramaic.” In: Weninger, Stefan (ed.) *The Semitic Languages: An International Handbook*, 555-573. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.

García, Marco García. 2005. “Differential Object Marking and Informativeness.” In: von Heusinger, Klaus, Georg A. Kaiser and Elisabeth Stark (eds.) *Proceedings of the Workshop “Specificity and the Evolution / Emergence of Nominal Determination Systems in Romance”*, 17-31. Konstanz: Fachbereich Sprachwissenschaft der Universität Konstanz.

Gragg, Gene. 1997. “Ge‘ez(Ethiopic).” In: Hetzron, Robert (ed.) *The Semitic Languages*, 242-260. London/New York: Routledge.

Guidi, Ignatius. 1903. *Chronica Minora [Text]*. Leipzig: Otto Harrassowitz.

Guillaumont, A. 1951. “Détermination et Indétermination du Nom en Syriaque.” *Comptes Rendus de Groupe Linguistique d’Etudes Chamito-Semitiques* 5, 1948-1951: 91-94.

Hämeen-Anttila. Jaakko. 2000. A Sketch of Neo-Assyrian Grammar. Helsinki: the Neo-Assyrian Text Corpus Project of the University of Helsinki.

原将吾. 2018. 「シリア語における目的語標示の使い分けと有生性・定性」『オリエント』 61(1): 13-26.

Hara, Shogo. 2018. “A Hypothesis on Differential Object Marking in Mäsqan: In Relation to Object’s Animacy/Definiteness.”『一般言語学論叢』 21: 65-85.

原将吾. 2019a. 「マスカン語民話テキストと Differential Object Marking」『言語学論叢』 オンライン版 12 (通巻 38): 19-27.

原将吾. 2019b. 「チャハ語の目的語標示に関する覚え書き」 *Studies in Ethiopian Languages* 8: 56-92.

Haspelmath, Martin. 2008. “Object Marking, Definiteness and Animacy.” In the course materials of *Syntactic Universals and Usage Frequency* at Leipzig Spring School

on Linguistic Diversity, March 2008.

Hasselbach, Rebecca. 2013. *Case in Semitic: Roles, Relations, and Reconstruction*. Oxford: Oxford University Press.

Hasselbach-Andee, Rebecca. 2019. "Akkadian." In: Huehnergard, John and Naʿama Pat-El (eds.) *The Semitic Languages: Second Edition*, 95-116. London/New York: Routledge.

Healey, John F. 2011. "Syriac." In: Weninger, Stefan (ed.) *The Semitic Languages: An International Handbook*, 637-652. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.

Huehnergard, John. 2019. "Proto-Semitic." In: Huehnergard, John and Naʿama Pat-El (eds.) *The Semitic Languages: Second Edition*, 49-79. London/New York: Routledge.

Iemmolo, Giorgio and Gerson Klumpp. 2014. "Introduction." *Linguistics* 52(2): 271-279.

Khan, Geoffrey. A. 1984. "Object Markers and Agreement Pronouns in Semitic Languages." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London* 47(3): 468-500.

Kidima, Lukowa. 1987. "Object Agreement and Topicality Hierarchies in Kiyaka." *Studies in African Linguistics* 18(2): 175-209.

Kievit, Dirk and Saliem Kievit. 2009. "Differential Object Marking in Tigrinya." *Journal of African Languages and Linguistics* 30(1): 45-71.

Kittilä, Seppo. 2002. *Transitivity: Towards a Comprehensive Typology*. Turku: University of Turku dissertation.

Klein, Udo. 2007. *Clitic Doubling and Differential Object Marking in Romanian*. Presented at the workshop "Case marking in Bantu and Romance," University of Stuttgart.

Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lent, Frederick. 1915. "The Life of St. Simeon Stylites: A Translation of the Syriac Text in Bedjan's Acta Martyrum et Sanctorum, Vol. IV. " *Journal of the American Oriental Society* 35: 103-198.

Lyons, Christopher. 1999. *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press.

Martin, Jean Pierre Paulin. 1876. *Chronique de Josué le Stylite Ecrite Vers l'An 515*. Leipzig: F.A.Brockhaus.

Meyer. Ronny. 2006. *Wolane: Descriptive Grammar of an East Gurage Language (Ethiosemitic)*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.

Meyer. Ronny. 2011. "Amharic." In: Weninger, Stefan (ed.) *The Semitic Languages: An*

International Handbook, 1178-1212. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
三津間康幸・石渡巧 2004. 「『祭司アイタイラーハーと助祭ハプサイの殉教』訳註」『エイコーン—東方キリスト教研究』 30: 57-73.
三津間康幸・石渡巧 2005. 「『カルカー・ド・ベート・スロークとその地の殉教者達の歴史』訳注・一」『エイコーン—東方キリスト教研究』 31: 61-77.
三津間康幸・石渡巧 2006. 「『カルカー・ド・ベート・スロークとその地の殉教者達の歴史』訳注・二」『エイコーン—東方キリスト教研究』 33: 93-112.
三代川寛子(編著). 2017. 『東方キリスト教諸教会——研究案内と基礎データ』明石書店.
Mohanan, Tara. 1994. *Argument Structure in Hindi*. Stanford, California: CSLI publications.
Muraoka, Takamitsu. 1979. "On Verb Complementation in Biblical Hebrew." *Vetus Testamentum* 29(4): 425-425.
Muraoka, Takamitsu. 1987. *Classical Syriac for Hebraists*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
Muraoka, Takamitsu. 2005. *Classical Syriac: A Basic Grammar with a Chrestomathy*. Second edition. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
Muraoka, Takamitsu. 2013. *Classical Syriac for Hebraists*. Second, Revised edition. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
Nöldeke, Theodor. 1898. *Kurzgefasste Syrische Grammatik*. Second edition. Leipzig: Chr. Herm. Tauchnitz.
Nöldeke, Theodor. 1904. *Compendious Syriac Grammar*. Crichton, James A. (transl.). London: Williams and Norgate.
Ormazabal, Javier and Juan Romero. 2013. "Differential Object Marking, Case and Agreement." *Borealis: An International Journal of Hispanic Linguistics* 2(2): 221-239.
Pat-El, Naʿama. 2019. "Syriac." In: Huehnergard, John and Naʿama Pat-El (eds.) *The Semitic Languages: Second Edition*, 653-678. London/New York: Routledge.
Payne Smith, J. 1999. *A Compendious Syriac Dictionary*. Eugene, Oregon: Wipf and Stock Publishers, reprint of 1902 ed.
Peeters, Paul (ed.) 1910. *Bibliotheca Hagiographica Orientalis*. Brussels: Society of Bollandists.
Reed, Morgan. 2015. "John of Ephesus." (http://syri.ac/johnofephesus) 2021/11/19 最終閲覧.
Rubin, Aaron D. 2004. *Studies in Semitic Grammaticalization*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University dissertation.

佐々木冠. 1999. 「水海道方言における格の範疇」 筑波大学博士論文.

Schwenter, Scott A. and Gláucia Silva. 2002. "Overt vs. Null Direct Objects in Spoken Brazilian Portuguese: A Semantic/Pragmatic Account." *Hispania* 85(3): 577-586.

Shain, Cory Adam. 2009. *The Distribution of Differential Object Marking in Paraguayan Guaraní*. MA Thesis, The Ohio State University.

Sinnemäki, Kaius. 2014. "A Typological Perspective on Differential Object Marking." *Linguistics* 52 (2): 281-313.

Sokoloff, Michael. 2009. *A Syriac Lexicon: A Translation from the Latin, Correction, Expansion, and Update of C. Brockelmann's Lexicon Syriacum*. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.

Streck, Michael P. 2011. "Babylonian and Assyrian." In: Weninger, Stefan (ed.) *The Semitic Languages: An International Handbook*, 359-396. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.

高橋英海. 2017. 「アッシリア東方教会について」 三代川寛子(編著). 『東方キリスト教諸教会――研究案内と基礎データ』 322-332.明石書店.

寺崎英樹. 1998. 『スペイン語文法の構造』 大学書林.

Thackston, Wheeler M. 1999. *Introduction to Syriac: An Elementary Grammar with Readings from Syriac Literature*. Bethesda, Maryland: IBEX Publishers.

Tosco, Mauro. 1994. "On Case Marking in the Ethiopian Language Area (with special reference to the subject marking in East Cushitic)." *Sem, Cam, lafet Atti della 7a Giornata di Stuide Camito-Semitica e Indeuropei*. 225-244. Milano: Centro Studi Camito-Semitici.

Trombley, Frank R. and John W. Watt 2011. *The Chronicle of Pseudo-Joshua the Stylite*. Second edition. Liverpool: Liverpool University Press.

Tsehay Abza Debo. 2008. *Inflectional and Derivational Morphology of Nouns in some Gurage Languages: A Comparative Approach*. MA Thesis, Addis Ababa University.

Vitale, Anthony J. 1981. *Swahili Syntax*. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.

Wetter, Andreas. 2010. *Das Argobba: Eine Deskriptive Grammatik der Varietät von Shonke unt T'ollaha*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.

Wright, William. 1882. *The Chronicle of Joshua the Stylite Composed in Syriac A.D. 507*. Cambridge: Cambridge University Press.

Yamamoto, Mutsumi. 1999. *Animacy and Reference: a Cognitive Approach to Corpus Linguistics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.